60-230

糸左近著

生理と病理

皮膚の巻

才一巻

東京　金刺芳流堂

緒言

一、本書は醫學生及び素人に、人體の生理と病理との智識を與へ、兼て又實地開業醫や、中學程度の生理衞生科教員の參考に供せん爲、著したのである。

一、生理と病理を、知しめようとするには、勢、之と密接の關係を有する解剖學と衞生學も說いてかゝらねばならぬから、此の二學も比較的詳しく書いた積りである。されば本書を「解剖生理及び衞生病理」と、命名しても可い位である。

一、爾來開業醫試驗を受ける者の極めて多くあるにも拘らず、之に合格する者の甚だ少きは、種々の原因も有らうけれど、一は大抵の醫書は文章が甚だ拙いし且つ拮掘贅牙い文字を書いてあつて、之を了解するに甚だ困難なるのと、今一は

密接に關係する右四科即ち解剖・生理・衛生・病理を聯絡して書いた物が無いから、初學者は容易に其の智識を得難きのみならず興味を感ずること少いのも、確かに不合格の大原因を作つてゐるに相違無い。

第一例　某生理學書に「混堂は公衆衛生上必要なり」と書いてある。大抵の學生は「混堂」とは何の事か了らぬ。或者は沐浴の章に書いてあるから「混浴」の事であらうと誤解したさうだ。若し之を「湯屋は公衆云々」と書いてあるか左も無くば「ゆや」と假名を附けてあつたら、誰にでも了るでは無いか。

第二例　某解剖書に「皮脂腺は眞皮の網狀部中に在り殊に毛髮の近傍を以て然りとす」とあるが初學者には「然りとす」の意味が甚だ了解し難い。若し之を「皮脂腺は眞皮の網狀部中に在り、殊に毛髮の近傍には數多くある」と直したらば如何なる人にも了り易いでは無いか。

第三例　其の解剖書を讀んで皮脂腺の構造は斯々で有ると知つた所で、之が何の必要あつて此部に在るものかと了らぬとすれば、從つて其の構造を記憶し難く、且つ興味も無い。所を構造を說くと共に其の生理から衛生病理までを說いたならば、相聯絡して記憶し易いのみならず、興味も多くあらうものを。

所が本書は是等の弊を斷然免れたと自ら信じてゐる。

一、中學程度の敎師が敎場に臨み、生理衛生を講じてゐると、生徒より往々病理の質問を受ける、所が先生は知らぬ。『余は生理衛生こそ受け持て、病理を講ずる役目で無い、斯る事は宜しく醫師に聽く可しだ』と跳ねつける。されど跳ねつけてる敎師も、本心には快く無いし、生徒は勿論不滿足である。若し『凍瘡は何ういふ譯で出來るものでせうか』と尋ねられた時に、『劇しい寒さに觸れると、其部の血管は、始め收縮するけれど、寒さの愈加はるに從ひ、其部の神經が痲痺れ、血管は却つて膨脹し、血液は之に鬱積し、遂に痛み且つ痒みを感じ、甚しきは壞疽るやうになる、之を凍瘡と云ふ。故に斯

樣斯々に衞生を實行せよ」と說明したならば、生徒は病理を悟ると同時に、其の生理衞生の智識も明確になるでは無いか。本書を著した理由の一は爰に在るのだ。

一、開業醫が患者を取り扱つてると、其の疾患部の解剖や生理を調べねばならぬ必要が往々起る。所が之を調べるに就いては色々の書物を取り出さねばならぬ。然るに本書一部あれば直樣其處に書いてある。之も本書を著した理由の一である。

一、民間治療法だの、通俗衞生學だの、或は治療顧問などいふやうな素人用の書籍は世に澤山著してある。けれど夫等の書物は、何れも其の說方が簡單で、生理解剖の智識に暗き素人が之を讀むと、却つて半可通になり、往々危險な出來事を惹起したる例が無いでは無い。然るに本書は文章こそ通俗なれ、專門書と同じく、根柢より詳密に說いてあるから、本書を熟讀すれば、夫等の危險を招く憂は決して無いと信じてゐる。

一、專門的に解剖學を基礎として編纂せんとするには、骨骼の卷から說き始めるが正當なれど、眼に觸るゝ物より敎へよといふ敎育の主義から言へば、皮膚より說き始め五官の大體に及ぼし、それより漸々深部の臟器に入る方が實用的で、且つ興味が有らうと思ふ。故に余は左の如き順序に說くのである。

皮膚の卷　○五官の卷　○筋骨の卷　○消化器の卷
○心肺の卷　○神經系の卷　泌尿生殖器の卷

一、何れの卷より讀み初めても、恐らく解らぬことは無からうけれど、可成は皮膚の卷より、右の順序に讀んで頂きたいものである。

一、書中には疎漏杜撰の箇所も定めし多からうけれど、余はまだ年老いたりといふ譯でも無いから、世の文明進歩と共に益醫學を研究し、版を重ぬるに從ひ、益訂正增補する積りである。請ふ之を諒とせられよ。

時維明治四十一年十月八日の朝冷水浴を終へて

著者識す

生理と病理　皮膚の卷　目錄

總論

身體の構造及作用の概要……一頁
組織とは如何……二
細胞とは如何なる物か……三
組織の分類……四
結締組織　彈力組織　軟骨組織　骨組織　內皮組織　色素組織　腺狀組織　脂肪組織　血液　淋巴液　上皮組織　筋組織　神經組織

本論

◉皮膚の解剖

表皮は如何なる物か……一三
眞皮は如何なる物か……一五
皮下結締織とは如何……仝
毛髮の構造は如何……一六
毛囊の構造は如何……一七
爪の構造を說け……一九
皮腺とは如何……二〇
汗腺の構造を說け……仝
皮脂腺の構造は如何……二二

●皮膚の生理

皮膚は如何なる効用あるか……二五
毛髮の効用は如何……二七
皮膚は呼吸作用を營む……二八
汗は如何なる物か……二九
汗の成分は如何……三〇

汗の比重及反應等は如何……三〇
汗の量及汗の增減する狀態……三一
汗は體溫を調節す……三二
汗の分泌と神經系との關係……三三
皮脂は如何なる物か及其作用……三四
皮膚の吸收力は如何……三五
皮膚全面に漆を塗れば果して死ぬるか……三六

●皮膚の衞生

皮膚を清潔にせよ……三九
沐浴の種類は如何……仝
各種沐浴の利害得失……四一
溫泉浴　日光浴　湯槽浴　蒸氣浴　海水浴　淡水浴　瀑布浴　冷風浴　冷水灌注　水槽浴　冷水摩擦　雨浴　皮膚反應　沙浴
毛髮の清潔法は如何……四七
皮膚と衣服との關係……四八
衣服と保溫との關係……四九
衣服一般の心得……五〇
衣服の重さと壓縮性……五一
衣服の纖維間……五三
空氣と衣服との關係に於ける疑問……五四
衣服と濕氣との關係……五五
衣服各種の地質に於ける優劣論……五七
織物の空隙を利用せよ……五八
衣服の製法に就いて……五九
衣服の染色……六一
衣服の洗濯法に就いて……六二
コルセット　帶　帽子、頭巾　襟卷と手袋　足袋　雨具
衣服の附屬品に就いて……六三

夜具に就いて……六七
胸當　腹掛
皮膚を美麗ならしむる法……六九
色を白くする法は無きか……七五
白色法其一　白色法其二　白色法其三　白色法其四　白色法其五　白色法其六　白色法其七　白色法其八　白色法其九　白色法其十　白色法其十一　白色法其十二　白色法其十三　白色法其十四　白色法其十五
無害なる化粧法……八四
石鹼　糠　麩　洗粉　白粉　生臙脂

●皮膚の病理總論

皮膚病上の語釋……九一
皮膚病の原因……九六
皮膚病の豫防法……九七
皮膚病の診斷心得……九七
全身病の皮膚診斷法……九八
皮膚の色　皮膚の發疹狀態　皮膚の發汗　毛髮及爪甲の變常　皮膚の發汗　皮膚の溢血　皮膚の瘢痕　皮膚の水腫　皮膚の氣腫
皮膚病療法の心得……一一五
皮膚病の系統……一一九

●皮膚の病理各論

毛髮に關する疾病
禿頭病……一二一
神經性禿髮症……一三一
先天性禿髮症……一三二
後天性禿髮症……一三三
糠粃疹性禿髮症……一三四
生理的禿髮症……一三五
白髮症……一三六
結節狀裂毛症……一三九

贅毛症……一四一

皮膚の炎症に關する疾病（神經炎症なども含む）

濕疹（俗に胎毒、クサ、カンガサなどの名がある）……一四三
糠粃疹……一四八
痒疹……一五〇
鱗屑癬（一名乾癬、俗にハタケ又はミヅムシと云ふ）……一五一
酒皶鼻（俗に赤鼻と云ふ）……一五九
火傷（俗にヤケドと云ふ）……一六三
凍傷（ヒビ、アカギレ、シモヤケも含む）……一六八
皮脂漏……一七一
面疱（俗にニキビと云ふ）……一七六
多汗症（油手、油足、腋臭も含む）……一七九

皮膚の寄生物及傳染性を有する疾病

疥癬（俗に之をヒビン或ばシツと云ふ）……一八四
頭蝨……一九六
衣蝨……一九九
毛蝨（俗に之を陰虱（クブジラミ）と云ふ）……二〇〇
白癬（俗に之をシラクモと云ふ）……二〇八
頑癬……二一〇
瘢風（俗にナマヅと云ふ）……二一二
紅色陰癬……二一三
癩病……二一四

雜部

蕁麻疹（俗に風花又は風ぼろしと云ふ）……二二六
母斑（俗にアザと云ふ）……二四七
雀斑（俗にソバカスと云ふ）……二五〇
夏日斑……二五一
胼胝（俗にタコと云ふ）……二五二
雞眼（俗にウチノメと云ふ）……二五四
疣贅（俗にイボと云ふ）……二五五
飛火（ヒビ）……二五八
鱗癬症……二五九
紅斑……二五九
汚疱……二六〇
紫斑又血斑……二六〇
藥疹（ウルシカブレ、膏藥カブレも含む）……二六一
汗疹（俗にアセモと云ふ）……二六八
癤腫と癰疽（ちうのうやう）疔（又面疔（めんちやう）も含む）……二六八
狼瘡……二七二

附錄

軟下疳……二八六
梅毒……二八七
痲病……二九一
痲疹……二九四
痘瘡……二九九

生理と病理　皮膚の卷

糸　左　近　著

總論

身體の構造及作用の概要

腔とは其中に物を藏す可き樣に空洞になつて

身體の構造及作用の概要――皮膚の事を說かうといふには、其の以前に、身體一般の構造や作用に就いて、其の概略の觀念を讀者に與へてからにせねばならぬ。何となれば、皮膚も身體の一部であるから、之と關係する身體一般の器官や組織の智識が更に無いと、直ちに皮膚の章を讀んでも、何が何やら一向了解せられぬ節があるからである。されば今其の最も主要なる事柄を擧ると、堅い骨は家の柱とも礎ともに譬ふ可きもので、軟かき筋肉これに着き、皮膚は其の上を蔽うて全身を包み、眼は色を視、耳は音を聽き、鼻は嗅ぎ、舌は味ひ、四肢は自由に運動して種々の用を足す。右は外部の狀態であるが、更に又內部を窺へば、頭腔の中には腦髓が在つて、靈妙不可思議にも色々な事理を識別し、又これと關係する神經と

ふる所を云

いふ纖維が全身に蔓延してゐて、各部より種々の狀況を腦に報告し、又腦より各部に至る可き命令の傳導線ともなる。又胸腔には肺臟心臟を容る、肺臟は空氣を呼吸し、心臟は血液の湖となりこれに出入してゐる川卽ち脈管は其の支流甚だ多く、分れ分れて身體中に布かれ、其中を通つてゐる水、卽ち血液は常に流動して晝夜に止むことが無い。又腹腔には胃腸肝などの消化器があつて、取つた飲食物を消化し、消化せられたる食物は血管中に吸ひ込まれ、血液となる。血液は身體諸部を養ひ、或は又肺臟等より酸素を受け取り、酸化作用を起して溫熱を身體中に配る。其の他皮膚からは汗を洩し、肺臟からは痰を出し、腹腔の腎臟からは尿卽ち小便を膀胱へ輸つて膀胱より尿道に出す、是等は何れも身體中の老廢物を體外に流し出す役を掌つてゐる。尙一々精細に檢すれば實に巧みな裝置である。されば詳しい事は各卷に至つて追々に述ぶることにしよう。

組織とは如何

組織とは如何——人體は薄い皮膚堅い骨軟かい筋肉、或は流るゝ血液其他色々の器官から出來てゐて、其の構造は甚だ複雜なれど、其の器官を造つてゐる材料は實に僅少である。之を物に譬へて見ると、大きな家には玄關、茶の間、客坐

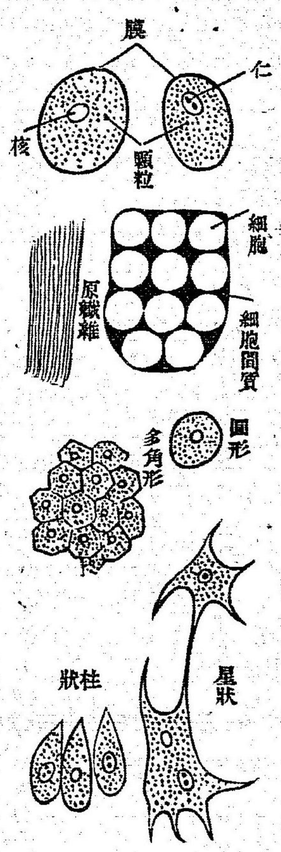
細胞とは如何なる物か

敷、寢間、書齋、湯殿など多くの房はあるが、其の材料は何れも木と石或は壁などから出來てる樣なものだ、人體に於ては其の材料を組織と名づくるのである。顯微鏡を以て、其の組織を視れば、單一な物では無くて、多くの小部分が集つて出來てゐる、恰かも一枚の塀が多くの煉瓦石から成り立つてるやうなものだ。此の一個の煉瓦卽ち單位をなしてる一小部を細胞と言ふ。して又煉瓦石を唯積み重ねた丈では直にガラ〳〵と崩れるから、之を結び連ねるセメントがあるされば細胞にも矢張セメントの如き用を爲す物質が無くてはならぬ、此の物質を細胞間質と呼ぶ。其他組織を造るには、尙原纖維と云ふ物もある。乃で其の細胞細胞間質及び原纖維から人體は出來てるので、此の三者を總稱して成形原素と名づく。去りながら細胞は實に其源で、他の二者も畢竟するに細胞から變生したものである。

細胞とは如何なる物か——細胞は通常其の形圓く、其の內容は軟かい物質で、此の物質をプロトプラスマ Protoplasma 譯して原形質といふ、恰かも微細な點の集つてる樣に見ゆ、此の點一つを顆粒と云ふ。又、細胞の中に其の質稍固い

組織の分類

第一圖　細胞

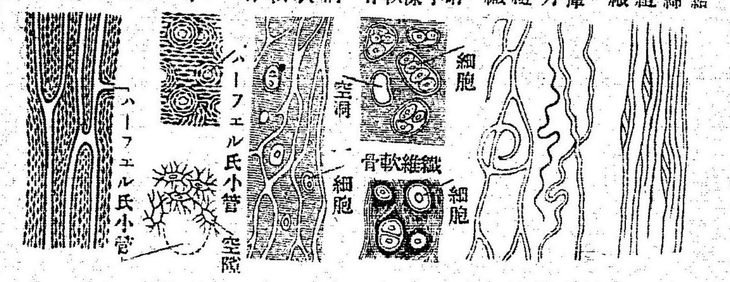


個以上の者もある。而して細胞の全體を膜を以て包む。斯樣に細胞は元來圓いものなれども、其の身體を構造するに當つて、種々に形を變へ、圓形、多角形、柱狀、星狀等をなすものである。

組織の分類——右の如く細胞は色々に變化して各組織を造る、換言すれば各組織は各固有の成形原素に依つて造らるゝもので學者は是等の組織を分ちて結締質・血液・淋巴液・上皮組織・筋組織及び神經組織とし、結締質を又分つて、結締組織・彈力組織・軟骨組織・內皮組織・色素組織・腺狀組織及び脂肪組織となす。

核が有り、核の中に又仁を容れてゐるのがある。核及び仁の數は一個と定まらず、二

第二圖



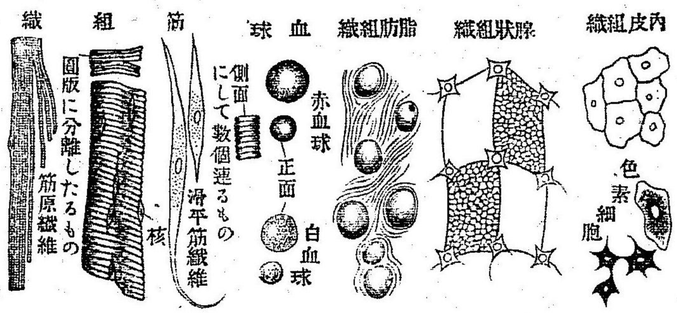
結締組織——體中の諸部分を充すもので細胞・原質及び纖維から成る。細胞は扁平で其の排列密着で無い。原質は柔かで殆んど流動體に近きものがある。此の原質の諸所に空隙有つて其中に細胞を納む。纖維は極めて細く、集つて一束を爲し、種々の方向に走る。其の方向は規律正しきも有れば不揃なるもある。又密なるも有れば疎きも有る。

彈力組織——其の性質非常に彈力を有するより、此の名が附いたのである。常に結締組織中に存在し、細胞も細胞間質も無く、唯纖維のみのもので、太いのも有れば細いのもある。聲帶の如きは此の組織より成る。

軟骨組織——軟骨を別つて硝子樣軟骨・纖維軟骨及び網狀軟骨の三種とす。硝子樣軟骨は呼吸器・鼻・肋骨・關節及び軟骨縫合に現存し、僅かに青色を帶びたる硝子

彈力組織は結締組織の一部と見做すも可い

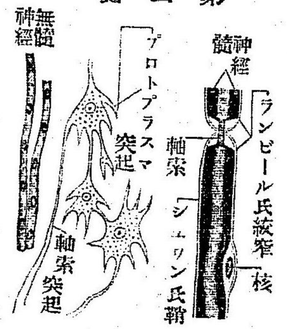
第三圖



の如き色をなす。原質は纖維性結締組織の元質に屬す、可きもので、此の原質は甚だ固くて著しい彈力を有し、之を煮沸すれば軟骨膠を生ず。纖維軟骨は一名結締組織性軟骨と稱し、椎間靭帶・關節間軟骨及び腱の骨面を通過する部分に在り、多量の纖維より成る。網狀軟骨は一名彈力軟骨と言ひ、硝子樣軟骨と大差が無い、其の異なる點は原質中に彈力纖維は網狀をなすことと、其の色は黃を帶びてることゝである。耳軟骨會厭軟骨等に存す。三種の軟骨は何れも其の質强固で、彈力に富み、軟骨膜と名づくる膜を以て其の表面を被ふ。一般に細胞は大きくて圓形なるか、或は一側の扁平なるが最も多い、多少集合して群を爲し、原質内なる空洞中に存す。

骨組織——骨は軟骨に比ぶれば其質尙一層に硬く、頗

第四圖



る彈力が有る。此の彈力が有つて且つ硬きは有機成分と無機成分との混合物であるからである。而して周圍は堅硬質より成り、内部は海綿質より成る。中心には空洞を存す、之を髓腔と云ふ。髓腔には赤くて軟かな物質を納む之を骨髓と云ふ、殊に長き骨の斷面に在つては其の觀一層著明である。骨の未だ乾かぬ物は膜を以て其の表面を被ふ、之を骨膜と云ふ。抑〻堅硬質と云ひ海綿質と云ふも其の組織は同一で、無數の薄い板が相重りて層をなして、ゐる、これが卽ち骨組織の原質で、各層の間には小なる空隙が有つて相並んでゐる、其の空隙は極めて微細なる數多の管に由つて互に相連絡し、骨細胞は此の空隙中に存す。又、骨質中には多くの小管が貫通してゐる、之をハーフェル氏小管と云ふ、此の管は血液の通路である。

内皮組織——内皮組織は極めて扁平なる細胞と之を結合せしむる甚だ僅少の細胞間質とを以て、極めて薄き膜狀をなし、血管の内面及び體内の諸腔を包んで

色素組織

腺狀組織

脂肪組織

血液

ゐる。

色素組織――普通の結締組織に近きものなれども、唯其の中にメラニンと云へる黒色の色素を含める細胞の存するが異つてゐる。而して短少の突起を有し、星狀或は多角形を呈するもある。眼球の脈絡膜や虹彩などは、此の組織を有つてゐる。

腺狀組織――纖維が網の樣に交叉結合し、其の交叉せる所に、星狀で且つ扁平なる細胞が附着し、其の網の眼に當る所には別に數多の小さい圓形の細胞が一面に塡めてゐる。脾臟や淋巴腺などの大部は此の組織から構成せられてゐる。

脂肪組織――細胞は圓形或は卵圓形で頗る大きく、其の內容は脂肪を以て充滿し、爲めに核は胞壁に押し附けられてゐる。是等の細胞は次第に集つて葡萄狀に塊り、其の間は結締組織に由つて纏はる。此の組織は身體の諸部に在つて、全體の殆んど二十分の一を占む。

血液――赤い色の液體で脈管に由り斷えず身體中を流れてゐることは誰も能く知る所、而して汗や痰の液體とは異り、身體の大切なる一部分なることを知つ

淋巴液

て居らねばならぬ。其の成分は、一つの流動體と其の中に浮游する固形體とから成る。流動體は之を血漿と云ひ、固形體は之を血球と云ふ。畢竟ずるに、固形體の血球は細胞で、流動體の血漿は細胞間質卽ち原質に當るものである。血漿は極めて淡い黃色を帶びた透明な物で、血球は赤血球白血球の二種より成る。赤血球は核無く、兩面の凹んだ極めて小さい圓板狀をなし、赤い色素を含んでゐる。之を空氣中に出せば互に近づいて、恰かも錢を連ねた樣な姿になる。白血球は核を有し、色素を含んで居らぬ。其の大きさは赤血球より大きいのもあれば、小さいのもある。其の數は赤血球五百に對し、白血球は一の割合である。此の白血球は血液中に存するばかりで無く、諸組織中にも在る。例へば腺狀組織の網眼を充す細胞も、卽ち白血球であるし、又、其の自動力に由つて血管より外出し、諸所を徘徊することも有るやうなものだ。

淋巴液――血液が血管中を流るゝが如くに、此の液も淋巴管內を流れてゐる無色透明の液體で、淋巴漿と名づくる流動體と、其中に浮游する淋巴球と名づくる固形體とから成る。恰かも血液中の血漿と血球とに於ける樣な道理である。

上皮組織

筋組織

心臟は意に滯動せしむることが出ず

上皮組織——此の組織は身體の全表を被ひ、外界と通ずる諸腔諸管例へば口腔氣管などの内面をも裹むものである。其の細胞は大抵軟かで、被むる所の壓力に應じ其の形狀を變ずるの性があるから、形狀に依つて色々の名を附す、今其の主なる者を擧れば、扁平の細胞より成るものを扁平上皮と云ひ、柱狀の細胞より成るもの之を柱狀上皮と云ひ、甄毛を有する細胞より成るもの之を甄毛上皮と云ふ。扁平上皮細胞は一名を磚狀細胞と稱へ、正しき形狀を有する者は稀で、唯網膜の部なる色素上皮のみは稍正規の六角形をなしてゐる。柱狀上皮細胞を側方より見るときは、其の高さ著しく廣さに超過し、上面より之を見るときは恰かも六角形をなすが常である。甄毛上皮細胞は柱狀上皮細胞の一種で、其の游離面に微細の毛即ち甄毛を有す、此の毛は生活中一定の方向を以て活潑に顫動してゐる。

筋組織——分つて二種となす。一を横紋筋纖維或は隨意筋と呼ぶ、軀幹四肢などの筋肉の如きを云ふ。一を滑平筋纖維或は不隨意筋と呼ぶ、腸管或は血管などの筋肉は之に屬す。横紋筋を顯微鏡下で檢すれば暗黑なる稍廣き横線と鮮明なる稍狹き横線と交る〳〵走るを見る。(而して又之を強く廓大して檢するときは各横線中に於て更に横線を見る、即ち鮮明線中に一の暗黑線を副板と云ふ、又暗黑線中更に一の鮮明線あり之を中板と名づく。されど是等の横線中に在る諸板は通常同一でも無く又其の有無も定まらぬから、敢て重要の物では無い。)纖維の周圍は筋纖維鞘と名づくる透明の薄膜に依つて包まれ、其の鞘の内面に核を有す。筋纖維は横紋に從ひて之を圓板に剝離することが出來る。又横紋の外に、縱徑に走る細い線がある。一定の反應藥例へば格魯謨酸溶液を用ふるときは此の縱線は愈著明となり、遂に其の筋纖維は縱向に分裂して齊しく横紋を有する微細の纖維となる、之を名づけて筋原纖維と云ふ、この筋原纖維は互に併行に集合して縱走の原纖維束を生じ、肉漿に由つて相膠着し、更に隣接の原纖維束と合し、遂に筋纖維を構成してるのである。滑平筋纖維は純然たる細胞で、其の兩端は鋭く尖り、中央に核を有し、次第に集つて大なる束を作る。而して紡錘形或は圓柱狀或は稍壓平狀をなす所の細胞である。

米ぬりれご横紋筋である。

神經組織――神經細胞、神經纖維及びノイログリアと名づくる物質より成るものである。神經細胞は種々の形狀を爲し、大なるあり小なるあり、共に一突起或は二突起或は二以上の突起を具へ、大なる核と仁とを有し、其の突起は次第に細小な枝を生ずるもあるし、又、枝を生せずして直ちに神經纖維となるもある。前者をプロトプラスマ突起と云ひ、後者を軸索突起と云ふ。細胞はプロトプラスマ突起に由つて相互に連結してゐる。神經纖維を有髓神經纖維及び無髓神經纖維の二種に分つ。有髓神經纖維は中央に軸あり、之を軸索と云ひ、其の周圍には光輝ある粘液狀の物質がある、之を神經髓と云ふ。神經髓の外圍には透明なる薄い膜が有つて之を繞る、名づけてシュワン氏鞘と云ふ。又、神經纖維は所々にランビール氏絞窄と云へる結紮がある。又、纖維中所々に核を存す。無髓神經纖維は神經髓無く、直ちにシュワン氏鞘を以て包まる。ノイログリアは極めて軟かな物質で、グリア細胞と名づくる細胞より成り立つてゐる、尙詳しき事は神經系の卷に於て說くことにしよう。

表皮は如何なる物か

本論

皮膚の解剖

皮膚は筋肉の外面を蔽うて、全身を包んでゐる所の彈力の有る强い皮、卽ち膜である。皮膚と筋肉との間には、通常脂肪を含める軟い組織が有つて、筋肉間の凹所を塡めてゐる。其の厚さは二・三乃至二・七密迷、卽ち最も厚い部分と雖も、我が國の尺で言へば、僅かに八厘餘に過ぎぬ。けれど素人の想像するが如く唯一層の單純なる皮より成るものでは無くて、其の實は、表皮、眞皮及び皮下結締織の三層から成り、其の又一層が又分れて、錯雜なる組織を爲し、其の間に皮膚の附屬物たる皮脂腺・汗腺が散在し、或は皮膚の變形物たる毛髮・爪甲が交はり、實に靈妙な裝置をなしてゐる。故に其の生理や病理などの蘊奧を叩かんとすれば、人間一生の仕事である。乃で余は之より其の一斑を說くが、讀者尙深く之を研究せんとならば必ず皮想の觀をなす勿れ。

表皮は如何なる物か――表皮は更に別つて粘液層・中間層及び角層の三層とな

る。角層は最も上層で、總論十頁に述べた所の扁平上皮細胞から成り、それが重疊して恰かも瓦を積み重ねた形を爲し、結合質を以て相互に膠着してゐる。されど次第に鱗片狀を以て剝離し、其の下層なる粘液層の細胞が段々に上進して之を補ひ、新陳代謝を營むものである。彼の雲脂と云ふも卽ち此の角層の剝離した物だ。中間層は手掌足蹠の如き强厚なる部分にのみ在るので、角層の下位を占め、透明なる細胞より成つてゐる。粘液層は一名をマルピギー氏層とも云ひ、角層の下際に位置を占め、眞皮の乳頭間を塡めてゐる。細胞は有核の上皮細胞から成り、層の異なるに從つて其の形が違ふ。上部は圓形で、無數の小さな刺棘を有し細胞と細胞との間に在る結合質を貫いて、隣の細胞と連つてゐる。下部卽ち眞皮の乳頭を塡めてゐる部は圓柱狀の細胞で稍長い根を有す。又粘液層の深部に在る細胞間及び細胞內には微細の色素顆粒を沈着してゐる。此の顆粒は眞皮の最も表層に在る圓形或は紡錘形の色素細胞に原づくもので、人種に隨ひ、皮膚色の同じからざるは、此の色素の量が異るからである。卽ち同一の色素も量少ければ皮膚は黃色を呈し、量多ければ皮膚は深黑色となる。彼の野

中間層の在る所は粘液層と中間層の下に在り

色素細胞は人體に在つて乳頭には最も多く皮中より上に出て遂に表皮に解するのである

蠻の民の入墨するのは、此部に人工的の色素を入るゝのである。表皮の角層は前にも述べた通り絕えず新陳代謝するけれど、此部は然うで無いから、入墨は仲々容易に消え去らぬ。嗚呼文身は決して爲すべきものでは無い。

眞皮は如何なる物か

眞皮は如何なる物か——眞皮は纖維樣結締織と彈力纖維とから成る。表皮には血管も神經も無いが、眞皮には數多の血管や神經が錯雜してゐる。眞皮を別つて二部となす、其の一は乳頭部で、其の一は網狀部である。乳頭部は表皮の粘液層下に位置を占め其の上面には乳頭と名づくる小突起が無數に有つて、表皮の下面なる無數の凹所へ相嵌つてゐる。此の乳頭突起の中には表皮を養ふ可き血管を有するもの之を血管突起と云ひ、神經の末端を有するもの之を神經突起と云ふ。網狀部は眞皮の深部卽ち乳頭部の下位であるが、其の境界は判然と有る譯では無くて、次第に移つて行くので、唯乳頭部の組織は微細で其上緻密なれども網狀部は厚く大きく、且つ粗疎たる網狀を形成してゐるだけが異つてゐる。彼の毛根や皮脂腺及び肝腺は此部に含つてゐるのである。

皮下結締織とは如何

皮下結締織とは如何——皮下結締織は眞皮の下層に位置を占む。眞皮と同じ

く纖維樣結締織と彈力纖維とから成れども、彈力纖維は唯僅かに混在するのみである。而して大いに脂肪を含有することは眞皮と甚だ異つてゐる。

毛髮の構造は如何

毛髮の構造は如何——

毛髮は屈撓すべき彈力性の角質糸狀で、表皮の變形物である。手掌・足蹠・手指・足趾の背の第三節・眼瞼外面・陰莖の龜頭・包皮裏面・陰唇の一部・唇緣を除くの外は全身の表面に生えてゐる。これに長・短・小の三種類がある、卽ち頭髮の如きは長毛で眉毛の如きは短毛、毳毛の如きは小毛に屬す。何れも毛根・毛幹の二部に別つ。毛根は眞皮の網狀部中なる毛囊內に在るが、時には皮下結締織內にも達してることがある。毛根の下部は大いに膨れて腔洞を有す此部を別に名づけて毛球と云ふ。卽ち毛球の末端は陷沒し、毛母を含んでゐる。毛幹は表皮の表面に突出してゐる部の名稱で、皮質及び髓質より成る。皮質は毛幹の基質で、紡錘狀の扁平細胞より成り、顆粒狀の色素を含み、毛幹上皮一名毛髮表皮に由て被覆せらる。又皮質の色は褐色或は黃色で、細胞間に小空隙が有つて空氣を含んでゐる。又、毛幹上皮は毛根部に於ては單層の多角細胞で恰も屋瓦の形に似たれども、毛幹部に至ると橫向の纖維狀を爲す。

毛囊の構造は如何

毛囊とは如何——

毛囊は外皮の陷沒したる場所で、毛根を鞘狀に圍んでゐる、之を毛根鞘と毛囊鞘との二部に分ち、尙、毛囊には毛母及び毛囊筋を有す。毛根鞘は內毛根鞘と外毛根鞘とに別れ、內毛根鞘は角層の一系で、毛囊に皮脂腺の開口する部までは、其の性質、皮膚の角層に同じけれども、其の開口部以下は三層から成り立つてゐる、乃ち最も內層なる小表皮は毛の毛幹上皮と同一の細胞から成り、毛根鞘と毛とを境界す。次の層はホックレー氏層と云ひ、長多稜形の有核細胞より成る。其の次の層はヘンレー氏層と名づけ、扁平長形な

第五圖

毛髮を縱斷したる想像圖

毛幹上皮に依りて被覆せられたる毛髮

毛髮の縱斷面

硝子膜は眞皮乳頭部の一系と看做すべきものならんか

る無核細胞の單層から成り、外毛根鞘に接す。外毛根鞘はマルピギー氏層の一系で小多角形の有核細胞から成れども、其の外側の方は圓柱狀の細胞より出來てゐる。毛嚢鞘は毛根鞘の外側に位置を占め、眞皮の一系である。之も三層から成り立つ。最も内層は硝子膜で、下は毛乳嘴體の顯部に終り、上は眞皮と表皮との境界に達する透明の薄層である。次の層は内纖維膜で、主に横向の結締織束より成り、上は眞皮の乳嘴體層に移り下は毛乳嘴體を造る。其の次の層は外纖維膜で主に縱向の有核結締織束より成る。偖又茲に一言す可きは、内毛根鞘の三層は其の下部相混同して毛球の細胞と境界を畫くこと無く相接してゐることゝ、毛嚢鞘には血管や神經の分布してることゝである。毛母を一名毛乳頭と云ひ、毛嚢の底部に在つて血管神經に富み、毛球に接す。毛を養成する所である。毛嚢筋は一名立毛筋とも云ひ、眞皮の上部より斜に皮脂腺の下際を經て毛嚢鞘の外層に附着す。此の筋收縮すれば皮脂腺の分泌を起し、或は毛を直立せしめ所謂雁皮を生ぜしむ。馬及び其他の動物は此の筋最も能く發育し、蠅を逐はんが爲に之を收縮して近傍の皮膚を震動せしむ。尚後の第九圖を見て此の

爪の構造を説け

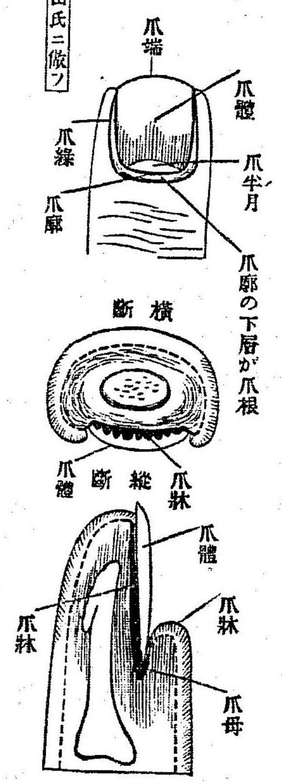
筋や皮脂腺の位置を知る可し。

爪の構造を説け——爪はこれも毛髮と同じく皮膚の變形物で、指足趾の第三節

第一指は二節の背側に在る方形半透明の角板である。化角したる細胞より成る、此の細胞は甚だ固く連合し、表皮角層の細胞と異なるは唯核を有する一點である。之を爪體・爪緣・爪端・爪根及び爪牀の五部に分つ。爪體は其の表面が豐隆くて縱線を透徹し、裏面は陷沒して數條の縱隆起がある、此の縱隆起は爪牀の縱隆起間なる凹所に嵌り互に密着してゐる。爪端は離れて前方に彎曲す、之を剪らずに保護すれば尺餘に延長するものであるが、斯くては仕事する上に於て嘸や不便なることであらう。爪緣は爪廓の一部を以て僅に外皮に被はれ、溝狀を呈す、爪の

第甲爪

今田氏ニ倣フ



側線は此の溝内に嵌つてゐる。爪根は爪體の後部即ち後緣で、稍深き溝内に嵌り、外皮の皺襞即ち爪廓に由て被はれ、僅に白色の一部を露はしてゐる、之を爪半月と云ふ。爪牀は眞皮と表皮とより成る。眞皮の表面には乳頭が無くて其代りに微細の縱隆起線を呈す、抑この線は爪母に起り、其の始めは甚だ低きも前方に進むに從ひ、其の高さを增し、爪と爪牀と離るゝ點に至つて忽ち消ゆ。表皮は數層の扁平上皮で、表皮の粘液層と同一の構造をなし、小隆起線を被うて且つ其の間の小溝を塡め、唯爪母に於てのみ、漸次に爪甲に移つて行く、此の部に在つては上皮細胞絕えず分割して爪甲の發育に要する細胞を生ずるから、此の上皮を爪の種子層と云ふ。爪牀は血管神經に富み、其の後部は柔軟で、これを爪母と云ふのである、毛母と同じく爪質を發生するの地なるを以て此の名があるのだ。これで毛髮及び爪甲に就いて粗述べたれば次は皮腺に移らう。

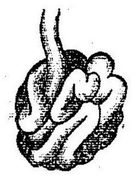
皮腺とは如何——皮腺とは汗腺及び皮脂腺の總稱である。

汗腺の構造を說け——汗腺は汗を分泌する物で眞皮の最下部即ち網狀部及び皮下結締織中に位置を占め、手掌・足蹠・腋窩・陰部・前頭に最も多くて而も大きく、軀

皮腺とは如何汗腺の構造を說け

幹の背面には最も少く、龜頭・包皮內面及び唇緣には全く之を缺く。汗腺を分つて腺體及び排泄管の二部となす。腺體は糸毬狀の膨大せる部で、其の壁は色素及び脂肪顆粒を含有する方形細胞の單層と、其の外方に在る薄弱の基礎膜より成る、されど其の能く發育せる腺に至つては右の外に縱向の平滑筋纖維を有するのがある。排泄管は小さく長く、漸次に上つて眞皮表皮を貫き螺旋狀に彎曲し、眞皮の乳頭部に至つては、紆廻して、遂に表皮の表面に漏斗形を爲して開口す、之を汗口と云ふ。排泄管の管壁は、數層の方形細胞と、其の外方に縱列せる結締組織纖維束より成る。此の汗管の直徑は大約一寸の三百七十分一で、腺の數は多き部に至ると、一寸平方中に殆んど四千個も有つて、全身中には二百五十萬個を具へ、假りに全身汗腺の端を相連ねて延長すれば大約四里餘の長さに達するだらうとの勘定である。若し凸面レンズを用ひて、手掌を檢すれば其の表面に汗管の開孔するを澤山見ることが出來る。之を見ても人間身體の構造の、如何に緻密なるかを察せられるであらう。

第七圖 汗腺

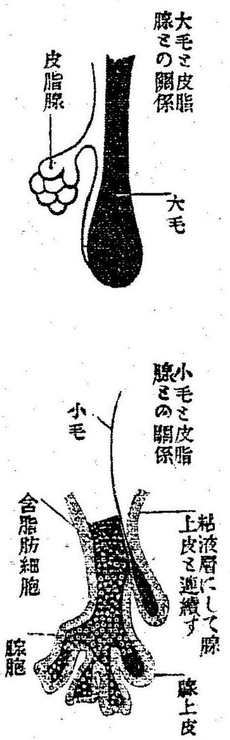


皮脂腺の構造は如何

皮脂腺は毛髮の近傍には數多くあるものである。

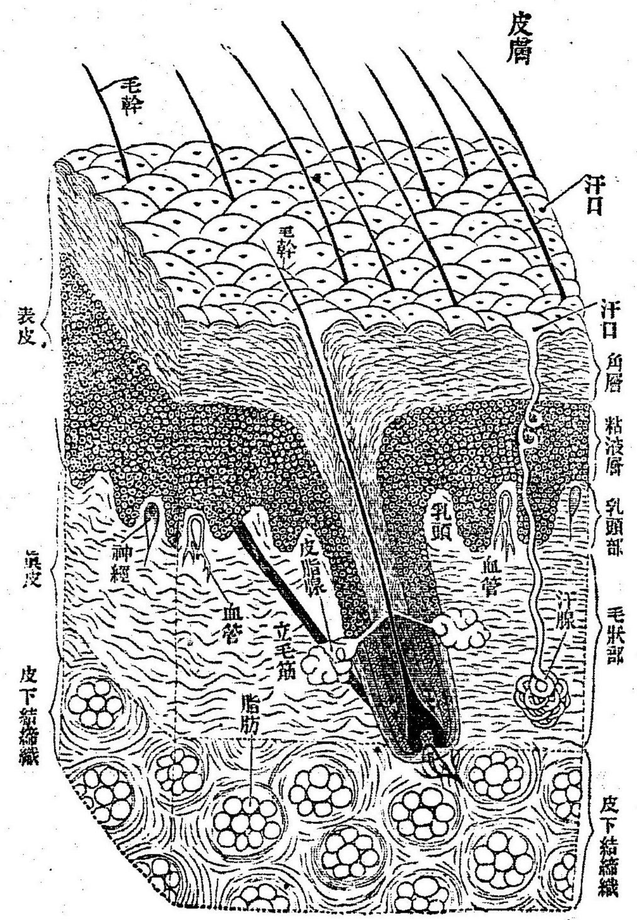
皮脂腺の構造は如何——皮脂腺は一名を毛囊腺とも云ひ、眞皮の網狀部中に在るが、全身の皮膚中に於て、獨り手掌足蹠に此の腺を缺く。亦別ちて腺體及び排泄管の二部となす。腺體は葡萄狀で其數定らざる小腺胞が集り成つてゐる。腺體の上皮は外層に方形細胞を有し、其の內方は大小不定の圓形或は多角形細胞を以て腺胞內を充す、此の細胞の腺體に進むに從ひ、脂肪變形を起し、茲に死壞して相融合し、皮脂を生ずるのである。排泄管は大毛に在ては毛囊の側方に開口し、小毛に在ては其の毛囊腺の排泄管を貫きて突出し、口唇の邊緣、小陰唇、陰莖冠及び包皮等に在つては直ちに表皮に開口す。抑、この排泄管は外毛根鞘の延長物で重層扁平、上皮を被むり、其の層次第に減じ、遂に腺體の上皮に移つて行くものである。右にて皮膚及び其の附屬物に關する凡ての解剖を述べたれば、左に夫等を總括

第八圖



したる全圖を掲げておかう。

第九圖



十五頁に述べた通り、皮下結締織は周圍に錯綜したる結締織纖維と彈力性纖維との一大團から成り立つもので、是等の纖維には其間に多少大なる網膜腔がある。身體の大部分は此の網膜中に積み累つてゐる脂肪組織がある。而して此の脂肪部は結締組織被膜を以て包まれてゐる、之を脂肪囊と云ふ。脂肪囊は場所の異なるに從ひ、其の發育の强弱も亦、違ふ。手掌足蹠臀部女の胸腺には其の數極めて多かれど、耳眼瞼及び陰莖には更に脂肪囊は無い。

クローマイエル氏の說に依れば眞皮の乳嘴は生理學上より見るも、表皮の一部分に屬す可きもので、表皮の榮養組織である。故に人體の皮膚は(一)實質皮(二)眞皮(三)皮下結締組織の三種に區別するが穩當だ。尙實質皮に屬するものを以て表皮及び眞皮の上部とし、殊に後者に附するに脈管眞皮といふ名稱を以てせねばならぬと。

皮膚は如何なる効用あるか

皮膚の生理

皮膚は如何なる効用あるか——

表皮は前にも述だたる通り、其の組織が角樣で乾燥してゐて、寶透性を具へてゐぬ。而して神經も血管も分布してゐぬから、僅かの刺戟の爲に出血したり、痛みを感じたりする樣な不都合が無くて、眞皮の作用を保護するばかりで無く、毒液の進入を防ぐの力殊に强く、其の上溫度的作用や化學的作用に抗抵するの力も亦弱くは無い。又、表皮は皮膚の毛細管に一定の壓力を加へて毛細管より液質が甚しく漏るゝを妨げてゐる、其の證據は若し表皮の一部が何かの原因で剝がれるやうな事があると、其部が紅くなつて濕ひ、人體に大切なる蛋白質を失ふものである。故に其の剝がれた部分が多いと、從つて蛋白質を失ふことも多く、遂に身體の榮養を大いに衰へさすは言ふまでも無からう。又健全なる表皮は近傍の表皮と癒着することの無いものであるから、一朝表皮の剝がれるやうな事があると、其の近傍の眞皮が互に癒着して瘢痕收縮を招くは人の能く知る所である。次に眞皮は彈力が强くて轉移し易く、且つ堅牢な物であるから、外來の器械的侵害を防禦するの効能がある。次に皮下

脂肪組織は身體各部の陥沒したる所を塡め、且つ各部の突起せる塲所を被ひ以て身體の恰好を修飾して圓滿なる形狀を保たしめるものである。又、この脂肪組織は温の不良導體であるから、身體より温の甚しい放散を防ぐ。又、此の組織は柔軟で且つ彈力を有つてゐるから、甚しい壓迫を防ぐことが出來る、故に若し足蹠・手掌或は臀部などに此の組織が無つたら、激烈なる外部の壓迫を受け、嘔や困難なることで有らう。其他該組織は腋窩や鼠蹊及び膝膕などの血管や神經を包んで損傷し易い貴要部を保護してゐる。以上述べたる事を繰り返すと、皮膚は天授の衣服で、外界の刺戟を避け、内部の液體や温度の甚しく漏るゝを防ぎ、而も人體の形狀を修飾するの効能がある。而して手掌・足蹠の如き害を蒙むり易い所には、中間層を入れて、其の表皮を厚くしてあるとは、實に巧妙な作り方である。巧妙は啻に是に止まらないで、之を用ふれば用ふる程硬く丈夫になると は返す〳〵も感歎の至りである。彼の勞働者は常に踝足で砂上を歩めども傷ます。壁屋は斷えず石灰を撮んで居れど手が荒れず、又腐蝕もせぬ。其他塗師屋は漆に氣觸れず、鍛冶屋は火傷し難いなど、實に天の爲す所は靈妙と叫ぶより外に何等の言葉は無い。

毛髮の効用は如何

毛髮の効用は如何――毛髮は皮膚の効用を補ふ物で、卽ち外來の刺戟を防ぎ、内部の體温を保つなどの効能は有れど、人類には獸類程の必要は無い。併し頭髮は大切なる頭腦を保護する上に於て、頗る必要なものだ、第一に寒熱の刺戟を防ぐし、第二に打撲を受けたる節などには、大いに其の損傷を輕くする。然るに從來の僧侶はスッペラボンと剃つて居るは天理に背いたことである。『昔は人か毛の跡がある』と笑はれても恐らく返す言葉が無からう。次に眉毛は前額の汗が眼に入るを防ぐの効がある。と言ふ人もあれど、其程立派な用を爲す物でも有るまい。次に鬚の効用に至つては殆んど了らぬ。或者は齒の保護物である齒は鬚ある爲に何程寒風の刺戟を避くるかも知れぬと。又、或者は齒の保護物ならば、男女子共に生えるべき筈の物、然るに男子にのみ生える所を考へて見ると、天は一見男女を區別する目標に生えしめたのであらうと、甲論乙駁してゐる。が併し何れが正か不正か兎に角余には其の生理的作用が了らぬ。其他腋毛陰毛の如きは他部分との摩擦を防ぐとの説もあるが、之も其の生理的作用が確と

$740 \times \frac{1}{180} = 4.1$ 強　$900 \times \frac{1}{220} = 4.1$ 弱

皮膚は呼吸作用を營む

定まつては居らぬ。併し睫毛鼻毛に至つては塵埃を掃ふ所の効能がある。殊に睫毛は塵埃を掃ふのみならず劇しき光線の眼内に入るを防ぐためにもなる、是非共無くてならぬものである。

皮膚は呼吸作用を營む——人間又は動物をベッテンコーフエル氏或はシャルリング氏の呼吸裝置の室内に入れ、別に一條の呼吸管を以て肺臓の空氣を呼吸せしめ、其の室内には更に肺臓の空氣を籠らしめず、唯皮膚呼吸より生ずる呼吸氣のみを籠らしめるときは、皮膚が幾何の呼吸を爲すかを明瞭に檢査することを得。而して其の呼吸する孔は、汗口である。換言すれば汗腺に酸素を吸ひ入れて血管に輸り、血管から炭酸を受取つて皮膚上に放つことは恰も肺臓の如き作用を爲すのである。されど之を肺臓に比ぶれば皮膚の呼吸機は甚だ微弱で酸素の攝取は肺臓の量の百八十分の一に當り、炭酸の排泄は肺臓の量の二百二十分の一に當る。乃でヒールオルト氏の檢査に依れば肺臓は晝夜に約七百四十瓦の酸素を吸ひ入れて約九百瓦の炭酸を呼き出すが、皮膚は吸ひ入れの量と呼き出しの量と殆んど同一なるか、或は吸ひ入れが、呼き出しより稍少い位の勘定である。去りながら炭酸排出の量は日夜に於て變化あるのみならず、消化、皮膚刺戟、肺呼吸障害、皮膚多血、赤血球增多等に由つて增すものであると、ローリング氏は說いてゐる。皮膚は又其外に少量の瓦斯即ち窒素及び安母尼亞をも排泄するであらうと諸家皆說いてゐる。

汗は如何なる物か

汗は如何なる物か——汗は汗腺より分泌するもので何時も斷えず皮膚面に出てゐる。併しながら普通の場合に於ては、其の分泌が少量であるから皮膚面に出るや否や忽ちに其の水分と揮發成分とは蒸發して、更に汗の姿を留めないが、若し運動するとか空氣温が高まるとかして、其の分泌量が多くなると、球狀になつて、遂には タラ〳〵 と流れるやうになる。乃で生理學上では前者即ち眼に見ぬ汗を不可視汗と名づけ後者即ち眼に見ゆる汗を可見汗と曰ふ。而して不可視汗は身體の部分に從つて大いに其の量が違ふ。乃ち身體の右側は左側より多く手掌は最も多く、次は足蹠、頰、胸、上脚、前膊等の如き順序である。又、朝より正午に至るに從ひ順次に其量を增し、夕食後減り、後又增し、中夜前は其の極度に達するものである。

汗の成分は如何

%とは百分比例のことである。

汗の成分は如何

之を顯微鏡下で見ると、自然に混合したる表皮の小片と、皮脂腺から分泌したる脂肪粒とを現はしてゐるが、化學的の成分は九七・七乃至九九・五%の水と〇・五乃至二・七%の固形質とから成つてゐる。固形質の中で有機質は約〇・二%、無機質は約〇・六五%である。而して有機質はコレステリン中性脂肪・揮發脂肪・酸類を主とし、其他硫化藏抱合物・蛋白質の痕跡及び尿素等を含み無機質は食鹽・格魯兒加・倍母・硫酸鹽類及び燐酸土類・燐酸那篤・倍謨の痕跡及び炭酸と少量の窒素とを溶解してゐる。併しながら其の成分は部分の異なるに從ひ、性質や分量を異にするし、水の如きは多く飲んだ後に增加するもので、要するに汗の成分は未だ精細の研究を遂げて無いと言つても可い。右の外カブラニカ氏はクレアチニン及び硫黃の存在を證明し、ベンデルスキー氏は澱粉性醱母(ヒドロプチアリン)を發見した。又晩近に至り、ブルンネル氏やフヲン・アイゼルスベルヒ氏等は血液中を循環せる小菌機體は汗液に由つて排出するものだと證明してゐる。

汗の比重及び反應等は如何

汗の比重及び反應等は如何

汗は無色で少しく溷濁し、一・〇〇五の比重を有し鹽味を帶び、一種の臭氣を發す。汗の反應は學說甚だ區々で、フシンゲル氏は溫浴の初めに於ては酸性を認め、直後は常に亞爾加里性となるものだと論じ、ランドア氏は汗は安靜時に分泌したるものは酸性なれども、其の分泌の增加するに從ひ、酸性を減じ、亞爾加里性になることがある、大方汗は亞爾加里性の腺分泌物と酸性の皮膚分泌物とより合成してゐるから、其の一分泌或は他分泌の多少に從つて反應を異にせねばならぬ道理だと說いてゐる。

汗の量及び汗の增減する狀態を說け

汗の量及び汗の增減する狀態

汗は人に依て其の分泌の量を異にし、或は何時もタラ〳〵出してる樣な人もあれば、或は仲々容易に汗の姿を見せぬ人もある。又諸般の事情に依て大いに其の量が增減するけれど、之を平均して見ると體重の六十四分の一で、肺臟の排泄よりも二倍の量を分泌するものである。が併し前述の如く、左の事情に依て大いに其の量を增減するものだ。

(一)血液中に水分が增すと汗の分泌が增して來る。殊に熱い液體を多く飲むと速に且つ多く分泌するは誰でも能く知る所であらう。(二)運動を劇しくすれば

になり、從つて皮膚なる毛細血管中の血壓が進み、汗の分泌も盛んならしめるのである。(三)氣溫高まれば皮膚の色が赤みを帶びて汗の分泌を增すし、氣溫低くなればなる程分泌を減じ、大いに寒冷なれば遂に分泌を止めるに至る。(四)汗は尿及び糞便と桔槔の關係がある。卽ち尿が增すか或は下痢するときは汗は減るし、汗が增せば他の分泌減るものである。(五)發汗劑を服むと、汗の分泌が增す。例へば安知歇貌林・安知必林・アスピリン・必魯加兒比涅・歇那設珍・カイリンなどの類である。之に反し、亞篤魯比涅・阿片・莫爾比涅の如きは汗の分泌を減少せしむるものである。

汗は體溫を調節す

汗は體溫を調節す——炎熱燒くが如き夏の日に、綿入を着ながら運動しても、寒冷刺すが如き冬の日に赤裸となり靜座してゐても、或る時間中は病氣にもならず、體溫はさしたる變化も無く、何れも約三十七度位であるは、如何なる理由であるかと言ふに主に皮膚の汗が之を調節せしむるのである。此の事は後卷にも詳しく述べる積ではあれど、今其の大要を撮んで言へば斯うだ。空氣溫が高まるとか、熱い湯を飲むとか、運動するとかして、體溫が平溫を越えようとすると、心臟の動悸が高まり、從つて皮膚の血管は擴がり、其の擴がつた血管へ血液がドンドン送られ、汗の分泌及び蒸發が盛んになり、其の蒸發と共に體溫を奪ひ去り、寒冷を生ぜしめ、汗の源の盡きぬ中は體溫依然としてる。之に反して空氣溫が冷ゆるとか、冷たい物を飲むとか、或は不運動であるとかであると、皮膚の血管や汗管は縮まり、汗の分泌は大いに減り、可成體溫を洩さぬ仕掛になる。これ其の體溫が常に一定度に止り著しく昇降せぬ所以である。換言すれば溫の發生と、其の放散と互に相平均して、過不及無き狀態に至るからである。之を以ても皮膚の發汗作用は實に大切なものである。

汗の分泌と神經系との關係

汗の分泌と神經系との關係——汗の分泌は普通の場合に於ては血管神經と眞の分泌神經と同時に其の作用を及ぼし、殊に血管擴張神經が其の作用を及ぼすことが多いから發汗する場合には多少皮膚が紅くなるけれど、或る場合に於ては更に紅くならずに發汗することがある。或る場合の發汗とは如何、曰く苦悶或は瀕死臨終の時などに生ずる汗である。これから考へて見ると、血管收縮神經が興奮する時にも、亦、汗腺神經が其の作用を及ぼすものだといふことが了る

であらう。又、發汗神經纖維と血管神經とは同一の道路を通つてゐるからでもあらうが、健康なる身體に在つては、發汗の淋漓として分泌する時に、大抵血管の擴張を伴ふけれど、其實は發汗神經は毫も血行の助力を藉らずに全く獨立に皮膚の分泌を主宰するものである。其の證據は一肢を切つて其の血行を止め、其の神經幹を刺戟すると、一時發汗するを見ても了るでは無いか。次に大腦は血管神經或は發汗神經に直接に作用を及ぼすもので精神が興奮したり、或は苦悶したりすると、發汗する事實は人の能く知る所であらう。尙汗と脊髓及び延髓との關係を說きたいが、後卷なる神經系の卷に讓るとしよう。

皮脂は如何なる物か及び其の効用

皮脂は如何なる物か及び其の効用——皮脂の顯微鏡的成分は無數の小顆粒と、甚だ僅かの腺細胞卽ち脂肪を滿せる細胞と、變化したる腺細胞膜及びコレステアリンの結晶が時として存するなどである。化學的成分は液體の脂油と固體的の軟脂とを主とし、其他脂肪石鹼少量のコレステリン、蛋白及び越幾斯物無機鹽類卽ち不溶解性の燐酸土類、格魯兒亞爾加里、燐酸亞爾加里などである。皮脂の効用は表皮及び毛髮に油して之を滑らかにし、且つ柔らかにし、皮膚の枯燥を禦ぐものである。斯の皮脂の分泌が缺乏すると、皮面に龜裂を生ずるを見ても、其の効用の決して小ならざるを知らるゝであらう。

皮膚の吸收力は如何

皮膚の吸收力は如何——健全なる皮膚に在つては皮脂を溶解す可き液體、例へばアルコール、依的兒、コロヽホルムに物質を溶解して之を皮膚に塗れば其の少量は吸收せらる。又、軟膏類を斷わず强く塗擦すれば、皮膚の孔に壓し入れられ遂に吸收せらるゝものだ、例へば沃度加里軟膏、水銀軟膏の樣なものである。殊に水銀軟膏の吸收は、諸家皆一點の疑無きものと結論してゐる。然れどもフラ|イシエル、リッテル二氏の如きはアルコール中に溶解せる物質や軟膏狀の藥劑は何等の傷無き皮膚より吸收せらるゝことの無いものだと言うた。次に瓦斯體は其の有毒なると否らざるとに論無く、凡て人體の皮膚中に侵入す可きもので揮發性物質も其の迅速なる蒸發を妨ぐるときは、皮膚より吸收せらるゝものたることは疑無い。例へば青酸、硫化水素、酸化炭素、依的兒及びコロヽホルム蒸氣のやうなものである。次に水溶液から物質を吸收するものだと說いた學者もあるけれど、之は陳腐に屬せる論である。海水に溶すれば食鹽を吸收する如

く思ふ者もあるか知らねど、食鹽浴をしたる後尿中に格魯兒化合物の增加せぬを以ても之を證明することが出來る。又水を大いに吸收するものだと論じ、或は甚だ僅少に吸收すると言ふ人もあれど、之も疑はし。何となれば表皮及び皮膚孔に皮脂を含んでゐるから、之を受け附けぬからである。浴後に尿の增すは水を吸收したからでは無くて、入浴の爲に皮膚神經が腎臟の脈管に及ぼしたる反射作用の結果である。之に反して表皮が剝離せられてゐるとか、或は炎症を發してゐるなどの破損部ある時は、水溶液でも乃至は水楊酸沃度加里などの異種物質でも吸收せらるゝものだ。又表皮を腐蝕する物は吸收せらる、例へば石炭酸の如きである。此の道理に基き、皮膚を刺戟する物質を久しく皮膚に塗けて居れば、遂に表皮傷んで吸收するやうになる。

皮膚全面に漆を塗れば果して死ぬか

皮膚全面に漆を塗れば果して死ぬか——「動物の皮膚に緻密なる塗布藥例へば漆の如き物を塗擦すれば皮膚全部は言ふに及ばず、四分ノ一乃至八分ノ一でも日ならず死ぬものである」との說を昔は信じてゐた人も有りたれど、其後段々研究の結果陳腐の說なることを發見するに至つた。乃ち溫血動物に漆して皮膚の機能を止めても瓦斯交換の總和に變りが無い。これ恐くは肺の呼吸が盛んになつて、皮膚呼吸の機能を償ふからでもあらう。然れど二三の哺乳動物殊に兎の如きは皮膚に漆を塗ると速に死んで了ふ。去りながら呼吸の減る爲に死ぬのでは無くて、脈管麻痺し爲に多量の溫熱を放散するからであらう。概して强壯の動物は薄弱の動物に比ぶれば其の死すること遲く、馬の如きは全部に漆を塗つても段々痩せては行くが、五六日乃至は八九日までも生きてゐる。若し全身の二分ノ一だけ塗れば、一時體溫は下つて衰弱はするけれど、頗る長く生命を續けてゐる。而して犬・豚も大抵馬と同樣である。之に反して蛙及び其他の水陸動物は皮膚呼吸は肺よりも盛んであるから、暫時の間、油の中に入れても速に死んで了ふ。乃で人間は如何と云ふに、全身に漆すれば害になることは勿論なれど、甚しい危險を及ぼすもので無いと、ゼナートル氏やエルレンペルゲル氏等が之を證明してゐる。史記列傳に晉の豫讓といふ人が其の主人の仇を報せん爲に、漆身ニ爲リ厲ト呑レ炭ヲ爲リ啞ト使ム形狀ヲ不レ可ラ知ルと書いてある。而して其の註に厲ハ如ニ癩病ノ炭ハ蓋シ藥物之名ナランとある。之を事實として見ると、身に漆を塗れば皮

膚を甚しく損傷するには相違無きも、俄かに死ぬやうなことの無いだけは確かである。

皮膚及毛髮上に於ける男女の區別——皮膚の構造に至つては男女敢て異なる所は無いが、其の色素は女子は一般に薄く、爲に男子よりも白く見ゆるものである。毛髮は頭を除くの外は女子よりも男子の方が多く生えてゐる。殊に顏の髭は男子の特性である。されど、頭髮は如何に切らずに於ても女子の髮程に長くはならぬのみならず、年老いて禿頭になるのも男子に多くあるさのことだ。毛髮の色は女子の方が色素に富み、即ち男子よりも黑い。何ぜに斯る差違を天は作つておくかが了らぬ。

皮膚を清潔にせよ

沐浴の種類は如何

皮膚の衞生

皮膚を清潔にせよ——前章に述べた通り、皮膚からは絶ねず汗を出し其の汗の中に含んでゐる鹽類や表面から剝がるゝ表皮や、或は又外界から來る塵などが皮膚の表に所謂垢となつて溜るものだ。而して此の垢が多く溜ると、皮膚の孔を塞ぎ、汗や皮脂の分泌を止め、皮膚呼吸をも妨げ、色々の皮膚病などをも發するものである。然れば屢々沐浴して垢を洗ひ落さねばならぬ。沐浴は啻に垢を落して皮膚の孔を開くのみならず、表皮を刺戟する所から新陳代謝を促し、皮膚血管にも作用を及ぼし血液の循環は宜くなり、體溫を程能くし、且つ神經系統を興奮せしむる効能がある。然るに歐米の人や、支那朝鮮の民は入浴の度數少く、爲に皮膚病に襲はるゝ者が多い。其處に行くと、我國の人は身體の清潔を好み、屢々沐浴するが故に、皮膚病者は諸外國よりも大いに少い。實に宜い習慣である。

沐浴の種類は如何——沐浴を大別すれば溫浴・冷浴の二種となるが、細かく別ければ左表の如くなる。

本論

- 温浴
  - 天然浴
    - 温泉浴
    - 〔日光湯〕
  - 人工浴
    - 湯槽浴
    - 蒸氣浴
- 冷浴
  - 天然浴
    - 海水浴
    - 淡水浴
    - 瀑布浴
    - 〔冷風浴〕
  - 人工浴
    - 冷水灌注
    - 冷水槽浴
    - 冷水摩擦浴
    - 雨浴

右の中で（　）印のある浴は垢を落す目的とはならぬ

偖一々之を説明すると、温泉浴とは天然に沸き出づる温泉、例へば熱海とか箱根とかの温泉に浴する如きを云ひ、日光浴とは太陽の光線に觸るゝのである。西洋では室の四方及び屋根共に硝子を以て造りたる中に入り十分に日光を浴び或る病者又は薄弱者の健康を計るさうだ。我國では四季共に温暖であるから夏春秋の三季は外出して居ればそれで可いし、冬は南側の椽先に出て居れば、自ら日光浴となる、併しながら頭部に太陽を直射させることは甚だ宜しく無いのみならず、夏は可成木蔭の樣な處に、間接の日光浴をするが宜い。湯漕浴とは普通一般に行はれてゐる風呂湯に浴すること、蒸氣浴とは俗に云ふ蒸風呂のことだ。我國では京都市中に往々行はれてゐる。次に海水浴とは讀んで字の如く

海水に游泳するを云ひ、淡水浴とは河や湖に、これも同じく游泳するを云ふ。瀑布浴とは瀑布の水に打たるゝので、冷風浴とは主に朝の冷風に吹かるゝのである。次に冷水灌注とは赤裸になつて、手桶なり釣瓶なりの水を、身體に注ぐを云ひ、水槽浴とは大盥なり風呂桶なりの中に水を充し、其中へ赤裸になつてザンブと飛び込み、身體を洗ふのである。冷水摩擦とは手拭を水に浸し、輕く搾つて身體を洗ひながら摩擦するを云ひ、雨浴とは水を充したる大桶の下方なる側面に管を設け、其管の尖端を如雨露仕掛にしたる物を、高き處に据ゑ、己れは赤裸になつて其の如雨露の下に起ち、雨の如く霏々と降り下る水を身體に注ぎながら全身を洗ふのである。尙、右の外に乾浴とて、湯水で垢を取る代りに、清潔なる衣服を屢々着換へて衣服に垢を移す一法がある。されど之は贅澤で且つ不經濟であるのみならず、十分に垢を取ることが出來ぬ。故に高老者又は重病人に行ふまでゝある。

各種沐浴の利害得失——温泉浴の効能は、湯槽浴と同じく、垢を落し皮膚の孔を開き表皮を刺戟して新陳代謝を促し、血液體温にも少なからざる好影響を及ぼ

すけれど、或る皮膚病等を除くの外は、其の泉中に含んでゐる藥の成分が前章にも述べた通り、皮膚より吸收し難いものであるから、世人が信ずる程の莫大な効力あるものでは無い。唯、温泉の在る所は海岸の山腹に在るとか、或は樹木鬱葱たる山中に在るとか、何れにしても風景幽邃、詩も亦湧き出でゝ成るといふやうな地に在つて、而も湯治に行つてる人は家を離れ、齷齪としたる生活を避け、面白可笑しく日を送るから、それが主に心身の保養になるのだ。故に健康者には普通の湯槽浴でも敢て差支無いのである。日光浴は皮膚の色素を増し、皮膚の抗抵力を強くし、精神を爽快に導くなどの効能あるもので彼の勞働者が、坐食者よりも強壯なのは運動の爲とは言ひながら、一は自然に日光浴を取るからでもある。爾來我國の婦人は深窓の下に靜坐してる習慣あるが、今後の婦人は是非共日光浴を十分に取り、大いに活動して貰ひたいものだ。湯槽浴は前述の温泉浴と殆んど同等の効力あるもので何れの山間僻地にあても簡便なる方法で出來るものなれば可成は毎日入浴するが宜い。尚繰り返して其の効能を言へば、入湯すると、上皮の細胞を膨脹軟化せしめ、それと同時に皮膚の老廢物を容易く剝ぎ取り、皮脂や汗などの附着物も垢と共に除かれ、且つ温度の作用で皮膚の温を調節し、皮膚の神經は刺戟されて、生理的機能が進み、其の結果身體一般の血液循環が盛んになり、頭部の鬱血などを下部に導き、女子は月經の不調を未發に防ぎ其外食欲を促し、精神を爽快にし、不運動者が毎日之に浴すれば、運動の代りとなるし、勞働者が毎日浴すれば身體の疲勞を回復する偉効がある。尚温浴に就いて其効能等を多々益々辨じたいけれど、此處は皮膚の衞生を本位にして書いたのであるから、本書の各卷を讀まゝ中に自ら其の眞價が了つて來るであらうと思ふ。次に蒸氣浴は一般の温浴に普通なる効能は無いでは無いが、其の目的とする所は發汗を促し或は僂麻質斯性の疼痛を輕減する爲である。次に海水浴は其の温度の冷きと波濤の器械的刺戟が神經を刺戟して、一般の機能を高むるを第一の目的とし、其他は海上の空氣が濃密で清潔で、而も新鮮で、有害なる瓦斯を含んで居らぬこと、海氣の温度が均一であることなどが宜いのである。鹽分を含んでゐるから皮膚を刺戟し、其の機能を高めるなどの説は温泉の効能過信と共に一笑に附して可い。海邊に居る人は、游泳法を稽古する旁々、皮膚衞生

の爲め、運動の爲め、且つ日光浴の爲め、夏日に於て是非共行る方が善けれど海邊に遠き人が有りもせぬ金を算段して、旅宿に逗留しつゝ行らねばならぬ程の効能あるものでは無い。それよりも川なり湖水なり、兎に角近邊に在る淡水に浴しても可いのだ。元來海水浴や淡水浴の主眼とする所は衞生の點よりも游泳法を知るに在るので、唯、皮膚だけの衞生ならば、人工浴の方が遙に優るものである。次に瀑布浴は冷浴普通の効能はあるに相違無きも、其の主なる目的は或る疾病卽ち腦充血或は躁狂などに冷頭法として行ふのだ。是非共行らねばならぬ程の効能あるものでは無い。我國の迷信者中には瀑布浴を非常に尊んでゐる所から賣僧の輩は之を利用し厭がる患者を强力なる者が無理に抱いて數十分時間之を爲さしめ時稀に幾分かの効があると皇張誇大に其の利益を述べ立てゝゐるは尙恕す可しとしても、之が爲に害を受け甚しきは死に到つた者あるを秘密に葬るに至つては實に言語道斷である。次に冷風浴とは前述の如く朝起きるや否や、素裸或は單衣物一枚くらゐ着たまゝ運動しながら、冷風に吹かれるのであるが、これは單に皮膚の抵抗力を强めるに過ぎぬ。始めて之を行はんとする者は夏から練習するが可い、次に冷水灌注、水槽浴、冷水摩擦、雨浴は皆何れも其の目的を同うすれども冷水摩擦は最も行ひ易く、雨浴は之に次ぎ、冷水灌注水槽浴に至つては餘程之に慣れた人で無くては實行し難いのみならず、虛弱なる人が最初から實行すると、感冒や腸加太兒などに罹ることがある。で冷水摩擦をなさうとする者は、これも夏から始め、終世之を怠らぬことが肝要である、今更に冷浴の効能を擧れば、第一に外來の刺戟に對する皮膚の抵抗力が强くなる。外來の刺戟とは如何、曰く氣候の變化や、太陽の劇しき光線或は寒風の如きを始とし、其他器械的の刺戟例へば壓迫、摩擦の如き、或は化學的の刺戟例へば漆や藥の爲に皮膚炎症を起す如きを云ふ。乃で冷浴の習慣を附けてあると、是等の刺戟に對する皮膚の抵抗力が强くなるのである。第二に神經を强壯にする卽ち神經は冷感の爲に興奮し、次第に强壯となる。第三に皮膚の反應作用を起して血液の循環が宜くなる。反應作用とは如何、曰く皮膚は冷した後に溫くなり、溫めた後に冷ゆる作用あるを云ふ。例へば湯に入つて暫時經つと凉しくなり、雪の上を跣足で走つた後は却つて溫く感ずるやうなものである。

何せ斯うなるかと云ふに、皮膚を冷すと、血液は一時内部に行き、内部は血液が澤山來るから盛んに運動を初め、又之を皮膚の血管へ歸すやうになるので、温めれば之に反する道理である。第四に食欲が進むばかりで無く消化が宜くなる。この理由は消化の卷を讀めば了る。第五に心肺が強くなる。この道理も心肺の卷を讀まねば了り難い。第六に垢を除くから清潔で宜い。併し垢を除く點に至つては入湯には遠く及ばぬ。何となれば温湯は冷水よりも垢を溶解し易いからである。第七に人格養成になる。寒威凛々たる冬の朝に、素裸となつて冷水を注ぐのであるから、却々の氣力が無くては行はれぬことで、之を一生涯行り通せる人ならば、啻に身體が健康になるのみならず萬事成功する所の大丈夫若くは烈女である。余の知人が始めて冷水摩擦の効能を知り、之を行ひ始めて曰く、冷たいとは勿論承知して居れど、ザブリと一杯皮膚に注ぐときには、ビックリするが、併し其のビックリが冷浴の冷浴たる價値で人格修養の上に於て偉大の効果があると、十年一日の如く今に行うてゐる。それか有らぬか忍耐不撓一歩々々に業を仕遂げてゐる。尚この事に就いて論じたきこと澤山あれど、皮膚に關係無れば、遺憾ながら筆を止めておく。去り乍ら終りに臨んで、尚沐浴法全體を總括して言へば、冷浴は一日に早朝一回、又は二回（午後四時頃或は臨臥に）行ひ、温浴は夕食前又は臨臥に一回宛終身行り通して貰ひたいものである。又、夏日には海水なり河水なりに沐浴すると同時に、游泳法を稽古し萬一の場合には怒濤と鬪うて身命を全うするやうにしておかねば、海國男子の本分で無い。又、一游泳してから海邊の熱沙に轉がつて所謂沙浴を爲し、再び游泳するが如きは、皮膚を金鐵の如くに鍛へる一法である。大丈夫たる者須らく斯る練習も爲す可しだ。

毛髮の攝生法は如何

毛髮の攝生法は如何――毛髮は前にも述べた通り、表皮の變形物であつて、表皮と同じく新陳代謝するものであるから、其の新陳代謝を全うするやうに注意せねばならぬ。然るに此の毛髮を何の手入もせず、自然の儘に放棄つておくと、何うなるだらうかと言ふに、或る長さまでは生長するけれど、毛の色艶が段々惡くなり、遂に元の毛は自然に脱けて、容易に生え難くなるのみならず、縮毛、赤毛乃至は白髮になるやうなことがある。元來毛髮は其の毛根を傷めざる以上は、縱ひ脱毛しても、又毛囊より新らしき毛髮の發生するものでは有るが、垢が溜るとか、

身體一般が衰弱するとかすると、毛囊に充分の榮養を與ふることが出來ぬ爲に、前述の如く毛が惡くなるのである。故に少くも一週間に一度は刷子を以て、垢や雲脂を掻き落し、石鹸を塗けて水或は微温湯を注ぎ十分に洗ひ、乾いてから少し許の油を塗けて、男ならば掻き分けておくとか、女ならば束髮なり丸髷なりに結ふが宜い。又、時々毛の尖を少し許り切つておくと、新陳代謝を促し、發育を盛んにするものである。併し男子は斬髮をするから、別に求めて切る必要は無い。其他の衞生法は間接で、卽ち精神を爽快にし、滋養食物を適度に取り、相當なる運動法を講じ、身體一般の榮養を盛んにするのだ、身體一般の榮養が盛んなれば、從つて毛髮の發育も宜い道理である。

皮膚と衣服との關係

皮膚と衣服との關係

皮膚が健全であれば、春夏秋冬或は晝夜に拘らず裸體で暮されようか、否々決して然うは行かぬ。古來斯の如き考を懷いた學者も無いでは無いが何れも行はれなかつた說である。併し攝氏の二十七度乃至二十八度（華氏の八十度乃至八十三度）の空氣温で、而も太陽の直射を受けぬやうにして居れば、縱ひ裸體でも差支は無れど、四季晝夜に拘らず、何時も此の空氣温で推し通してる國は三千世界に決して有る筈のもので無いから、乃で人間は皮膚上に在る空氣の温度を何時も二十七八度にして、身體の周りに適度な氣候を作らねばならぬ。この氣候を作るには、或は家屋の構造或は暖爐或は樹蔭などの方法もあるけれど家屋や暖爐や乃至は樹蔭を常に携へて歩けるものでも無いから、爰に空氣を利用して衣服なる物を着、以て皮膚の作用を助けるのである。換言すれば空氣は諸物質中で温の不良導體に屬し、體温を保つ作用が著しいから、我等は衣服を着て其の空氣層を作るのだ。故に厚い綿入一枚よりも、其の綿入の半分の重さある綿入を、二枚着て空氣層を多く作れば餘計に温かい道理である。而して衣服は啻に空氣層を作つて體温を保つばかりで無く、暑氣に於ては皮膚の表に蔭を作つて、外部の暑熱を防ぎ、其他種々の刺戟を避け畢竟する所、人工の表皮であるから、天然の表皮の作用を補助し、隨意に薄くも厚くもすることの出來る重寶な物である。故に皮膚の衞生を重んずる人は衣服の研究も亦大いに忽せにしてはならぬ。

衣服と保温との關係

衣服と保温との關係——如何なる性質の衣服にても唯其の重襲すると重襲せ

ぬとに依てのみ温熱を調節出來るかといふに然うとは限られぬ。即ち其の衣服の性質にも大なる關係があるのだ。抑、温を保つ作用の強弱如何といふこと丈に就いては毛織は木綿に優り、木綿は又絹に優るの事實は誰も能く知つてゐる所であらう。今是等の物に或る定度の温を通過せしむるに要する時間の長短は大凡左の比例である。

絹——三。　木綿織物——五。　毛織——二六。　木綿の收穫——五六。

これに依て之を見れば收穫の儘なる木綿を他質に比べると、最も多量の空氣を含んでるもので保温の作用も亦從つて著しいことは言ふまでも無い。乃で保温のみを目的とせる衣服は此の性質をも利用して作らねばならぬ。

衣服一般の心得

衣服一般の心得

——今更に衣服の事を詳細に述ぶるに當り、これが前提として衣服に就いての一般の心得を左の如く箇條書に述べておく必要がある。

〔第一〕衣服は温度や濕氣の不良導體を以て作らねばならぬ。此の目的に適するものは毛織物を第一とし、次に木綿織、次に絹布、次に麻布といふ順序である。

〔第二〕衣服を餘り厚くして温か過ぎても宜しく無いし、又薄過ぎるのも尚更害がある。〔第三〕衣服の色は夏は淡い色殊に白きを可とし、冬は濃厚なる色殊に黑きを着る方が宜い。〔第四〕衣服は濕つたのを着ては甚だ害がある。〔第五〕一つの衣服を永い時間用ひ續けては甚だ不可ぬ。即ち度々洗濯せねばならぬ。〔第六〕一つの衣服を多人數が共用しては甚だ危險である。宿屋の夜具からして如何なる傳染病を傳染するか計られぬやうな道理だ。〔第七〕衣服は窮屈で無い樣に、其の仕立方に注意せねばならぬ。〔第八〕衣服の換氣法を實行せねばならぬ。〔第九〕夏冬共に日本服は西洋服よりも宜い。〔第十〕衣服は成可一日に三度位着換へた方が宜い。例へば朝晩の衣服と、日中の衣服と寢衣との如きを云ふ。偖右十箇條の理由は以下述ぶる所を熟讀すれば自ら了るであらう。

衣服の重さと壓縮性

壓縮性とは彈力といふやうなこと

衣服の重さと壓縮性

——衣服の重さと壓縮性とは大抵逆比例をなすもので、重さが大なれば彈力小、重さが小なれば彈力大といふ割合になるものである。而して重さの輕い物は氣孔に富んでゐる。換言すれば氣孔に富んでゐる物は其の重さが輕い道理である。故に毛織の如き彈力ある物は輕くて空氣を含むこと多く即ち其の空氣を含む量は五分の三以上だ。絹・木綿の如きは二分の一に

過ぎぬ。乃で前述の如く我等は空氣を多く着れば着る程温暖である。空氣を多く着ようといふには空氣を多く含んだ物を着ねばならぬことは勿論であるが、其の着樣・組樣に依て、その温さが大いに違ふ。例へば洋服の樣に身體に密着して居れば寒いけれど和服の樣に緩い仕立方は温いやうなものである。されど緩いが宜いとて、だらしなく着て居れば衣服を纏はぬも同樣になつて却つて寒い。爰に謂ふ緩くは寛濶なる衣服を着よと云ふ意味である。序に言つておくが官吏・學生に感冒の多いのは洋服を着るからだらうと思ふ。否洋服ばかりの罪では無くて、一日の中に和服と洋服との取り換へをなすからである。洋服は前述の如く身體に密着してゐて、爲に空氣層を作らぬに反し和服は寛濶で空氣層を多く作る。然るに外出して役所なり學校なりに行き、廣々とした室内の火の氣の少い寒い處に居る間は寒い洋服を着、家に歸つて狹い室内に火鉢を擁へてゐる間は暖い和服を着るから、爲る事が反對になり、身體の温度が調節を欠き自然と感冒に罹るのである。されば朝起きて洋服を着、家に歸つてからも寢るまで洋服で通すが宜い。若しそれが不都合で有つたら洋服制度を廢し和服の筒袖に改良したいものだ。善も惡も何も斯も西洋の眞似せねばならぬ義務も無からうと思ふ。殊に稚子には寛たりとした輕暖なる衣服を着せて、發達を妨げぬやうあらまほし。

衣服の纖維間

衣服の纖維間――衣服を織りなした纖維間を透して空氣が容易に通ふと、容易に通はぬとは最も大切なことである。今爰に漆を塗つた着物若くは蠟引の衣服を着て居るとせんか、其の不愉快を感ずること一通で無い。のみならず皮膚上の空氣と外界の空氣との交換が容易に行はれぬから、早晩病の種を作ることは言ふまでも無い、されば通氣の宜い衣服を着ねばならぬ。けれども其の纖維間が餘り疎過ると、體温が奪れて甚だ寒い。其處に行くとフランネルの樣な毛布類は其の纖維間を通して空氣は容易に通ひ、而して疎過ぎず、而も輕暖で小兒老人の衣服には最上である。右の道理であるから透綾の如き纖維間の非常に疎い物は夏は如何にも涼しいが冬は迚も用を爲さぬ。序に通氣性の多少を試みようと思はゞ其の一端は細く、他の一端は廣いブリキ製の圓筒を作り、其の細い方に試驗せんとする衣服の片を張り、其の廣い方を水中に入れるのである、然

したならば斷えず出る汗は皮膚を傳うて流るゝから甚だ不愉快を感ずるであらう。イヤ不愉快を感ずるばかりならばまだしものこと、其度毎に體温は大いに奪はれ身體速かに寒冷となるものである。然らば吸取紙の樣な着物を着て居れば善いかと言ふに決して然うでは無い。吸取紙的の衣服は身體より蒸發する水分を吸ひ取つて體温を急に放散せぬ代りに、外界の水蒸氣を吸ひ取ることも速いから何時もビショ〳〵に濡れて、爲に氣孔を塞ぎ、其の有害なることは言ふまでも無からう。夫れ一旦吸ひ込んだ水分が再び蒸發する毎に體温を奪ひ、寒冷を感ずるものであるから、水分の蒸發の速い衣服を着てゐると、冬は寒くて感冒に罹り易いが、夏は凉しくて凌ぎ易い。この道理を利用し、夏の最中には麻類の衣服を用ゐるのである。麻類の衣服は吸收した所の水分を蒸發することが最も早いから其度毎に體温を放ちて如何にも凌ぎ易いのだ。されど如何に凌ぎ易いとても朝夕は可成木綿服を用ゐるが宜い。毛布は水分を吸ふ力は甚だ強いけれども、蒸發力が遲いからして麻布の樣に急に寒さを感ずることは無い。而して彈力が有つて其の氣孔が久しく開いてゐる爲に、空氣を流通せしめる點に於ても差支無い。尙左に衣服各種の地質に於ける優劣の議論をして見よう。

衣服各種の地質に於ける優劣

衣服各種の地質に於ける優劣

依て氣孔を保ち、體温の發散を防ぎ、水分を徐々に蒸發せしめ頗る通氣性にも富んで居れど、其の短所は之を用ゐる月日長ければ、段々と其の長所の彈力が無くなつて甚だ脆くなる。殊に洗濯すればする程、其毛が落ちて、何の効力も無いやうになる。詳しく言へば毛布類に織り込んである獸毛の表面を顯微鏡で見ると、鱗の狀をなしてゐるけれど、餘り久しく着てゐるか、或は屢洗つたのは其の纖維が滑かになり、從つて鱗の狀も無くなれば、勿論彈力も其の効を失ふのである。若し洗濯の點からのみ論ずれば毛布類は最下等の品である。其處に行くと木綿の如きは幾度洗濯しても、木綿は木綿の性質を失はないで、長へに我等の身體に忠節を盡してくれる。されば新らしい毛布類を度々着換へるだけの資金を有たぬ我等貧乏人は、廉價で洗濯の利く木綿を以て滿足せねばなるまい。絹は元來彈力には富んで居れど惜しいことには之を製し上る時、灰汁を以て柔練す

空氣と衣服との關係に就いての疑問

うすると、通氣性の多い物は第一に沈み、通氣性の少い物は後に沈むものである。

空氣と衣服との關係に就いての疑問

――上來述べた所を讀んで人或は疑はん、曰く空氣を多く着て居れば温かであると云ふならば、裸體で居れば、宇宙の空氣を悉く着てゐるのであるから、最も温かで有る可き筈なるに實際は然うで無いのは如何と、この疑問は少し考へれば直に解けて來る。抑、空氣は唯温の不良導體であるといふまでゝ、更に導かぬと云ふのでは無い。更に空氣と體温との關係を言はうに、乃ち身體に觸れてゐる空氣は第一に温まり、次に衣服中の空氣が温まり、次第〳〵に體温は外部の冷い方に向つて送らるゝのである。故に衣服中の空氣が自由自在に動けば温を奪はれることが速いけれども袷の如き物を重襲して居れば其の温を送り出すことを遮ぎられるために、温を失ふことが遲い。重言すれば皮膚に觸接してゐる空氣の傳達と汗の蒸發氣とに依て次第々々に温を失ふが故に、衣服を重襲して居れば其の一層を增す毎に放温を遮るのである。之に就いて又斯ういふ疑問も起らう、空氣は温の不良導體であるならば、太陽の温をも容易に導かぬに相違無いのみならず、太陽の温を遮ぎれば涼しいから、夏でも衣服を重襲せねばならぬ筈であると。これは一應御尤なやうなれど、重襲して居れば、我が體温も容易に放つことが出來ぬから暑くて堪らぬのだ。それに又體温は攝氏の三十七度位で、空氣温は我國では減多に三十七度になることが無いから（臺灣琉球等を除く）夏になれば帷子一枚を着て戸障子を打ち開き、誰も惜まぬ天下の清風に吹かれて居れば、箱根や中禪寺へ避暑する必要も何も無いのだ。然るに、支那の如き大陸地方に至ると、戸を開けば體温よりも熱い華氏百二十度の空氣温が炎々と舞ひ來るから、窓を小くしたる土藏的の家に苦しまねばならぬ。是を思ひ彼を思へば返す〳〵も避暑に行く人の所行は實に勿體無い極みである。

（攝氏の三十七度は華氏の九十八度六分に當る）

衣服と濕氣との關係

――今我等が着てゐる普通の着物は如何なる質に拘らず多少は水分を吸收するものである。然らば其の水分を何處から吸收するかと云ふと、一つは外氣中に含んでゐる所の水蒸氣、一つは皮膚から出る汗や蒸發氣である。所で其の外氣から吸ふのは甚だ厭ふ可きことではあるが、皮膚から出るのを吸ふは大に必要である。若し皮膚から出る水分を衣服が更に吸はぬし

したならば、斷えず出る汗は皮膚を傳うて流るゝから甚だ不愉快を感ずるであらう。イヤ不愉快を感ずるばかりならばまだしものこと、其度毎に體温は大いに奪はれ身體速かに寒冷となるものである。然らば吸取紙の樣な着物を着て居れば善いかと言ふに決して然うでは無い。吸取紙的の衣服は身體より蒸發する水分を吸ひ取つて體温を急に放散せぬ代りに、外界の水蒸氣を吸ひ取ることも速いから何時もビショ〳〵に濡れて、爲に氣孔を塞ぎ、其の有害なることは言ふまでも無からう。夫れ一旦吸ひ込んだ水分が再び蒸發する毎に體温を奪ひ、寒冷を感ずるものであるから、水分の蒸發の速い衣服を着てゐると、冬は寒くて感冒に罹り易いが、夏は凉しくて凌ぎ易い。この道理を利用し、夏の最中には麻類の衣服を用ゐるのである。麻類の衣服は吸收した所の水分を蒸發することが最も早いから其度毎に體温を放ちて如何にも凌ぎ易いのだ。されど如何に凌ぎ易いとても朝夕は可成木綿服を用ゐるが宜い。毛布は水分を吸ふ力は甚だ強いけれども、蒸發力が遲いからして麻布の樣に急に寒さを感ずることは無い。而して彈力が有つて其の氣孔が久しく開いてゐる爲に、空氣を流通せし

衣服各種の地質に於ける優劣

める點に於ても差支無い。尙左に衣服各種の地質に於ける優劣の議論をして見よう。

衣服各種の地質に於ける優劣

——更に毛布類の價値を繰り返せば、其の彈力に依て氣孔を保ち、體温の發散を防ぎ、水分を徐々に蒸發せしめ、頗る通氣性にも富んで居れど、其の短所は之を用ゐる月日長ければ、段々と其の長所の彈力が無くなつて甚だ脆くなる。殊に洗濯すればする程、其毛が落ちて、何の効力も無いやうになる。詳しく言へば毛布類に織り込んである獸毛の表面を顯微鏡で見ると、鱗の狀をなしてゐるけれど、餘り久しく着てゐるか、或は屢洗つたのは其の纖維が滑かになり、從つて鱗の狀も無くなれば、勿論彈力も其の効を失ふのである。若し洗濯の點からのみ論ずれば毛布類は最下等の品である。其處に行くと木綿の如きは幾度洗濯しても、木綿は木綿の性質を失はないで、長へに我等の身體に忠節を盡してくれる。されば新らしい毛布類を度々着換へるだけの資金を有たぬ我等貧乏人は、廉價で洗濯の利く木綿を以て滿足せねばなるまい。絹は元來彈力には富んで居れど惜しいことには之を製し上る時、灰汁を以て柔練す

織物の空隙を利用せよ

るから、灰汁の亞留加里性の爲に其の彈力を失ひ、滑かで奇麗な、而も軟かい性質に變ずるのである。されど其の柔軟なる爲に皮膚に觸れると得も言へぬ快感を與ふるものである。併し價の高くて通氣性少く、夏冬共に凌ぎ難い短所は十分にある。麻は木綿に次いで彈力に乏しいものではあるが、木綿と共に久しく用ゐても、或は洗濯しても、容易に其の性質を變へぬのみならず、盛夏の衣服としては涼しい感を與ふることが長所である。金巾は其の質が極めて薄いから、襟裏の如き嵩高になる所に用ゐて都合の宜い長所が有るとは言ふものゝ、少しの水分に逢つても水に浸したやうになり、其の氣孔が全く塞がり、若も襯衣で有つたならば、ピッタリと皮膚に觸れて、其の不快さ加減は何とも言へぬ。されば是等の長短を考へて取捨撰擇するが衞生の道である。

織物の空隙を利用せよ——衣服の原料たる織物に、大切なる一條件は其の空隙である。而して其の空隙には三種あつて、(一)を纖維空隙と云ふ。これは毛布類の如く其の纖維の間に空隙があるのである。(二)を絲間空隙と云ふ。これは經緯の糸の間に空隙があるのだ。(三)は織物と他物と觸るゝ面に空隙を生ずるので、之を觸接間隙と云ふ。何れの間隙も必要であるけれど、この觸接間隙に富んだ物は衣服が濕つても皮膚に不愉快な冷氣を覺ゆることが無い。之を利用して作つてあるのは縮織である。縮織はその表面に皺卽ち凹凸があるから、此の目的卽ち觸接間隙が出來るのだ。羅紗、フランネルは其の表面に絮毛があるから、矢張觸接間隙を作り、少し位濡つても不愉快なる冷氣を感ずることが無い、また、我が國人が夏に用ゐる撚紙製或は綿糸製の網襯衣を用ゐるのも、矢張襯衣を皮膚にピッタリ觸れしめぬ樣、卽ち觸接間隙を作るためである。現今世人が用ゐる中で、此の觸接間隙に適つた襯衣は毛莫大小を第一とし、木綿莫大小・木綿縮を以てこれに次ぐものと定めても可からう。從來我國の夏服は麻や木綿を以て作り、襯衣には縮或は觀世撚を以て拵へた網狀の物を用ゐてゐるが、これは誠に道理に適つたことである。故に西洋人は其の眞似をして網狀或は縮に就き、頻りに工夫してゐる。然るに我が國人は寒暖共に不都合なる洋服を着て衞生を害しつゝあることは慨はしい現象だ。

衣服の製法に就いて——衣服は其の用ゐる場合に依て其の拵へ方を異にせね

ばならぬ。即ち色々の服が必要であるけれど、大別して言へば是非共靜坐服と運動服とは無くてはなるまい。靜坐して居れば袖が長からうと裾が長からうと、乃至は衣冠・束帶左程の不便は無いが、運動するには窮窟で無く、袖・裾などの邪魔にならぬやうに輕便で無くてはならぬ。併し靜坐・運動何れにしても、空氣の流通を宜くする樣に、袖口・八口・衿などを寬かにしてゐぬと、甚だ害あることは言ふまでも無からう。縱ひ靜坐してゐても其の換氣が十分で無いと徒らに疲勞を增すばかりである。況んや勞働者に至つては其の發汗が多いから、尙更注意して拵へねばならぬ。一般に、運動服は其の發汗が速く蒸發し易い所の物が宜くて、靜坐服は殆んどこれに反するのが宜い。其處に行くと、洋服は靜坐にも勞働にも適せぬ。何となれば其の裁縫の仕方が緊約であるから、窮窟であるのみならず、衣服內の換氣が十分行はれ難いからである。和服は靜坐に適してゐるけれど、勞働服には例の袖・裾が邪魔になつて矢張不都合である。故に勞働服には袖・裾を今少しく短くして、其上短い袴を着けた樣な風に改良したならば嘸や宜からうと余は信じてゐる。小兒は活潑に運動するものであるから、矢張この

勞働服的が宜い。余の友人は我が兒の衣服を「かぶりしやつ」の如くに仕立て、而して胸の方だけは二重に溫かく、被布の如くに掻き合せて鈕留にし、腰以下は行燈袴の如くに開いてゐる。袖は邪魔にならず、前が開く憂が無く、何れの部も堅く縫る弊も無い。小兒には斯の如き衣服を用ゐた方が、發育の上に於て、甚だ宜からうと余は贊成する。次に和服は靜坐・運動の別無く、又男女を論せず、何れも半袴・引を穿くことが必要であらうと思ふ。其譯は冬は溫かで夏は肉體を表す不體裁が無いからである。重襲せぬ夏の風吹く日に、妙齡の女子が素脛を表はして歩くのは野蠻の風習を示すやうで、餘り見とも宜いものでは無からう。兎に角我國の衣服には一大改良を施さねばならぬ。

衣服の染色——衣服の染色も亦衞生上に大關係あるものである。暗黑色の物は溫熱を吸收し易いから、冬には宜からんも夏には甚だ宜しく無い。これに反して白色の物は太陽の熱を撥ね反して炎威赫々たる夏の日には何と無く涼しさうに見ゆる、イヤ涼しさうに見ゆるばかりで無く、實際に涼しいのだ。今其の涼しい理由を證據を擧げて說明しよう。爰に二つの同じ大さの瓶に同じ量の

氷を入れ、一は黒布を以て被ひ、一は白布を以て被ひ、共に太陽に晒しておけば、黒が一時間で溶けるものならば、白は二時間餘も經つてから漸く溶ける。これその黒が熱を吸收し易いに反し、白は撥ね反す質があるからである。故に絹の羽織も神官然たることを關はぬとすれば、白の儘に染めないで唯紋だけを黒にしておけば可いと余は考へてゐる。

衣服の洗濯法に就いて

衣服の洗濯法に就いて

衣服の洗濯するに、唯單に水で洗つた丈でも洗はぬよりも況であるけれど、本當に垢を除かうといふには、他の方法を用ゐねばならぬ。通常の家庭では木灰汁で洗つてゐるが、木灰汁は亞爾加里性の物であつて、毛織類の地質を變ずるものであるから、甚だ宜しく無い。若し用ゐるにしても可成其の性の稀いのを撰ぶが肝要だ。然らば何を以て毛織類を洗ふか、曰くそれにはイエーゲル氏の洗濯法は最も宜い。其の法は礦砂或は硼砂を以て毛布類の剛く變るを防ぎ、さうして後、石鹸で汚垢を洗ひ淨むるのである。すべて毛織類を洗ふには、強く揉ぬやうに洗ひ、之を干し乾かし、その生乾きの時に火熨斗を懸けるが宜い。フランネルは、之を振り動かし、莫大小は縦に延しておくが宜い。毛織類ならぬ木綿織や絹類は木灰汁で洗つても可い。此類は木灰汁で洗つて、其上炭酸曹達或は石鹸で洗ひ淨むるが宜い。

糊は大抵洗ひ上げた後附けてゐる。之は如何なる効能あるかと云ふに、夏などに於ては、衣服の地質が柔かで、爲に肌にピッタリ接くのを誰も厭ふものであるから、爰に糊を附けて觸接間隙を生せしめるのだ。されど其の短所を言へば氣孔を塞いで通氣性を失ふ點である。況んや飯が腐つたが捨るのも勿體無い」とて、之を糊にして附けるに至つては其の害は一通りで無い。

衣服の附屬品に就いて

コルセットと帶

衣服の附屬品に就いて

彼の西洋婦人がコルセットを以て腰を堅く締めるのは、其處に通ふ血液の循環を妨げ諸内臓を壓迫し、殊に子宮を傷めるなど其の害を蒙むること、何程なるか測り知ることが出來ぬ。然るに我國婦人は此のコルセットを用ゐぬ代りに、大きな帶を纏ふ。抑、大帶は幅廣くて丈長く而も厚くて重く、これが爲に矢張身體の諸部を壓迫し、呼吸作用を妨げ、或は血液の循環を遮り、生殖器の病源をなすなど、其害の夥しいものである。一日も早く改良したいものだ。之と同じ道理からして、思ひ出したが、小兒の附紐も今少し下に附け

て寛くせねばならぬ。

帽子頭巾は年老いて禿頭になつた人ならばいざ知らず、衞生上無くても差支の無いものだ。何となれば、天然に髪といふ重寶な物がブサ〳〵と生えてるから冬寒の節と雖も頭から感冒を招き、又は頭の凍瘡にかゝるやうな心配は無い、又夏の日とても傘を用ゐれば太陽の光線を遮ることが出來る。然るに之を冠らねばならぬものと心得、其の帽子の性質如何を省りみざるに至つては、第一皮膚の機能を鈍からしめ、空氣の流通を妨げ、腦病を惹起す遠因となるものである、されど帽子も一の儀式的の物の樣になつてゐる今日豈夫己れ獨り冠らぬ譯にも行かぬ。されば夏冬とも充分換氣孔が有つて重量の輕いのを撰ばねばならぬ又、夏の日、帽子を以て傘の代用にしようと云ふには、周邊の緣が廣くて、身體に蔭を作るのは涼しい。併し重くて頭を疲勞せしむるから、返す〳〵も輕きを撰び、而も日蔭の處に行つた折、手に取つて清風を頭髮の間へ通はせることが肝要である。

襟巻と手袋も大抵の場合は用ゐぬが宜い。されど北風天地を削るが如く、指頭感覺を失ひ、齒根相合はずとでも形容す可き冬の日に、長い旅行をせねばならぬ時は此の限りで無い。古來我國は頸部手首を露すを以て、目上に對する禮儀としてゐるが、これは誠に賞む可き美風である。夫れ頸は血管に富んだ所で、之を温包するの必要が無いのみならず、頸部よりして、皮膚上の汚い空氣を主に排出するのである。又、手は常に運動す可き部であるから、身體の他部分よりは皮膚の抗抵力が強くなつてゐる、故に故らに之を被ふの必要は無い。然るに一度之を用ゐると、それが段々習慣になつて、稀に用ゐぬことがあると、忽ち感冒に罹るやうになる。夢々この習慣を附けてはならぬ。それ故冬の日外出せんとする前に、頸部と手との冷水摩擦を爲し、暫時經つてから外出すると、寒風に觸れても左程に寒さを感ぜぬものだ。

足袋は衞生上必要の物である。斯ういふと、足も手と同じく皮膚の抗抵力の強い部だから足袋を以て被ふの必要は無いでは無いかとの反問も起らうけれど元來足袋は足を温包するばかりの目的では無くて、地上に接近してる足に、砂埃の如き汚物を吸收せしめぬが肝要なる目的である。塵多き東京の都などでは

夏の日に足袋を穿かずに歩くと、汗じみた足背に多くの塵埃を受け、一方ならぬ不潔である。現今用ゐてゐる所の日本足袋は其筒が短くて不充分なれば、今一層之を長くし、それで下へ折れ曲らぬやうな工合に改良したいものだ。又、足の冷ゆる人や逆上性の人は夜も足袋を穿いて寢るが宜い。

雨具には桐油紙・合羽・二重外套・吾妻コート・裝・御座・鳶など、其の種類は澤山あれど桐油紙合羽は氣孔塞がつてゐて換氣の出來ぬのみならず、冬は寒くて夏は暑く甚だ宜しからぬものだ。毛布の外套は、最初は其の彈力で、氣孔が開通してゐるけれど、水分を吸收するに從ひ、次第〳〵に氣孔を鎖し、遂に重量を增し、その効力を失ふものである。若し夫れ不體裁を構はぬならば裝に及ぶものはあるまい、空氣は十分通つて輕く、夏暑からず、冬寒からず、雨露を防ぎて體の蒸發氣を通過せしむることが出來、それで價が安い、されば之を何とか改良して不體裁で無いやうにしたいものだ。近來英國ではフランネルなどの地質に藥を敷いて、雨露の通過を防ぎ、所々に小孔を穿つて空氣の流通を營むやうにした雨具がある、或はこれを以て最上の雨具とす可きか。

夜具に就いて――夜具の衞生を言ふに先ち、睡眠の事を雜と述べてかゝらねばならぬ。夫れ睡眠中は何の思ふ事も無く、何の爲す事も無く、殆んど植物同樣に休止するのであるから、皮膚も其の機能を減ずるは云ふまでも無い。抑我等は晝間の中斷わず思考したり運動したりしてゐるから、血液は常に頭腦や筋肉に多く注入してる、睡眠中には血液を可成軀幹に引いて腦を休ませねばならぬ。さうするには軀幹を温めて其の目的を達せしめるのだ。軀幹を温めるには衣服を晝間よりも多く着るが宜い。乃で其の衣服は取りも直さず夜具のことで十分輕暖なるを撰ぶが肝要だ。夜具の重きは徒らに疲勞を增し、熟睡し難いものである。それには鳥の羽を以て綿に代用するなどの便法もあるけれど、餘り温暖に過ると、十七八歳から二十四五歳までの青年者には淫慾を惹起し、猥りがはしき夢を見るなどの媒介となる。故に青年者は感冒に罹らぬ範圍に於て厚着をせず、床離れに未練な心の起らぬやう奮然蹶起せねばならぬ。次に吊夜具は病人に適するもので健康者の眞似すべきものでは無い。一般に夜具は敷布團を厚く重ねて掛布團を薄くするが宜い。又掛布團は少し位薄くても、廣くて

長ければ暖くて輕い。然るに厚くても手足の出る樣な夜具では唯重いばかりで左程に暖く無いものだ。又夜具は極めて汚れ易く、爲に黴菌の附着することも多いから、白い敷布を以て上敷とし、屢、取り脱して洗濯し、綿も時稀には日光に晒さねばならぬ。日光は一の消毒藥になるもので、卽ち其の黴菌を殺し、吸收したる濕氣瓦斯を放ち、更に良い空氣を含むなど其効決して少く無い。

序に言つておくが睡眠中は殊に胸腹を冷してはならぬ。フランネル樣の物を以て此部を溫包して寢るが宜い。幼兒や青年者は、其の働作が活潑であるから、睡眠中でも、其の反射運動が激しく、爲に東枕が西枕になつてるやうなことが珍らしくないから、殊に此部を卷いて寢る必要があるのだ。更に睡眠作用を繰返すやうでは有るが、睡眠中は其の目醒めてゐる時、運動に依て生じたる老廢物を排泄し、消費したる物質を補ひ、多量の酸素を吸ふ、其の酸素は直ちに酸化作用を營まないで、勞働するときの爲に蓄ふものである。斯樣に睡眠中は酸化作用の行はるゝことが少いから、溫を發することも亦少くなければならぬ。これ其の夜具を多く着る所以である。而して呼吸作用や腸胃の作用は睡眠中は却つて

盛んであるから、殊に此部に血液を集めんために胸腹部を壹間よりも溫包せねばならぬのである。

右の外、尙衣服の附屬品等に就き、述べたきこと數多あれど、皮膚の衞生に餘り要用でないから、先づこの位に切り上げ、次は美容法（皮膚關）に移るとしよう。

皮膚を美麗ならしむる法

皮膚の美麗とは如何。曰く皮膚に活々としたる光澤があつて、それで大理石か羽二重かに觸るゝが如き滑かいのが美麗である。斯う申すと色が白くなくてはならぬの一語を附け加へねばと、讀者或は言はるるかも知らねど、元來色の白い黑いは人種に依ることで、我國人は黃色人種であるから、印度人の如くに黑くなかつたら、縱ひ西洋人の樣に白く無くても、これに滿足して居らねばならぬ。彼女は色が白くて美しいと、人の賞める女を觀るに、成程比較的白いには相違無いが、多くは白い中に蒼みを帶び、何と無く活々とせぬ所があり、衞生思想の發達せる者から批評すれば、結核質の人であつて、如何にも醜婦だわいと言ひたくなる。抑、色の黑いといふは、色素の濃厚なので、前述の如く、人種にもよるし、又先天的にもある。歐米人とても、中には頗る黑い人もあ

賓頭盧尊者とは寺の本堂などに在る撫佛のこと

るし、日本人とても稀には歐米人に劣らぬ白い者もある。されど、其の白いといふ人は、大抵深窓に閉居してる的の者にある、故に若し其人をして毎日原野に耕しせしむるか、或は海洋に漁りせしむるかすれば、日光の内の紫外線が皮膚に作用して、色素を沈着せしめ、遂に賓頭盧尊者的になるに相違無い。その代り斯うなれば皮膚の抵抗力が強くなつて、容易に感冒などに罹らぬ。此點から考へても色の黑い方が健康なる徴で、抽象的に言へば美麗なのである。然るに其の病的否不健康の徴を學ばんとし、可成外出を禁じ、それでも尙白くならぬ所から、人工的の裝飾を試み、果は奸商の餌となつて色白藥を服んだり塗けたり、或は鉛を含んだ有害の白粉をコテ〳〵塗つて、遂には皮質を粗糙にし、或は色艶を惡くし、可惜顏を臺なしにする婦人が世に澤山ある、實に慨かはしいことだ。而して斯る婦人の癖として、皮膚を美麗ならしめる所の行をせぬ。重言すれば不性で顏も朝一度禁厭的に洗つて其他は唯一寸何か塗れば直ぐ美しくなるといふやうな棚から牡丹餅的の僥倖美麗法のみを希うてゐる。人あつて、例へば『冷水摩擦をなさい、必ず皮膚が美麗になります』と勸むれば『其樣な冷い事オヽ厭だ。』と

山口とは物に入る始めといふこと

顧へる。乃で『〇〇水を塗けなさい色が白くなること妙です』と言ふ者があれば、直に膝を進めて『有難う早速行つて見ませう。』七ッ答で買に走る。斯ういふ風では衞生思想の發達せぬ徴で、慨かはしい現象である。されば余の理想とする皮膚美麗法即ち前述の如く、活々としたる光澤があつて、滑かで、何處に斑痕一つ無い淸淨無垢の健康な皮膚になる方法を滔々と左に述べて見ませう。

(一)新鮮なる空氣に觸れよ——皮膚の色艶を宜くせんと思はゞ、先づ第一に新鮮なる空氣に觸れねばならぬ。新鮮なる空氣に觸れんとするには、四季に拘らず早朝に起き出で、素裸乃至は單衣物一枚になつて椽側又は戸外に出で、冷風浴を實行するが皮膚美麗の山口である。それから寢るまでの間でも、時々戸外に出でたり、或は戸を開いて換氣法を行ふたり、又一日の中には二三度位帶紐解いて身體中の不潔なる空氣を掃ひ出すが肝要である。論より證據家にばかり閉ぢ籠つて何時も不潔な炭酸瓦斯交りの空氣に觸れてる人は、日を經るに從ひ、皮膚の色は段々光澤を失ひ、次第に蒼みを帶びて來るでは無いか。

運動は如何なる種類が宜しきか運動の宜しきには如何なる食物があるか滋養化の消化作用に於て詳しく述べて參照する可し

(二)光線に觸れよ――縱ひ新鮮なる空氣に觸れてゐても、太陽の光線を無視してゐては、矢張死人的の蒼白色になるは言ふまでも無い。例へば爰に人あり、日中はグイ〳〵寢てゐて、日沒から明朝まで働き、常に新鮮な空氣に觸れてゐたら、それで皮膚の色は艶々してゐるかと云ふに、決して然うでは無い、矢張前者と同じく光澤を失ひ厭な色を呈して來る。されば家に居ても可成明るい室を撰び、又時時渺茫たる原野や海洋などに出でゝ日光浴を取らねばならぬ。されど夏の眞晝に赫々たる光澤を直射せしめよと云ふのでは無い。唯適度なる光線を受けよと勸めるのだ。過ぎたるは猶及ばざるが如しとは何事にも能く當て嵌る語である。

(三)運動をせよ――爰に人あり、新鮮なる空氣、適度なる日光に何時も觸れては居れど、其の戸外に出るや必ず車に乘り、更に自働的の運動をせぬとしたならば、之で皮膚の色が宜くなるかと云ふに然うでは無い。新鮮なる空氣、適度なる日光に觸るゝと同時に筋骨の運動を爲ねばならぬ。運動は血液の循環を宜くし、身體一般の新陳代謝を促すものであるから、從つて皮膚毛髮の色を佳良ならしめ

如何なる食物があるか滋養化の消化作用に於て詳しく述べて參照する可し

險中の且つ滑らかになるものだ。運動不足なる人の皮膚は、色艶が惡くて、其上粗糙であるのみならず、若年の折から小皺が寄つて來る。

(四)滋養食物を取れ――毎日外に出て仕事を爲し、十分に光線にも觸れ新鮮なる空氣も呼吸し、言ふまでもなく運動もしてゐる農夫や車夫馬丁等の皮膚を見ると、日に燒けてゐて黑いから、丈夫相には見ゆれど、彼等の多くは飽食をなし善良なる滋養食物が不足を告げてゐるから、一種言ふ可からざる惡色がある。況んや其の飽食すら十分に取られぬやうな下層貧民に至つては、土色と言はうか菜色と言はうか、イヤハヤ實に憐れむ可き色を爲してゐる。

(五)睡眠を十分に爲せよ――睡眠が不足すると、皮膚は蒼白くなつて來る。之を疑ふならば、試みに一夜だけ徹夜して御覽なさい。顏面は俄かに活氣を失ひ、且つ色は靑褪めて大いに艶麗を妨げるものだ。況んや毎夜續いて永久に不足するに至つては、其の皮膚色の惡くなること推し測らるゝであらう。尙睡眠の道理等に至つては「神經系の卷」に至つて詳しく述ぶるとしよう。

(六)沐浴を怠る勿れ――以上の五事を悉く實行しても沐浴を怠る人は、皮膚に垢

が溜つて不潔なるのみならず、コセ〳〵として光澤を失ひ、且つ色々の皮膚病に罹り易く、遂には醜い皮膚色に變ずるものだ。されば本卷の(四〇頁)から(四八頁)に至つて述べたる沐浴法に依て、皮膚毛髮を清潔にするが第一の美麗法だ。殊に顏や手足は塵埃の最も附着し易い處であるから、朝晩の二度に限らず、屢〻冷水を以て洗ひ清めるが宜い。西洋の諺に「水は天然の化粧水なり」といふ語がある、實に味ある言葉だ、此の廉價な天然の化粧水を以て顏や手足位の一小部を一日に五六度位洗ふことを面倒臭がるやうな人は、到底美人となる資格が無いと諦めるが可い。

(七)精神を快活ならしめよ——身體の衞生を頗る實行してゐても、精神の快活がこれに伴はぬと、次第々々に皮膚の色殊に顏面の色が惡くなり、何時の間にか蒼みを帶び、從來の艶美を大いに損ふものである。之を心理學者は心身の關係と名づけてゐる。心身の關係は妙なもので、憂悲哀に日を送ると、啻に顏色のみならず、身體到る處衰弱して髮毛までも拔け且つ白くなるやうになる。嗚呼精神の衞生も亦忽せに出來ぬものである。

色を白くする方法はなきか

以上の七事を實行すれば、色の白い黑いは別問題として、兎に角生理衞生的の美麗なる皮膚に到達せられるものであらう。

色を白くする方法は無きか——讀者或は言はれん、『粹といふ事を更に解せぬ、唯衞生一天張の著者の如きは、寧ろ黑い方が理想かも知らねど、東西を問はず、古今に論無く、世は滔々として色の白きを欲することにしあれば、著者にして若し白くなる方法を知れるならば、請ふ敎へてくれよ』と。余之に答へて曰く、『余は由來色の白い方で有つたが、十六七歲の時謂へらく、色の黑い人の方が健康のやうだし且つ容貌も立派に見ゆる、何うか黑くなりたいものだと、夏日には游泳や熱沙浴を稽古し、黑くなるやうに務めた位であるから、白くなりたいなどゝは夢露願はぬけれど、白くなる方法があるならば、之を知りたいものだと、人にも聽き、書でも見、頗る研究して見た積りである。所が方法を述べた書物や、口傳乃至は賣藥も甚だ澤山あれど、健康を害せず、否幾分害するにしても、白くなるといふ確法は未だ發見出來ませぬ。』と然れど、兎に角昔から、白くなると云ひ傳へてゐる諸法の中から、十五法を撰んで紹介すれば、

法列兒水は一名を亞硫酸加個謨液とも云ふ

白色法其一――砒石劑を内服するのだ。砒石劑とは如何曰く現今主に用ゐる所の物は亞砒酸と法列兒水との二品である。亞砒酸は著名の毒藥で、化學上に言へば三酸化砒素或は無水亞砒酸で、極めて少量を内服すれば、始め食道及び胃に於て溫感を生じ、饑餓及び渴意を起し、心臟作用は增し且つ强くなるなどの良果あるとのことなれど、久しく續けて服むか、或は初めより大量に用ゐるかすれば、諸般の器管に障碍の兆を呈し、甚しきは一命に關するものである。而して之が効能は醫師社會に於て二說に分る。甲は『確然たる良効あるもので無いから、斯る毒藥を更に用ゐるに及ばぬ』と擯ねつけ、乙は『變質强壯劑の親玉であつて、諸藥中でも嶄然頭角を表はせる有効なる藥だ』と稱へ、神經病者・頑固の麻痺・利尿・病・貧血・慢性皮膚病・淋巴腺腫などに頻りと用ゐてゐる。乃で又其の乙者の中には亞砒酸は斯の如く變質劑で、而も皮膚に作用を及ぼすことの著しいものであるから、皮膚色の黑い人が、左の分量に依て連服すると、次第に黑質を變じ、白質になることを得と稱へ始めてから、佛國の婦人中には、往々之を應用し、化粧に浮身を窶す者が澤山あるやうになつた。其の用量は始め大量を用ゐ、漸次減量せよと主張する說もあれど、それは危險である。それよりも用ゐるならば最初極めて少量を用ゐ、漸次增量し、而も食事の直後で無くては宜しく無い、兎に角用量の表を示せば、

	一回量	一日量		一回量	一日量
一週間	〇・〇〇〇五	〇・〇〇一五	六週間	〇・〇〇三	〇・〇〇九
二週間	〇・〇〇一	〇・〇〇三	七週間	〇・〇〇三五	〇・〇一〇五
三週間	〇・〇〇一五	〇・〇〇四五	八週間	〇・〇〇四	〇・〇一二
四週間	〇・〇〇二	〇・〇〇六	九週間	〇・〇〇四五	〇・〇一三五
五週間	〇・〇〇二五	〇・〇〇七五	十週間	〇・〇〇五	〇・〇一五

斯の如く少量より始めて漸次增量するのである。けれどもそれでも、途中で消化障害或は心臟の鼓動が高まるやうなことが有つたら、一時その服用を中止し、治つてから、再び始めるが宜い。又夫等の中毒症狀更に無くとも十週間に達したら、約十日間休んで五週間目位の分量より繰り返すのである。

法列兒水は亞砒酸末一分・重炭酸加個謨一分・蒸餾水十分を混ぜて製方したる液體で、生理的作用や効能は亞砒酸と異なる所は無い。用量は一日〇・〇五(一滴弱)より始め、漸次增量すること等は前者と同樣である。乃で右二者の處方を示せ

ば左の如し。

▲亞砒酸〇・〇〇一五　還元鐵〇・一五　甘草末　亞拉毘亞護謨漿　各適宜
右三丸を爲し食後一丸宛

▲法列兒水一滴　桂皮水五〇・〇　水五〇・〇
右一日三回食後分服

▲法列兒水〇・〇五　桂皮水　五〇・〇　水五〇・〇
右一日三回食後分服

余の經驗――「色が黑くて困ります」何うか亞砒酸の處方を與へて下さい」と切に、頼んだ方に依て、小心翼々連服せしめた者が數人ある。其中で或たる癩癩になる女は二週間漸續けたけれども、更に効が見えぬ所から、一時に四日分を頓服し中毒を起し漸くの事で命だけは助けたのであるが、乙は余の指揮通りで黑さは從前通りで黑さは矢張黑だ。丙は從來よりも黑くなつたやうだ。不平は白溢くはなるまい。丁は白くはなるまい。されど余は始より保證して勸めたのだが、幾分か赤みを帶び、健康なる處方を持つて行つたきり、一年餘も來らなかつたが、或日突然來つて「御陵で大分白くなりました、實に有難う御座います」と過分の謝金を受れた、されど余は其の謝金を返し、從つて曰く「貴女は亞砒酸服藥中に雜毒を爲し、多量のつたのでは無い、されば亞砒酸の力は毫も與つて居らぬ、然るに人の衰弱なる見て、神經衰弱者や腺病者などよりも其罪が甚深云々」と。

白色法其二――硼酸二・〇　薔薇油二滴　温湯一〇〇・〇　此の溶液が冷えてから之を以て顔其他の皮膚を洗へば皮膚病を豫防し、皮膚の理を濃かくし、數月數年續けてゐる中には色が白くなる。これは薔薇油が色を白くする性質があるからだと。併し薔薇油が何うして皮膚の色素を退けるかと說明して無い。余は思ふに薔薇油は芳香を放つものであるのみならず、薔薇の花は美しいものであるから、爰に牽强附會の說を流布したものであらう。兎に角信ずるに足らぬ說だ。

白色法其三――冬瓜（東京地方では冬瓜と云ふ）一個を細かに挫いて酒一升の中へ入れ、文火にて煮詰め、膏藥の如くになつてから、布に包みて搾り、滓を去り、其液を臨臥に顔に塗り、明朝洗ひ落すのである。これも東洋的の駄法螺で有らう。併し皮膚を害する物で無いから試しても差支は無い。

白色法其四――Melone（瓜）を細かく切つて牛乳に浸しておくと一夜。然る後之を漉して洗へば日を經るに從ひ白くなる云々。これは獨逸や英吉利等の婦人が行ふさうだが、これとても學理上で說明出來るのみならず、隨分實行してる人も有れば、餘り効が無いやうだ。

白色法其五――これも西洋で行ふ法であるが、山葵を擦つて粉にし、之を顔なり手なりの皮膚へ附けて、揉みながら水を灌ぎ洗ふのである。毎日實行すれば白くなるといふが、これ亦學理上より説明出來ぬのみならず、或人の實驗談を聽くと、白くならなかつたのみならず、皮膚が粗糙になつた云々。

白色法其六――湯で顔を洗ふことを禁じ、即ち冷水を灌ぎ、手を下方より上方にのみ向けて洗へば色が白くなる。一言以て之を蔽へば皮膚を逆に洗ふのである。成程表皮の細胞は上方より下方に向つて瓦を積み重ねたやうになつてるから、垢を落す上に於ては、此方が或は宜いかも知らねど、斯る單純なことで色が白くなるなどゝ大袈裟に言ふは實に滑稽じみてゐる。

白色法其七――黄橙の液汁を塗ければ皮膚が艶麗になり、且つ白くなることであると。皮脂の少い老人などが之を用ゐれば、多少は皮膚の粗糙を防がれるかも知らねど、色が白くなるとは眞赤な嘘であらう。

白色法其八――毎朝冷水にて顔と手とを十分に洗ひたる後、更に清水を汲んで其中へ倔里設林少量を落し、之を以て更に皮膚へ擦り入れるやうに洗ひ、輕く拭いてから、暫時戸外の風に當てゐるやうにして居れば、色が白くなると。これは其七と共に How to be pretty（何うすれば美麗になられるか）といふ本の中に書いてあるが、素人欺の法螺であらう。

白色法其九――雞卵を以て顔なり手なりの皮膚に擦りつけ、然る後水で洗ひ落し、絹ハンカチを以て拭き居れば、顔の色艶が宜くなるのみならず、玲瓏雪の如く白くなるものだと。卵黄は塵埃や垢を吸收する性質があるし、卵白は脂肪を含んでゐる上に粘着的であるから皮膚の枯瘦せる人には、幾分滑澤にする効能は有らうけれど、色を白くする點に至ては到底不可能であらう。兎に角結構な滋養食品を顔を洗ふ料に用ゐるとは實に勿體無い事だ。我れ若し神なりせば卵で洗ふやうな人の面を直ちに黑くして遣らうものを……。

白色法其十――鶯の糞を皮膚に擦り入れてから水を以て洗へば日を經るに從ひ、白くなるものだと。之は我國では昔から言ひ傳へて居ることで、もあるし、又化粧に浮身を窶す輩の實行したことではあるが、更に効驗のあることでは無い。嗚、如何なる虚欺者が言ひ始めたことであるか、面憎しとも面憎し。

白色法其十一――小豆五合滑石三瓦白檀十五瓦の三品を粉末とし絹にて篩ひ、毎朝顔を洗ふ時等に之を撒布し、然る後清水にて洗ひ落せば數月數年の後には何時の間にか白くなつて來ると。これも一顧の價値無き愚法である。

白色法其十二――豆腐の殼卽ち卵の花で顔を洗へば白くなると。これも色白の爲に煩悶せる人を慰藉するに過ぎぬ無効法である。

白色法其十三――米泔汁を以て皮膚を洗へば白くなる上に皮膚病の豫防となる云々。白くなることは根も葉も無い虚言なれど、乾燥せる皮膚を幾分か滑澤にする効は確かにある。

白色法其十四――或る書物に「楊貴妃玲瓏散を塗るのだ。これは色を白くする上に艶を宜くし美人となる疑無し、彼の名高き楊貴妃が、唐の玄宗皇帝を掌中に丸めたと云ふも畢竟この藥を塗つたからである」と。由來因緣まで長々と吹きたてゝある。而して其の楊貴妃玲瓏散の處方は如何と云ふに、

▲密陀僧二兩三〇・〇）白檀二兩三〇・〇）蛤殼粉五兩（六五・〇）

右三品を各細末にしてから、又能く混和し、鷄卵の蛋白を入れてトロ〳〵にし面に擦り込み暫時經てから、糠を以て洗ふのである。

鷄卵と糠だけは皮膚の爲に惡くは無いが、其他は却つて塗らぬ方が宜い。色の白くなるなどゝは眞赤な嘘である。

白色法其十五――これも前者と好一對の話だ。曰く佛國の皇帝那翁第一世の皇后徐世賓が用ゐたる皮膚美麗法で、第一に色艶が宜くなり、第二に理が細かくなり、第三に皮膚の皺が除れて滑かになり、第四に柔かくなり、第五に色が白くなる秘法である。而して其の外用藥の製法はと云ふと、菫の花を莖と共に牛乳の中へ入れて二三時間も煮、之を以て顔なり手なりを洗ふのだ。果して徐世賓が之で洗うたか何うかは知らねど、今に之を言ひ傳へて、彼國の婦人達殊に女優共は實行してゐる。所で効があるかと云ふに、間接には皮膚の枯燥を豫防する爲にならうけれど、白くなるなどゝは嘘の皮なり。

右の外に尙白色法の如何なる秘訣があるかも知らねど、余の調べた所はこれきりで、取りも直さず余は財布の底叩いて知れる限りを述べたのである。して見ると衞生を實行する外に、皮膚美麗法は無いことになる。されば貴てもの愚藉

に無害な化粧法でも承らう、然らば言はん。

無害なる化粧法――化粧法を大別すると、永久的化粧法と一時的化粧法とある、永久的化粧法とは六九頁より七四頁にかけて述べたる皮膚美麗法を實行し傍、良効なる石鹸を適度に使用し、或は皮脂の不足を補ふ位の油を髪や頭に塗る位を云ひ、一時的化粧法とは紅・白粉の如きを塗けて、一時人の目を胡魔化す法を云ふ。前者は衛生上宜しけれども、後者は幾分か害あるを免れぬ。縱ひ無鉛毒の白粉とても、之を皮膚に塗れば、其の部分の氣孔は塞がれ、其の部分だけは十分なる皮膚機能を妨げられるからである。然れど、身體の僅な一部に無害な白粉を薄く塗つたからとて、それが壽命を縮める程の害にもならず、又古來より儀式的に行はれてゐることなれば、時稀に塗ける位をさる小理屈附けてガミ〳〵言ふにも及ぶまい。然れば石鹸糠袋乃至は梳油から白粉に至るまで世に行はれてゐる化粧品の一通りを批評して見よう。

石鹸――水や湯は表皮を膨脹軟化せしめて垢や塵埃を洗ひ去り、清潔にするものであるが、之と同時に石鹸を用ゐると、尙一層この作用を助けるものだ。故に化粧品と言ふよりも寧ろ實用品と謂はねばなるまい。然れど石鹸は皮脂を溶解する作用を有つてゐるから、餘り屢、これを濫用すると、皮膚や毛髮は乾燥して脂氣を失ひ、ザラ〳〵になるものである。殊に粗惡な石鹸になると、啻に乾燥してザラ〳〵になるのみならず、甚しきは裂傷などが出來て、遂に濕疹を生ずることがある。右の次第であるから、皮脂の少い人は餘り用ゐぬ方が得策だ。若し垢を落すために、時稀用ゐるならば極めて良好なるを撰ばねばならぬ。良好なる石鹸は代價の高いのや、香の佳いのや、廣告文などを標準にしてはならぬ。抑、純粹の石鹸は脂肪酸類・亞爾加里の抱合物であるけれど、若し脂酸少くて十分に抱合せず、游離亞爾加里の多いのは下等である。此の下等上等の試驗をせんと思はゞ、フエノ、フタレンを三倍の酒精に溶し、之に石鹸を入れると、游離亞爾加里あるときは忽ち赤い色になる。これは勿論惡いので、さうでないのは善いのである。素人が斯る試驗をせずして、一寸鑑定する方法は、第一に嘗めてみて其の刺戟少く、持つてみて重量輕く、水に溶してみて細い泡の澤山出來るのは、大抵良い石鹸であるが、奸商輩は砂糖を混ぜて刺戟を少くしたりするから、これとても

安全なる鑑定法では無い。されば今更に石鹸を化學的に論じ併せて其の製法をも記しておかう。

石鹸とは之を廣義に言ふと脂肪酸の金屬鹽類の總稱で、通常の化粧用及び洗濯用に供する石鹸は亞爾加里鹽類である。この又通常石鹸を性質上より分ると、曹達石鹸と加里石鹸となる。前者は硬質であるから硬石鹸と云ひ、後者は軟質であるから軟石鹸と云ふ。是等は脂肪及び油を亞爾加里を以て分解するに依つて作らるる之を鹸化作用と稱ふ。石鹸製造の原料は所要の製品に依つて違ふけれども、脂肪と亞爾加里とは何れにも缺くことが出來ぬ。脂肪としては精製牛脂・豚脂・棕櫚油及び椰子油等を用ゐるが、併し是等は白色の上等石鹸を作るに用ゐ、洗濯石鹸には粗製牛脂・軟脂・綿實油等を用ゐる。又、硬石鹸には不乾燥性油例へば阿列布油の如きを撰び、軟石鹸には半乾燥性或は乾燥性油を撰ぶ。次に亞爾加里は不純物を含まぬことが肝要だ。大製造所では曹達灰を購ひ、これに石灰を加へて煮沸し苛性曹達を作る。其他化粧石鹸には香油及び顏料を加へ、下等石鹸には水玻璃粘土等を混ぜ、透明石鹸には砂糖を混ふ。松脂は亞爾加里と化合して所謂樹脂石鹸を作り、之を石鹸に加へると、其の品質を高める所から屢〻用ゐられてゐる。黄石鹸は洗濯石鹸にこの樹脂石鹸を加へたものである、石鹸を煮る釜は鐵製又は銅製であるが、直に火にかけると、焦る恐れがあるから可成は水蒸氣を以て間接に熱した方が宜い。煮る方法は、石鹸の種類に依て多少異なるけれども、冷法石鹸を作るには、牛脂四分と椰子油六分とを釜に入れ、微熱を以て熔し、之を別器に移し、豫めこの脂肪と鹸化するに充分なる苛性曹達を計算し、ボーメー三十二度乃至三十六度の溶液となし、之を熔した油の中に加へ攪き拌せた後、其儘鑄型の中に注ぎ、數日間靜かに置き、冷ゆると同時に鹸化作用を完うするのである。この石鹸は倔里設杙を混入するばかりで無く、多少の游離脂肪及び亞爾加里を含むを免れぬ、且つ長い時日の中には黄色を呈はすやうになるけれども通常の石鹸は煮沸法を行ふ。乃ち苛性曹達はボーメー十度及び十五度の液とし、先づ牛脂を釜に入れて熔し、初めは苛性曹達の稀い液を用ゐ、之を徐々に注いで攪き拌せ、乳汁の如くになつた時、強い液を加へて、煮沸し、充分鹸化せしめる。但し、苛性曹達の過剩を加へぬ爲め、時々試驗紙を以て之を檢さ

ねばならぬ。鹼化作用の終らうとする時は、之を木片に附けると、飴の如く細線をなして落つるを見る。斯くて鹼化作用終れば指間に觸れると硬質に感ずるやうになる。之より食鹽を加へ、攪拌れば、石鹼は浮き上り、佛里設林と食鹽水とは底に沈む、之を「鹽析」すると云ふ。この時熱することを止め、數時間靜かに置き、佛里設林液を去る。この後の仕事は石鹼の種類に依て異なるもので、黃石鹼を作るには松脂を加へ、白色石鹼には椰子油を加へ、尙ボーメー二十五度の苛性曹達液を徐々に注ぎ入れ、二三日間煮沸して、石鹼をして半透明ならしめ、然る後數時間靜かに置き、液を去り水を加へて攪き拌せ、後又數日間靜かに置き、亞爾加里と不純物とを分離せしめ、浮游してゐる石鹼を別器に移し、香油雜物例へば炭酸曹達、粘土等を加へて能く混和し、模型に入れて冷し且つ凝結せしむ。之より之を適當の大さに切斷し、空氣中にて乾燥し、模型に打ち込み、種々の模樣を附けるのである。

糠――米を搗いてから篩にて篩へば細かき粉を得、これが卽ち糠である。此の糠は脂肪を乳化する成分を有し、且つ垢を落す所の性質がある。而して石鹼の如く皮膚の角層を溶解することが無いから從つて皮膚の荒れることも無く、却つて之を使用したる後は皮膚が滑かになる所の感を起すものである。然れば石鹼を用ゐる代りに、此の廉價なる糠を袋に入れ、之を以て顏其他の皮膚を洗ふが宜いと余は思ふのである。

麩――麩も糠と同じ効能のあるもので、皮膚の弱い人は石鹼を使はずに之と糠とを半々に混ぜて用ゐれば皮膚の爲め大いに宜いのである。

洗粉――世には色々な名稱を附したる洗粉に樣々な効能書を並べたてゝ廣告してる者もあるが、中には皮膚を荒すやうな粗製品が往々ある。然れば自家にて之を製する方が安全である。而して之を製する法は甚だ簡單で、唯白大豆か或は白小豆を粉末にすればそれで可いのだ。之も糠と同じい効能がある。

白粉――白粉には樣々の種類がある。卽ち其の成分にも澱粉、米の粉、麥粉、炭酸麻、佛、涅、曼、謨、牡、蠣、殼などで製するが、斯る物を皮膚に塗ると、皮膚の氣孔を塞ぎ幾分の害になるを免れぬ。されど是等の物は別に有毒質では無いから、身體の一小部分卽ち顏面だけ位に塗るは左程の害にもならぬ。去りながら、鉛分を含ん

だのは假令小量にもせよ、長い月日の間、之を用ゐてゐると、皮膚が粗慥になつて俗に謂ふ所の白粉燒になり、褐色の斑點を生ずるに至るのみならず、甚しきは全身に其毒が廻り、身體が瘦せて食欲進まず、或は口中に惡臭を發し、或は腹痛を起すに至ることがある。元來、有鉛の白粉とは多く酸化鉛・炭酸鉛を含んでるので、是等は不溶解性の物であるけれど、汗や脂と化合して溶解性に變り、皮膚を通して血液中に入り、右の如く色々の害を爲すのである。

生燕脂――生燕脂は花沒藥の汁を綿に浸して乾かしたるものだ。之を頰などに塗つて自然色を胡魔化さうといふ根膽から、婦人は往々用ゐる。毒物では無いから衞生上よりは彼是申さぬけれど、白粉を塗けた上に此の生燕脂を少し頰に塗つた態は、恰で肺結核者の樣に見えて、醜しとも醜し。

皮膚の病理總論

皮膚病の研究は、初學者の實に困難を感ずるものである。何となれば、皮膚病の主徵候となる發疹の狀態は、千種萬別で、殆んど之と定つて居らぬやうな次第であるからである。然れど專門家が實際の患者に就いて精密に觀察するときは、整然たる一定の規律に隨つてゐるのだ。故に初めに發したる疹の形狀が、偶然に發したる他の疹の爲に影響を受けて、其の初發の形狀に反對するの觀を呈することが有つても、熟練なる醫師は之を見分けることが左程六かしくないのである。乃で皮膚病學上では、發疹の形狀を大別して、原發及び續發の二種となす。原發とは、始めて發する皮膚病で、續發とは原發の疾病に對して引續き發る症候を云ふのだ。されど原發に次いで偶然に發する他病をも續發と混同してはならぬ。偖、之より本論に入るに先ち、專門語の解釋即ち定義を述べてかゝらねばならぬと思ふ。

皮膚病學上の語釋――原發性皮疹から述ると、「斑」とは皮膚上に斑點の出來ることで、詳しく言へば、限られたる區域が赤・褐・黃其他樣々の色に變るを云ふ。而して

其の形や大小乃至は其の發する原因も一樣では無い。今其の主なる者を擧れば、其の斑點の赤くて其の大さが小豆乃至指頭位に至るを「薔薇疹」と云ひ、それよりも更に廣い皮膚面を侵すを「紅斑」と云ふ。是等は指で壓へると、一時其色が消えるものである。所が之と異り指で壓へても色の消えぬのがある、之を「溢血」と云ふ。溢血の小さくて圓きを「血點」と云ひ、線狀をなせるを「血條」と稱し、其部の廣きを「大溢血斑」と名づく。次に色素が缺けてゐるか、或は反對に集つてるかに依て、皮膚の色を變へる斑がある。此の斑は指で壓へても其色が消えぬ。而して色素の缺けてゐる所から白色をなす中で、其の先天性なるを「皮膚變白病」と云ひ其の後天性なるを「後天白斑病」と云ふ。次に色素が過度に集つて褐色を爲す者の中で先天性なるを「母斑」俗に「あざ」と云ふと稱し、後天性なるを「夏日斑」と名づけ、其の範圍が更に大きいのを「黃褐色斑」と云ふ。「丘疹」とは粟粒乃至豌豆位の硬い小さな結節が皮膚よりも隆くなつてるものゝ名で、其の形は圓錐狀、半球狀、扁平狀或は多角形で、其の色にも樣々ある。丘疹の更に膨れて大なるを「結節」と名づく。次に表皮を以て被はれたる下に漿液が滲れ出で、普通の皮膚色又は赤い色を呈はしながら膨れ上るときは之を「小水胞」と稱へ、小水泡が數多相集つて多量に漿液を滲み出すか又は初より强い勢を以てドン〳〵漿液を滲出するときは之を大水胞と稱ふ。是等の水胞は大小共に其の中央に臍窩を有つてゐるものだ。次に小有機體が侵入したり、或は化學的又は理學的の影響を受けたりして、漿液の代りに膿汁を含むものを「膿胞」と名づけ、膿胞の稍大なるものを「小膿胞」と云ひ、膿胞の邊緣に强度の膿汁を含み、それが眞皮の下層までに侵入してるものを大膿胞と云ふ。これにて原發性皮疹の主なるものを擧げたれば、次は續發性皮疹に移るとしよう。

表皮細胞の角質が變化して皮層面の上に積るものを「鱗屑」と云ふ。同じ鱗屑でも炎症性皮膚病の經過中に發生するものを「剝屑」と名づく。次に漿液膿汁又は血液など卽ち原皮疹の內容物が、皮膚の表面に出でて乾燥するときは之を「痂」と稱ふ。痂は滲出物の性質に從ひ、其の形は圓形なるもあり、不規則なるもあり、其の色も赤褐など樣々である。次に幾分か大なる皮質が缺損せられるを「潰瘍」と云ふ。而してこの潰瘍が唯表面の皮膚層のみを侵すときは、病の治癒と共に新

らしい表皮が出來て之を補ひ毫も其の痕跡を貽さぬけれど、潰瘍の缺損が眞皮の大部又は一部に及ぶときは病が治つても瘢痕の潰るを免れぬ。これにて皮膚症のみに關する專門語を解釋したが、今又更に何科に限らず疾病一般に必要なる語を簡單に解いておかう。

「疾病」とは健康體の異變せるもの。「症候」とは疾病の狀態。「自覺的症候」とは痛いとか苦しいとかの如く病人自ら感ずる所の狀態。「他覺的症候」とは腫れてるとか、色が變つてるとかの如く、醫師の五官を以て知らるゝ狀態。「診斷」とは症候などを參考して何病であるか或は治るか治らぬかなどを鑑定すること。「豫後」とは病の長びくか長びかぬか、或は治る治らぬなどを前以て豫言するを云ひ、而して「豫後良」とは必ず治る可きの豫言、「豫後疑し」とは病の治不治等を何とも斷定し難きこと、「豫後不良」とは多分其病の治らぬを豫言することである。但し治らぬといふ意味は死すといふことでは無い、換言すれば「死」は豫後不良の中に入るけれど、豫後不良は必ずしも死を意味する譯では無い。「轉歸」とは疾病が全治して健康に復するか、或は不全治になるか、或は死するかなど、兎に角其病の一段落を

天然死の年齢は百歳、百二十五歳、百五十歳などの說區々である

告げることだが、序に「不全治」の解釋もしておかう。「不全治」を別つて五種とす、(一)は其病は一時治つたけれど、將來僅かの誘因があれば直に其病に罹り易い素因を殘すもの、例へば酒渣鼻の如きは一回治つても少し寒い風に逢つたり、酒を飲み過したりすると忽ち又本症に襲はるゝやうなものだ。(二)急性病が轉じて慢性病となるもの、例へば急性濕疹が慢性濕疹に轉ずるが如し。(三)其病が治つても又後の病を殘すもの、例へば心臟內膜炎が治つて瓣膜の不全閉鎖を殘すが如し。(四)は合併症を發するもの。(五)は病毒が位置を轉ずるもの、例へば耳下腺炎が睾丸炎に轉ずるが如し。併しながら右五つの不全治も生涯不全治に終る譯では無くて、再び全治することが往々有る。「死」とは新陳代謝諸機能が全く絶えて了ふので、これに二種ある、甲は「天然死」と云ひ、乙を「病死」と云ふ。甲は高老に達し敢て疾病には罹らねども、漸々に衰弱して死するを云ひ、乙は疾病の爲に死するを云ふ。次に「寄生物」とは人體の體內或は體表に舍り、人體より滋養を取り、以て生育繁殖する所の劣等なる機生體を云ふ。「血栓」とは血管の或る部內に凝固物が附着し、爲に血流が閉塞するを云ふ。「炎症」一名「炎衝」とは其の部分が灼熱す

るので正しく解釋すれば灼熱疼痛潮紅腫脹及び機能障害の五徴候を備へたるものゝ名である。「水腫」とは或る液體が組織内又は腔洞内に多く溜るものを云ふのであるが、尙之を別けて言へば、組織内に漏れ出るのが「浮腫」で腔洞内に溜るのが「水腫」である。「氣腫」とは常に大氣の存する部(或は常に大氣の存せざる部)に常よりも多く大氣の滯るを云ふ。尙この外に解釋す可き語數多あれども、そは又其語の必要なる場合に至つて說くとしよう。

皮膚病の原因——皮膚病を起す可き原因は色々澤山あるが、之を大別すれば二種となる。乃で甲は體外より加はる刺戟卽ち外因。乙は體内より發する刺戟卽ち内因である。今甲より例を擧れば疥癬(俗に「ひぜ」と云ふ)毛囊蟲・胞蟲等の如く動物性の寄生物の爲に侵さるゝもあれば、白癬(俗に「しらく」と云ふ)癜風(俗に「なまづ」と云ふ)紅色陰癬等の如く、植物性寄生物の爲に惱まされるもある。又摩擦・壓力等の如く器械的刺戟を受けて起るもあるし、或は寒熱の刺戟例へば火傷・凍瘡などもある。又藥物を塗けた爲に起るも矢張外因に屬す。次に乙の例を擧ると、榮養神經の減退から起る皮膚病、食物の關係より來る發疹、藥品服用の爲に發するもの、精神感動より來るもの、婦人生殖器病に基くもの、種々の内臟病が原因となるなどである、尙詳しき原因は後章各論を讀めば自ら了るであらう。

皮膚病の豫防

皮膚病の豫防法——皮膚病を豫防するには第一に皮膚の衛生殊に沐浴を實行せねばならぬ。其他は病因となる可き内外の刺戟を避けるが肝要である。けれども其の刺戟を避けんとして餘り臆病になるときは却つて皮膚の抵抗力を弱くするものである。之も詳しきは後章の各論を讀むに從ひ、自然と了つて來るであらう。

皮膚病の診斷

皮膚病の診斷心得——皮膚病を眞に診斷せんとするには後章各論なる各疾病の症候を悉く知つてからで無くては到底不可能であるけれども、今他の章に於ては診斷法の心得となる可き事柄を單簡に擧げておかう。

皮膚病診斷の最も肝要なる事柄は各個の發診のみならず、全現象卽ち皮膚の全部更に進みては人體の諸機關をも檢査し、及び其の經過に眼を注がねばならぬ、次に各原發疹經過中の變遷を調べ、該病の初期及び其の現狀を確めることが必要だ。皮膚病には大抵痒いといふことが伴ひ、患者は爲に之を搔き破し、原發の

疹狀を變化せしむるものであるから、其の表皮の剝脫や皸裂などに注意し輕忽なる診斷を下してはならぬ。次に一患者にして二個或は二個以上の皮膚病に罹つてる者が往々ある。例へば梅毒性皮膚病の有る上に疥癬又は瘡風に襲はれてるやうなものだ。然れば醫師たる者はこれにも能々着眼せねばならぬ、終りに皮膚病其者のみならず、他の全身病との關係も考へて斷案せぬと、治療する上に於て大なる失策がある。例へば濕疹を診察して之は糖尿病より來つて居らぬかを前以て考へるやうなものだ。若し糖尿病より來れる濕疹ならば、如何に其の濕疹を治療してゐても、原因なる糖尿病を治さぬ以上は到底濕疹の除かれよう筈は無い。右の次第であるから、全身病上の皮膚診斷法も心得てかゝらぬと、純皮膚病の診斷も眞に出來ぬものである。されば左に其の一般を單簡に述べておかう。

全身病の皮膚診斷法

全身病の皮膚診斷法——全身病の皮膚診斷法を各項に分けて說くが、これは當に皮膚病の研究となるのみならず、寧ろ全身病の診察上に價値あるものなれば、醫學者は、大いに記憶しておかねばならぬ。

(一)皮膚の色——皮膚の色は健康の人でも年齡や職業乃至は風土人種等に依て各人之を異にするけれど、兎に角疾病的の色は一種異樣の狀態に變るものである。乃でこの疾病的の變色を大凡(イ)蒼白色(ロ)紅色(ハ)藍色(ニ)黃色(ホ)靑銅色(ヘ)銀色の六種に區別する。蒼白色とは皮膚一般殊に顏面が蒼白くなるので、これは一般の貧血殊に皮膚毛細血管の血液が減少するからである。一般の貧血症は、赤血球の減少に因ることもあるし、或は血色素が減じて血液が其の色を失ふのもある。其の他創を受けて出血し、或は外科手術或は內臟出血病慢性消化器病十二指腸蟲病、萎黃病、白血病熱性諸病慢性腎臟病或は饑餓などである。皮膚毛細血管の血液が減少する場合は精神感動(例へば驚くとか恐るゝとかの如し)惡寒或は病氣する等であるが、精神感動は生理的に屬し、病理的には屬せぬのである。而して此の蒼白色は頰や口唇、結膜、耳翼などの如く、表皮が薄くて細い血管に富み、平常は鮮紅色を呈はしてる部位に於て明かに見ることが出來るものだ、けれども唯顏面の蒼白い色だけを見て輕々しく病的だと判斷出來ぬことがある。古風の豪家に生れたる所謂御嬢樣的の人になると、深窓の下に閉ぢ籠つて

諸藝の師匠も我家に呼び寄せ、戸外の新鮮なる空氣や麗かな日光に觸るゝことが少ないから、皮膚の色は大いに蒼白いけれど、これは別に病的でも何でも無いのである。されば何を以て生理的と病理的とを區別するかと云ふに口唇などの粘膜を見れば直ちに了る、病的の方は皮膚ばかりで無く粘膜までが色褪めてゐるけれど、御姫樣の方は顏こそ蒼白けれ、粘膜は依然として紅を呈してゐる、のみならず、病的は蒼白い中に幾分か灰色或は黃色を帶び、甚しき重病例へば結核癌腫・白血病・重症麻刺利亞の末期になると、蒼白い上に醜土色を添ふるに至るものだ。斯くは云ふものゝ、病の初期に在つては、生理的と病理的との判斷がつかぬことがある。要は熟練なる醫師の鑑定に在るのだ。紅色とは讀んで字の如く皮膚が紅色になるのであるけれど、これは蒼白色よりも稀に見る所の病徵である。これに汎發性とて全身の皮膚毛細血管が充血するのと、限局性とて一部分特に顏面が紅色を呈するのとある。汎發性の方は高熱患者や諸種の中毒例へば魚・蟹・亞篤魯必涅の中毒の如し、等に由りて發するもの。限局性の方は痲痺性偏頭痛の顏半面に於ける結核患者の兩頰に於けるが如きものを云ふ。けれども汎發限局何れにも生理的なることがある。例へば溫浴後・冷水摩擦後などは全身眞赤になるし、小人が慚愧憤怒などの精神感動を起すとか、或は鍛冶屋やお爨の如く常に顏面を熱氣に曝す者などは顏面殊に兩頰に紅色を呈するやうなものだ。併しお爨の頰の赤きは全く火熱に近くばかりで無く、月經不順便秘などから充血するのもあるし、又强壯に過ぎて多血なるのもある。藍色所謂Cyanoseは藍色といふ中にも種々の色及び濃い薄いがある。これは血液が酸素に缺乏し、炭酸に富む所から成るもので、斯く然らしむる原因は(一)血液と肺臟內に在る空氣との瓦斯交換が減り從つて血液が酸素を取ること少なく、炭酸を排出することも少くなるもの。(二)毛細血管內の血液循環が緩くなつて、過分の酸素を組織に與へ、過分の炭酸を取るのである。故にこの二つを總括して言へば藍色は呼吸に障碍あるか、又は血液循環に故障あるか、或はこの兩障碍を兼ねてゐるかである。而して其の輕度の者は皮膚の軟かく而も血管に富んでる所か又は身體の末梢部例へば口唇・鼻尖又は指尖などに限つてゐるが、重いのになると、右の部は言ふに及ばず全身悉く藍色に幾分か黑色を帶ぶるに至る。乃で斯

の如き高度の藍色は先天性の心臟異常に在るもので、其の異常が輕ければ過勞の際のみに起るけれど、重いのになると、何時も藍色を呈してるのがある。其の他死期及び重き呼吸困難で劇しい痙攣を起す症にもある。次に聲門痙攣症・聲門浮腫・格魯布・實扶的里・肺炎・肺結核・肺壞疽などの如く、肺内に空氣の入るを妨げ、或は呼吸面を狹く小さくする病にも輕度或は高度の藍色を呈はす。次に延髓球癱瘓・横隔膜癱瘓・癲癇・破傷風などの呼吸筋障碍・心臟瓣膜病・心囊内液體滲溜及び大動脈瘤などの循環器故障にも藍色を呈はす。次に腫瘍の爲に大靜脈或は四肢靜脈幹が壓迫せられたり、又は腹腔内の滲出物或は腫瘍の爲に下大靜脈幹が壓迫せらるゝ時等の局所的血行障碍には其の局部だけに藍色を起すことがある。其の他鹽酸加里・亞尼林・青酸・安知歇・貌林などの中毒に在つても、皮膚又は粘膜に藍色或は一種言ふ可からざる黑に青を帶びた樣な色を呈すものである。又惡寒の際にも皮膚の小血管内の血行が緩かになるから幾分か藍色を帶ぶるに至るは何人も知る所であらう。黃色は東洋人種の特色ではあれど、病的に謂ふ所の皮膚黃色は卽ち黃疸を指すので、黃疸は膽汁の色素が血液や其他の組織

肺炎肺結核は必ずしも藍色を呈するにあらず時としては重症結核者に在つても黃色せぬのが往々ある

中に吸ひ込まれるから起るのだ。これにも勿論輕いのと重いのと有つて、輕いのは色素の少い所の皮膚に甚だ僅かの黃色を呈はすに過ぎねども、重いのになると、全身の皮膚面に橙黃色を呈はし、甚しきは綠色を帶び、或は黑みを帶ぶるに至る、之を黑性黃疸と云ふ。又、粘膜にも黃色を呈はす。卽ち眼瞼結膜や軟口蓋などは最も早く最も明かに見ることが出來て、且つ最も遲く消ゆる所である。重言すれば他部分の黃色が已に消えたにも拘らず、獨り此の部が長久しく其の色を失はずにゐることがある。乃で斯くなる病氣の例を擧れば十二指腸加太兒・膽管内に生ずる寄生蟲（蛔蟲の如し）の膵臟癌腫・膽石・藥品中毒（例へば珊篤寧・コロロ・鹽・銅・抱水格魯・刺檞・鹽の如し）の重症傳染病などである。又最も奇妙なるは密柑の多食からして手掌や足蹠などに黃色を呈するやうになつた一人を余は嘗て診察したが、ベルッ博士其他の醫師も之を實驗したと中外醫事新報に報告してある。青銅色は副腎の疾病卽ちアジソン氏病の徵候で、皮膚のマルヒギー氏網の細胞内及び其の間に色素が沈着する所から此の色を呈はすのである。而して此の色素は血色素が化生し、遊走細胞に由つて眞皮より皮膚の上層内に及ぼしたものであらうと、ノー

（銀色と黄色或は蒼白と紫色等の合併あるものである）

トナーゲル氏は言つた。本病は甚だ稀に在る病で、余は實驗したことは無いが、兎に角其色は病勢の進むに從ひ、黑色人種の如くに、醜い黄を帶びた褐色になり、殊に最も著しく呈はるゝ部は顏面や手甲で、遂に黑い樣な色素の小さい斑紋を生ずることがあるさうだ。銀色は長久しく硝酸銀を內服したる患者に、甚だ稀に見る色で、これも余は實見したことは無いが、其の色は灰色若くは灰色の黑みを帶びた樣で、先天性の心臟異常に原因する高度の藍色に似てゐるさうだ。けれども藍色は指で壓すと一時其の色が消ゆるに反し、銀色の方は更に消えぬを以て鑑別することが出來る。これも顏面や手甲に最も著しく呈はるゝものである。これにて皮膚病の六色を單簡に述べ終つたが、尙この外に合併したる色のあることも知つて居らねばならぬ。

（二）皮膚の榮養狀態——老人になつて全身の皮膚が一般に榮養不良となるは固より生理的ではあるけれど、壯年者が其の皮膚の榮養衰へて尋常の光澤を失ひ彈力が少くなり、從つて皺襞が出來、之を指で撮み擧ると俄かに舊に復らず、且つ、表皮の小片が糠の樣になつて落るのがある、之を瘡瘡性糠粃疹と云ふ。斯の如くに皮膚の衰へるのは重症の疾病に來るものである。尙、局所的の皮膚萎縮がある。これは各論に於て述ぶるとしよう。

（三）皮膚の發汗——生理の章に於て述べた通り、健全な者でも筋骨の運動・不運動氣溫の昇降、飲料の如何及び精神の狀態等に依て發汗の增減は勿論あるけれど、病的にも亦其の分泌を增さしめ、或は減さしむるのが澤山ある。發汗の增す方は之を多汗又は脫汗と云ひ、發汗の減ずる方を減汗又は無汗と云ふ。而して其の多汗にも全身多汗と局所多汗とある。全身多汗は急性熱性病殊に肺炎・再歸熱等の熱の退く時或は間歇熱の如く體溫が俄かに昇つて又急に降る折、其他急性僂麻質斯及び高度の呼吸困難・喘息・肋膜炎・破傷風などに在るもので、これは苦悶の爲め精神作用上より出るのもあるし、血液の循環の鬱血又は呼吸を障害する所から起るもある。彼の肺結核患者に在る盜汗、恐怖の際に起る恐怖汗・獨逸語の所謂 Exzeuschweiss（受驗汗と譯す）發汗劑を內服したる時の發汗疲勞して血管裝置の興奮せられ易き時に出る疲勞汗なども、皆この全身多汗に屬するのである。次に局所多汗は偏頭痛パセード氏病或る精神病等に於けるが如く、其の偏側殊

に頭部の半側に半身發汗を起すのがあるし、又腋窩或は手足或は陰部に惡臭ある汗を分泌するのもある。次に減汗乃至無汗の例は腸窒扶斯・虎列刺・糖尿病などに於けるが如く、身體の水分を失ふことの著しい病は汗の分泌を大いに減し、又は止むるに至る。又、全身水腫に於ては毫も發汗せぬことがある。

(四)毛髮及爪甲の變常——毛髮の色や粗密は人種や年齢等にも依るけれど、今爰に述べんとするは病的の者である。病的の中でも鬼舐頭(俗に蟇瘡坊と云ふ)や白癬などの爲に毛髮の脱ける純皮膚病的の者は後章各論に述べるから略し、內科的の者を擧ると、長久しい熱病後例へば窒扶斯・產蓐熱等の後には著しく脱けるし、又梅毒・癩病なども頭髮のみならず眉毛までも稀く或は脱け落ちて了ふことがある。次に毛髮の色を診ることも必要だ。癌腫患者の毛髮は眞黑くなるし、肺結核患者は早く白髮に變ずるやうである。其他劇烈なる精神感動も白髮ならしめるものだ。支那の古人の詩に、白髮三千丈緣レ愁似レ箇ノ長ト不レ知ラ明鏡ノ裏何ノ處ヨリカ得ニル秋霜ヲ と言つてあるを見ても、心配事は毛髮を白くするものだと考へたのであらう。又、西洋でも死刑の宣告を受けた者が、一夜で白髮になつたといふ事實もあ

詩の意味は一言で云へば心配事が多くて白髮になつたといふ事實も必ずしもあるまい。斯くの如く白髮は明鏡の裏に映ずるものだ。

る。又、青年の者で頗る白髮の混ずるのは該部の皮膚色素が缺乏するので、一は遺傳にも依る。次に惡液毛として、初生兒の毳毛に似たる毛が肩や上膊などに生えることがある。此の毛は窒扶斯や脚氣に長久しく罹つてる患者にも生えるけれど、それは甚だ稀で、多くは結核患者に之を見る。而して其病が重くなればなる程多く生えて、病が輕くなればなる程稀くなり、病が全快すれば惡液毛も亦從つて消滅するものである。

爪甲の異常は先天性にあることも有るが、後天性の者は創傷を受けたるに非ざれば濕疹・鱗屑疹などの皮膚病に伴ふこともあるし、又梅毒・窒扶斯・結核・脊髓勞・糖尿病・亞砒酸中毒等にもある。窒扶斯の如き熱性傳染病後のは爪甲の上に横溝を呈はし、結核・糖尿病等に至つては爪甲に縱紋を作り且つ爪色が混濁して破れ易くなつたり、又、梅毒の如きは一時爪質の發育が止み遂に奇妙な形になることもある。

五)皮膚の發疹——發疹を見て、病の如何を察するは、皮膚病上では最も肝要なことなれど、其疹の種類に至つては千差萬別、之を一々擧るの遑無ればそは各論に

譲り、爰には內科的疾病の主なる發疹を聊か論じておかう。乃で痲疹の疹は如何といふに、其の初め軟口蓋・硬口蓋に汚い紅色の疹が出で、それより顏面や頰や口の周圍及び前額などに淡紅の疹が表はれ、速かに全身に蔓り、皮膚は藍を帶びたやうな紅色になつて少しく隆くなり、治癒期に入ると上皮が糠狀になつて剝がれる。風疹は痲疹に能く似てゐるけれど、其疹は痲疹よりも小さい。猩紅熱の疹は初め頸部や胸部又は顏面に淡紅色の小點が出で、間も無く强度の紅斑となり、次いで全身に及ぶ。痘瘡の方は初め顏面に小豆大の紅い尖つた點が出來、後忽ち全身に蔓り、或は斑狀を爲すあり、或は小水胞狀をなすあり、斯くて其疹は愈々大きくなり、中部に臍窩を備へ、紅い暈を繞らし、遂に膿胞と變り、治癒期に至れば乾いて痂皮を作り、卽て痂皮は落ち瘢痕を殘すものである。假痘は其疹痘瘡に似てゐるけれど、凡ての症候が痘瘡よりも輕い。次に窒扶斯の第二期の始に發する薔薇疹は微かに皮膚面より隆くなつてる淡紅色の小斑點が腹部胸部に最も多く發し、甚しきは四肢にも及ぶことがある。又此の疹は急性粟粒結核や腐敗したる肉を食したる中毒にも發することもある。次に熱性病の初期或は其の經過中殊に格魯布性肺炎・流行性腦脊髓膜炎・間歇熱・膿毒症などに、粟粒狀の水疱疹が紅色を呈はしてる皮膚上に簇り生え、始めは澄んだ液體を含んでるけれど、其液は漸次に濁り、終に乾いて薄い褐色の痂皮が出來、卽て其の痂皮は剝れるけれど毫しも其の痕を皮膚に殘さぬものである。斯の如き疹を名づけて匐行疹と云ふ。而して顏面に發するを顏面匐行疹と呼び、口唇に發するを口唇匐行疹と呼ぶ。右の外熱性病者の皮膚が久しく乾いてゐて後再び汗の分泌が盛んになり、爲に露の樣な小さい疹が前額や胸部腹部に發することがある。之を結晶狀粟粒疹又は汗疹と名づく。然れど斯の如き疹は診斷學上に於て緊要な者では無い。又蟹蝦の中毒或は安知必林・安知歇貌林・撒里失爾酸・別刺敦那・亞篤魯比涅・規尼涅・的列並底油・阿片・斯篤里幾尼涅・骨汗波拔爾撒謨等の藥物を服み或は塗けて發する所の皮疹は色々の形狀あるけれど、是等は藥物書及び各論に於て聊か述ぶるとしよう。

(六)皮膚溢血——血管の壁が最も破れ易い色々の病氣例へば壞血病・膿毒症・痘瘡猩紅熱等の如き、それから又一時靜脈血の還流を妨げる病例へば劇しい嘔吐・嗽

嗽等の如く靜脈血が强く鬱積すれば、勢ひ皮膚に出血を來さねばならぬやうになる。斯くして出たる血液は點狀乃至は扁豆大の紫色或は青に黑みを帶びたやうな斑點を呈はし、指で壓へても其の色が消えぬ。而して時を經るに從ひ、種種に色を變へ菫花色から青・赤・綠・黃などを呈はし、終に消えて了ふ。此の斑の出る部分は通常頸部で、口腔や喉頭の粘膜にも亦發することがある。又、急性・慢性・中毒・壞血・麻質・斯・發疹窒扶斯・麻疹・猩紅熱・腸窒扶斯の恢復斯などに於ても亦この皮膚出血を來すことがある。又、榮養不良の薄弱者に在つては皮膚寄生蟲に螫されて其の周圍に溢血を呈はすことが往々ある。

(十)。皮膚の。瘢。痕。——皮膚の瘢痕は曾て皮疹潰瘍などを患ひ、或は外傷を蒙むり、又外科的の手術を受けたる者の痕跡で發泡膏や芥子泥を貼つた後にも亦その痕跡を呈はすことがある。故に醫師たる者が、患者を診察して、瘢痕を見出した場合には何時何うして此の瘢痕を殘したかといふことを質問し、患者答へて『さうさう思ひ出しました、之は嘗て梅毒に罹りました時に出來たのです』と言つたら、如何に醫師の診斷を助けるかも知れぬ。然れば醫師たる者は患者を診察して瘢痕が有つたら必ず之を聽き糺すことが肝要である。

(八)。皮膚。水腫。——皮下結締織の鬆粗になつてる所などに、液體が溜つてる所から起るので、これが爲に該部は腫れ脹れて容積を增し、身體中の凹所は消えて、皮膚は緊く縮り、色は蒼白くなり、或は往々藍を帶び、皺襞の有る所も滑かに變じ、指頭を以て之を壓せば凹んだ痕が附くけれど、暫時經てば次第に故の如くに復る、これは指壓の爲に液體が一時その隣の結締織內に逐ひ遣られたけれど、外部の壓力が去るに從ひ、再び故の位置に復るのである。右は普通の水腫に於て表はる徵候であるが、高度の者に在つては、全身の皮膚殊に下肢や下腹に靑みを帶びた白い色の幾分が底に光澤のある線を呈はすことがある。これは液體の爲に眞皮層の結締織が互に壓せられ、液體を充す所の空間が甚だ表皮に近づいて來るからである。又、最も高度の水腫になつて表皮の上に水疱が出來、その水疱が破れるときは絕えず水液を滲み出すこともある。けれども水腫が全く消えて了ふときは其の線が白い痕を殘すことは恰かも妊娠線の如きものである、抑、水腫の原因は常に毛細血管や小靜脈から血漿の漏れ出ることが盛んになる所か

ら起るので、健康體に於ても少量の血漿は漏れ出で組織を養ふのであるけれど、養うた餘分の者は淋巴管といふ管が別に在つて之を吸ひ取つて了ふ、然るに漿液の滲み出ることが普通よりも多いと、淋巴管は之を悉く吸ひ取ることが出來ず、爲に其の液は皮下にまで溜り、遂に水腫を生ずるのである。乃で斯くならしむる原因卽ち水腫の原因の原因を概括して見ると、(一)靜脈血の循環に故障が起り、血行が緩くなること(二)血管壁より血漿の滲み出る機能が盛んになり過ること(例へば炎症を發する如し)(三)血液が其の性を變へることの三點に歸するのだ、今(一)の例を擧れば心臟瓣膜病・肺氣腫・肝臟癌腫・腹膜炎などで始め下肢に水腫を呈はし、夜間寢床に就けば平時の如くなるけれど、明朝になつて床を離れると再び腫れ出し、これが日を重ぬるに從ひ、消え無くなるのみならず、下肢より軀幹に進み、遂に上肢にまで及ぶものである。(二)の例は炎症を發する部の近傍に生ずるもので、化膿性胸膜炎に於て其の局部に浮腫を見るが如き、或は旋毛蟲病に於て眼瞼や四肢に發する所の浮腫なども此の部に屬す。(三)の例は血液の性質を變へる水腫で腎臟炎に來ることが最も多い。腎臟炎は尿中へ多量の蛋白質を

泄し、尿より水分の排泄が減少する所から血液に其の水分を多く交へ、血液は性質が平常と異り、遂に其れは皮下に溜るやうになるのだ。慢性下痢・十二指腸蟲病・結核其他榮養不足の者なども水腫を發するが、凡て血液變性より起る水腫は初め下肢を侵すこと甚だしくて、多くは顏面殊に眼瞼より來り、遂に足部手甲等に浮腫を現はすものだ。されど其の水腫が久しきに溜るときは下肢に最も著しく來り、次第に上方に進んで行くことは(一)と同じことである。彼の赤貧洗ふが如き下等の民に至ると、僅かの米を多くの水で煮たる稀い粥になし副食物も澤庵の尻尾位が關の山で、それも食つたり食はなんだりして日を送る所から、血液は水分が多くなり、俗に謂ふ靑膨れ卽ち水腫を起すに至るけれど、一朝滋養食品を得、適度に之を取らしむれば次第に挽回して水腫は消え色澤も追々宜くなつて來るものなることを余は屢、目擊したのである。

(九)皮膚の氣腫——これは前者の液體が溜る可き場所に、液體ならで氣體が溜るのである。或は頸部胸部又は上腹部に限局してるのもあるし、或は身體の大部分又全身悉く及ぶこともある。其の腫れてる部は蒼白になり、腋窩・肋間などの

如き凹んでゐる場所は悉く埋められて了ひ、中には是等の部は却つて隆くなることもある。乃で一見した所では高度の水腫と異ならぬやうだが、水腫の方は指頭で壓すと其痕が俄かに消え無いで、次第に故態に復するけれど、氣腫の方は指を放せば忽ち腫れるのみならず、指で壓す際にジヤリ〻といふ樣な一種の音を感ずるものである。抑〻皮膚氣腫の原因を考ふるに二種の區別がある。(一)は外部より來るもの(二)は内部より起るものだ。即ち(一)は皮膚の外傷よりして外部より氣體が入り込むので其の創は甚だ小さくても往々著るしい浮腫を來すことがある。(二)は氣體を藏めてゐる臓器例へば肺臓の如きに其壁が自然的若くは外傷的に罅裂が出來ると、氣體はそれより洩れ出で進み〳〵て皮下に及んで來るので。故に喉頭や氣管に潰瘍が出來て、其壁を穿つたり、劇しい咳嗽の爲に肺胞が破れたりすると氣體が組織内に進入するのである。又、食道、胃或は腸に潰瘍的の者が出來、孔が穿く場合にも亦氣腫を發するものだ。これにて皮膚病の診斷心得から全身病の皮膚診斷法も粗、説いたことなれば、皮膚病の療法に就いて其の總則を擧げておかう。

皮膚病療法の心得

皮膚病の療法は各論に至つて説くけれど、爰には其の療法の一般に通ずる心得を聊か説いておかう。

(一)藥劑を直接に患部に用ゐんとする時、其の患部にして痂皮を被むれる場合には、先づ其の痂皮を剝いて然る後藥劑を施すが肝要だ。故に又縱ひ其の部位が硬くて強い角質の鱗屑を以て被うてゐても、矢張其の鱗屑を剝してかゝらねばならぬ。(二)痂皮を除くには油を塗擦し鱗屑を剝すには石鹼又は鋭匙を以て掻き取るも可い。然るに痂皮又は鱗屑の被はれてゐる儘で、藥用すれば、普に其の効能の呈はるゝことが遲いのみならず、時としては更に其の目的を遂げぬことがある。(三)沐浴は冷水・温湯共に皮膚病の治療に應用せられるけれども、何れの皮膚病にも悉く効能ある譯では無い。例へば鱗屑疹の處置には日々浴湯を取ること著るしき効あれども、或る濕疹には屢、不良の結果を見ること有るやうなものだ。(四)撒布藥は皮膚面に分泌せる液體の炎性産物を吸收せしめるを目的とするもので、之を撒布するには手を以てし、或は綿に塗けて叩き、或は刷毛を用ゐ、或は其の藥を嚢に入れ、其の嚢で患部を叩くか、又は其の嚢を患部に結び附け

ておくこともある。(五)軟膏劑を塗擦するには直に手を以てし、或は刷毛を以てし、或は刷毛を以てすることもある。斯くて塗擦したる後は麻布を以て全部を被うておくこともあるし、又時としては粉末を撒布しておくこともある。(六)内科的の疾病より來る皮膚病は、其の原因たる内科的の疾病を治するに非れば其の皮膚病は到底全快せぬものと心得ねばならぬ。泉源濁れり何ぞ下流の清きを見んやだ。(七)治療法の主眼物たる藥劑の術語や量目等の事柄を知りておかねばならぬ。然れば爰に其の一斑を掲げておかう。軟膏は日本藥局方に『軟膏劑ヲ製スルニハ特別ニ記スルモノヽ外ハ先ヅ難熔性ノ物質ヲ熔融シ次ニ易熔性ノ物質ヲ和シ半ハ冷却セル熔塊ニ藥物ヲ親密ニ混和シ全質均等トナルニ至ルベシ』とあるが、之を素人にても了り易いやうに解釋すると斯うだ。軟膏は豚脂・蠟・牛脂・刺納林・華攝林・巴拉賓・佃里設林・澱粉等の中、一種若くは數種を基礎質とし、其の基礎質が數種より成るときは、火にかけて比較的に火に熔け難い物を先に熔し、次に熔け易い物を和せ、半ば冷えたる其の塊りに目的の藥物を混じ、全質が均等となるまで、よく〳〵和せるのである。例へば水銀軟膏は豚脂・牛脂の基礎質と其の主藥たる水銀とからなるものなれば、之を製するに、其の熔け難い牛脂を先に熔し、次に熔け易い豚脂を和せ、半ば冷えたる所へ水銀を少し宛均等に混せるやうな譯である。「硬膏」は其の製法敢て前者と違はねども、其の基礎質の性質が違ふから、前者はトロ〳〵と軟かなるに反し、これは常温に於ては硬く、體温に觸れ、始めて軟化し、且つ皮膚面に粘着するものを云ふのだ。彼の絆創膏の如きも卽ち硬膏を布片に擬したものに外ならぬのである。次に「糊泥劑」とは稠い軟かいトロ〳〵の混和劑で、皮膚病には頻りに應用せられるのである、其の目的は、(イ)皮膚を涼しくし、瘙みを減ず。(ロ)藥物を皮膚に固定して其の効力を強くす。(ハ)皮膚の分泌物を吸ふ。此の三つである。糊泥劑の基礎成分としては用ゐられる藥の例を擧れば炭酸加爾叟謨・白陶土・酸化亞鉛・澱粉・沈降性炭酸加爾叟謨・滑石・白堊・石松子等の如くで、液狀になる成分は華攝林・脂肪油・佃里設林・蜂蜜・護謨・藥等である。

我國に用ゐる藥品の量目は、我國固有の何斤何匁何分何厘をのみ採つてゐたが、和蘭藥方を學ぶやうになつてから磅(ポンド)・匁(オンス)・ドラクマ・スクルペル・グレイン・刃・氏等を襲用し、後又英米の液

量パイント・ガルロン等を混用し、日本藥局方の制定せられてからは全くグラム量を以て藥品を秤る正量となるやうになつた。グラム量は所謂メートル系統の重量で、始め佛國で制定し、其後學術世界一般に採用せられ、今では日常用にも供へられるやうになつた。抑、グラム量は卽ち攝氏四度の水一立方センチメートルを以て其の原位たる一グラムと定め、之より上下に十乘し、若くは十除したるものだ。卽ち十グラムを一デカグラム、百グラムを一ヘクトグラムと云ひ、十分一グラムを一デシグラム、百分一グラムを一センチグラム、千分一グラムを一ミリグラムと名づく。けれど醫師の處方上には數字のみを記すことになつてゐる。又、書物などには「瓦」をグラムを讀ませてある。それは瓦蘭謨と漢字の音の似寄りたるを當て嵌めたので、其の頭文字一つを以て略するのである。數字の書方は例へば百グラムは「一〇〇・〇」、十グラムは「一〇・〇」、二十五グラムは「二五・〇」、一グラムは「一・〇」、一デシグラムは「〇・一」、一センチグラムは「〇・〇一」、一ミリグラム半は「〇・〇〇二五」と記すやうなものである。今左に瓦量と匁量及び舊和蘭量の概略比較を示しておかう。

和蘭量	瓦量	我國量
1瓦	0.06	2厘
16瓦余	1.0	約2分6厘
1刃	1.2	3分2厘
1弓	3.6	9分6厘
1弓	約30.0	約7匁5分
1磅	約450.0	約120匁

上表は其の概略を示したもので、精密に計算すると

一瓦（グラム）　本邦量の二分六厘毛六六六……和蘭の一五四三二二瓦

一瓦（グレイン）　グラム量の〇・〇六四八

一匁（モンス）　瓦量の三七五　和蘭の五七八七一三瓦

而して刃（スクルペル）は瓦の二十倍、弓（ドラクマ）は刃の三倍、弓（オンス）は弓の八倍に當るのである。又、瓦量を我國のに換算せんとならば十五分ノ四を乘ずるが最も簡便で最も精密である。例へば十五瓦を我國の量目に換算せんとするには、

$$15.0 \times \frac{4}{15} = 4匁$$

となるが如し。

尙、療法の心得に就いて言ふ可き事數多あれど、そは各論に讓るとしよう。

皮膚病の系統――先輩學者は、數多の皮膚病を系統的に分類し、恰かも植物學者の網目を立てるが如くにしてゐる。されど其の分類の仕方は各人之を異にし、

或は發疹の解剖的研究に依れるもあるし、或は專ら病理的に依れるもある。又中には臨床的の現象を根據とせる醫師もある。されど、余は斯る學理的の分類をせずして、我流に素人的の分類を爲し、以て以下各論を說くことにする。

皮膚の病理各論

毛髮に關する疾病

禿頭病（禿斑・鬼瓜頭・チエルズス氏局所禿髮なとの名がある。俗には之を蠹蝕坊主と云ふ。）

禿頭病とは如何なるものか――一見した所では、全く健全なるかの如き皮膚面に、一局部だけ毛髮の脫落するものを云ふ。其の脫落するのは敢て頭部に限る譯では無いが、唯頭部に最も多く發する所から、禿頭病の名が出たのである。即ち普通に於ては頭髮部に圓形或は卵圓形の禿げた部分が出來、而して其の部分は周圍に向つて大きくなり、一圓の銀貨大乃至は之より大きくなることもある、大抵は一二の禿部を生ずるに過ぎねども、中には同時に數多の禿部を生ずることもある。兎に角、知覺機には全く異常なきもので、患者は何等の痛痒を感せぬ所から、少し位の禿は更に氣附かずにゐると、他人から注意を受け、鏡を出して見れば『オヤ〳〵成程』と驚くことがある。之より其の局部は段々大きくなり、隣りの禿斑と相接し、8字狀を爲して擴がり、之を療治も爲ずに放棄つておくと、頭髮の半ば、或は全部を侵し、スツペラボンと全坊主になつて了ふ。けれど、全坊主にな

らぬのは、其の禿部の有髮部に對する境界は常に外方に向つて窪くなつてる線を呈はし、時には禿部の皮膚が薄くて幾分凹んでることがある。又、禿部に於て、處々に、短くて拔け易い毛髮か殘つてることもある。而して禿部の皮膚は蒼白く且つ薄くなるけれども、鱗屑を被るなどの變化はせぬ。其の毛髮の脫ける際、毛髮には何の變化も無く、全き長さに於て脫けるものである。

禿部の皮膚の凹むは恐らく皮膚組織の衰滅する爲であらう

禿部の部位は如何——前述の如く禿部は大抵頭髮なる所から、禿頭病の名が出た位なれど、又時には顏面卽ち眉毛・鬚・陰部・腋窩又稀には全身に蔓延することもある。

脫落の止んで乃至一ヶ月乃至數年餘に亘るは

禿頭病の經過を說け——本病には良性と惡性とあつて、良性の方は禿部が一定の大きさ卽ち一圓銀貨大になると、毛髮の脫落が止んで、間も無く禿部の周邊或は其の內部に新らしい毛が生えて來る。この毛は始めは細い鼠色で恰かも毳毛の樣だが、後には再び太い尋常の色を有する毛が生える。而して其毛の脫け落ちた時間の長短に從ひ、生えるのにも長短があつて、短きは二三ヶ月長きは一二年で回復し、回復すれば更に禿頭病の痕跡を殘さぬものである。されど稀には數年を經て再發することもある。さりながら自然的に或は適當の療治に依つて又全治すること疑ふ可くも無い。右に反し、惡性禿頭病は、其の始めの脫落狀態は敢て良性と異ならぬけれど、其の脫落は休むこと無く、絕えず進んで多數の者集り、啻に頭部のみならず、前述の如く眉・鬚・陰毛・睫毛甚しきは全身の毛を侵すに至るものである。幸にして全身に及ばぬ中に適當なる療治をなし、全治しても數月乃至數年の後、不明の原因よりして以前の患部に再び發するやうになる。が併し斯る惡性は良性よりも比較的少きものである。然るに不幸にしてこの少き惡性に罹り、治療其の方法を得ざるときは、頭髮は言ふに及ばず眉毛・睫毛までも侵し、えも言へぬ醜い容貌になる所から、人に逢ふのも耻ぢて、遂に自殺した者もあるさうだ。

禿頭病の豫後は如何——良性の者は大抵全治するけれど、禿部に新しい毛が生えて來ぬ中は安心の出來ぬものだ。惡性になると、如何に療治しても再生せぬものがあるし、又三十五年の後に至つて生え出したのもあるとミヘルソン氏は言つた。兎に角治るにしても久しい間禿げてる爲に患者は自暴自棄になり、療治

を續けぬもので、醫師に氣を揉ませるものだ。又中には再び生えても白髮交りになるのもある。何れにしても惡性は惡性である。

禿頭病の診斷法は如何――其の始めは他病の禿髮と紛らはしいやうだが、他病のは其の禿げた跡の皮膚に著しい異常を呈はすけれど、本病は其の皮膚が左程變化せぬから、容易に診斷することを得。

禿頭病は何に原因するか――これに二說ある。甲は植物性寄生物であると論じ、乙は榮養神經の疾患であると駁す。甲者の論據は黴菌がある云々。乙者の論據は其の黴菌は本病のみならず、健全の毛髮にあるし、又他病に罹れる毛髮にも認められるから駁目だ。然るに神經疾患たる證據には(一)前徵として頭痛がある。(二)禿髮を來す前に一種の溫感、又麻、不快の感があつて其の揚句に痲痺が來る。(三)薄弱な人を侵し且つ遺傳がある。(四)神經質の人に外傷が誘因となることがある。(五)精神的作用が大なる誘因となることもある。(六)癲癇病者に本病を多く發見した。(七)本病の初發徵候として毛髮が脆くなるを屢〻實見した、これ榮養神經の疾患たる證據である。(八)三十疋の猫の第二頸神經を切斷したら、十二疋までは人間の禿頭病と同樣なる禿斑が出來た。(九)人間の左頸部の腺腫を手術したる際、神經を傷めたれば、二十一日の後に禿頭病になつた。して見ると榮養神經の疾患に相違ない云々。甲者又之を反駁して曰く、乙者の診たのは頭痛が有つたかも知らねど、余が數多の實見に依れば何等の疼痛も無れば溫感も痲痺も無い。又強壯な人も侵せば遺傳の無き人も罹る云々と、以下の諸證も同じ筆鋒で非認してゐる。けれど近來は皮膚科專門の學者達は神經說に左袒してる方が多い。　又、レッセル其他の人は曰く、臨床的病狀の中に二種の病氣が有つて、一は榮養神經の病に屬し、一は寄生物性に屬するものであらうと。又、傳染性を有するものか否かの問題も未だ決定せられぬが、流行性に來ることは疑ふ可からざる事實である。されば假りに傳染性を有するものとして、他人の使用せる櫛類は消毒したる後で無れば用ゐぬことにしておくが何より安心だ。

禿頭病を如何にして治療す可きか――治療も原因の如何に依つて違ふ。寄生物なりと論ずる醫師は消毒療法として左の如き處方を賞用す。

▲昇汞水（昇汞〇・五を水百五瓦に溶したる者）　佃里設林酒精各五〇・〇　右一二回塗布。次に

一五〇は一乃至五〇の略號なり以下準之

▲水楊酸　二・〇　安息香丁幾　三・〇　油類　一〇〇・〇

右一日數回塗布

右の處方、殊に前者は劇しい炎症が起つて來るから、五六日も經つて炎症が止むを待ち、再び之を繰り返すのである。榮養神經の病なりとする方は滋養強壯の食餌を取らせ、剩へ強壯劑の内服藥を投ずる者さへもある。而して外用藥としては、刺戟性の物を應用し、

▲芫菁丁幾　五六・〇　規那丁幾　六四・〇　安息香丁幾　二四・〇
刺賢垤爾精　四八・〇　芸麻子油　八〇・〇　酒精　三二〇・〇

右一日數回塗布（スキンデル氏處方）

▲抱水格魯拉兒　五・〇　硫酸依的兒　二五・〇　純醋酸　一―五・〇

右塗布（ベスニール氏處方）

右の外、頭部に電氣を應用したり、五%の食鹽水を以て洗滌したり、或はクリアロビン若くは巴豆油を賞用する者もある。又中には

▲肉豆蔻花油　二・〇　阿列布油　二五・〇　芫菁丁幾　一〇・〇

酒精　二〇〇・〇　右混和塗布

を偉効ありと稱ふる人もある。又或人は毛髮の脱落を止めたり、再生を促したりする藥物は一として無い。故に療治をした所で何の効が有る筈も無く、實に無益な事だ。されば放棄つて自然に任せておけば、良性の物は時日が來れば治る、惡性の者は全坊主になると諦めて居ればそれで可い。効の無い藥を塗つて齷齪煩悶するは滑稽の至りであると。如何にも樂天的な事を言つてゐる。されど余の狹い經驗に依ると、斯んな樂天的な事も實行出來ぬし、且つ寄生説、神經説何れも折衷し、加里石鹼で洗つたり、五%の食鹽水で洗つたり、其他冷水或は微温湯にて清潔に洗ひ、一兩日は〇・一%位の昇汞水を一日數回塗布し、三日目位からバルセル(Balzer)氏の處方に依り、

▲黄降汞　二・〇　硫黄華　四・〇　カジニン油　一五・〇　華攝林　三〇・〇

右混和して毎夕塗布

を四五日續け、然る後左の處方を持續するが宜いと思ふ。

▲鹽酸必魯加兒泌涅　〇・五　知母爾　三・〇　アルコール　二五〇・〇

禿頭病の歴史醫學士天野豐太郎氏が皮膚病雜誌に述べられたる中せる同氏の仲介により病錄に詳しくあるもの

芫菁丁幾　一五〇

右一日二三回塗布

禿頭病の歴史――支那では後漢の頃張仲景が始めて本病のあることを說き、隋の煬帝の時巢元方といふ者これに鬼瓢頭の名を附け、降つて唐の世に孫眞人といふ醫師が千金方なる書を著し其中に治鬼瓢頭方と題し、燒猫兒屎以臘月猪脂和傳之。又方、猫兒毛燒灰以膏和傳之。又方、塼末和麻擣傳日一度、とある。之を和譯すれば、猫の兒の大便を燒き、これに十二月の猪の脂を混ぜて塗れ。又一方は兒猫の毛を燒いて灰にし、これに膏藥の材料となる可き蠟の如き物を混ぜて塗れ。又の方は赤煉瓦の粉末に麻を混ぜ、之をよく〳〵搗いて細末にし、之を一日一回塗布せよといふことになる。而して同人は鬼瓢頭の原因を血液循環の障害から來るものだと論じた。明の世になると、之を油風と改名し、原因は矢張血行障害だと諸家皆一致してゐたらしい。それより清の乾隆四年に錢斗保といふ醫師等は原因は毛孔が開張してゐる所より邪風襲ひ入るからだ。療法は針にて刺し紫血を出すが肝要であると言ひ出した。此の說は現今の黴菌說に傾いてゐる。而して治療法も今の亂刺法に相當するのである。けれども科學的の智識に乏しいから邪風などゝ論ずる所は如何にも漠然たる說と謂はねばならぬ。

我國では源順の撰んだ和名類聚抄に鬼瓢頭の名がある。これが本病に就いて彼是言つた最も舊い說である。而して其の註に曰く『師說云、爲天狗下食所瓢是也』と。乃で下食とは如何といふに、天狗の名なり、或は鬼神の名なりともあるし、又星の名で、即ち天狗星が下界に下り、食を求むる日がある、其の日に瓢められた者が、本病になるので、實に不幸なことゝ謂はねばならぬとの說もある。我國の俗說にゲジに瓢められると本病に罹るとあるが、大方下食とゲジと其の音の似たるより轉じたものであらうとのことだ。ゲジは蚰蜒と書き、果して此の蟲に瓢められると禿頭になるか否かは甚だ疑はしい。序に天狗とは如何なる者かと云ふに勿論架空の想像物で宇宙に斯の如き怪物の居らう筈は無い。降つて圓融天皇の永觀二年に丹波康賴が醫心方の中に、『油磨鐵衣塗之即生。又方、桑根白皮二升、大麻子二升、白桐葉切一升半、右以米泔九升浸經一宿煮』

沸、去レ滓ヲ以ヲ沐浴セヨ髪ヲ。又方、甘草二兩吹咀、漬ニ一升湯中ニ沐スルニ頭ヲ不レバ温ノ則ヲ不レ落ヲ。」とある。天正から慶長の間に播磨の鷹取秀次といふ人が「髪毛の拔けて生せざるには、猪膿を塗る可し。又、狗の乳汁も宜し。又、毛の尖われて折れ、且つ短きは麻子三分、秦椒二分、右白水に一夜の間浸して明日洗へば一月に一尺長くなる。又、楸の葉を搗ち搾り、汁を塗れば毛生ず。本病の原因は足長き蟲食みて禿るなり。」と云うた。天正年間の頃、曲直瀬道三は『本病の原因は榮養不良なり。其の治方は用ニ甜瓜ノ葉ヲ搗汁塗レバ之ヲ即チ生ズ。又方、生姜ノ皮ヲ焙乾シ人參等分細末ニシ生姜一塊切斷シ蘸ニ葉末ニ髪落處ニ擦レ之ヲ。」と。寛政享和の間に華岡青州紀伊の人は『油風とは俗に云ふ禿頭のことで、亂刺法を施せば治る。』我國ではまづ此の位なものであらう。

西洋では紀元前千四百九十年頃、普通の禿頭と癩性禿頭とを區別した。禿髪病(Alopecia)は希臘語のアロペッキス狐の義より來る。有名なヒッポクラチスも禿頭病に就いて色々と論じた。又羅馬のCornelius. Celsusといふ人が紀元前五十三年より紀元後七年まで生きてゐたが、今日謂ふ所の圓形禿頭病のことを說いて居れど、本病は何れも圓形に禿げるといふことに氣が附かなんだらしい。降つて十八世紀の後半にPouvageといふ佛國の醫學者が出で、禿頭病は必ず圓形に禿げるといふことに初めて氣が附いた。これよりAlopecia-areata圓形禿頭病の義の名が始まつたのである。千七百七十七年佛國のLorryは榮養障害說を稱へ始め、其の後同じく佛國のGruryは微菌說を主張し始め、これより甲論乙駁遂に歐洲今日の說は(一)寄生性の病、(二)榮養神經障害の病、(三)兩者何れも存在すの三種に岐れ、一定の輿論は未だ成り立たずにゐるのである。右の歷史に依つて和漢洋の文明發達の有樣を幾分窺ふことが出來て如何にも面白い。

神經性禿髪病

神經性禿髪病とは如何なるものか

禿げて、而も其の禿げた部は、健全部と其の境界が判然と區別せられて居れど、本病はこれと異り、其の患部の毛髪は幾分か薄くなる位で、一時に著しく禿げることが分らぬ。斯くして長い月日の間に禿げても、其の禿跡が不規則で、不正な三角形になるもあれば或は地圖狀になるも有つて而も健全部との境界が判然と

分らぬ。

神經性禿髮病の原因――神經衰弱とか癲癇とか或は歇私的里とかの神經疾患から來るのであると、先輩は證言してゐる。

神經性禿髮病の豫後――原因たる疾病の如何に依るのであるから、何とも言ひ難い。

神經性禿髮病の療法――原病を治療すると共に、禿頭病の榮養神經說療法と同じものを應用すれば宜い。

先天性禿髮症

先天性禿髮症とは如何なるものか――これに全身性のものと局所性のものとある。甲は甚だ稀に有る病氣で、一二ヶ月乃至一二年の間持續して禿げ、然る後次第に毛髮が生えて舊に復するのもあるし、或は又永久に持續して禿ることもある。これは實に心細いことだ。而して本病者の奇なる現象は間々齒牙の缺損を認めることがある。乙は甲よりも稍〻多くある所の症で、大小不同なる毛髮無き部分を存し、唯全身の發育に伴つて其の部を增す。甲乙何れも原因は遺傳の關係が大なるものである。俗に謂ふ「かはらけ」(無陰毛)も頗る遺傳の關係があるやうだ、而して其の遺傳の工合が面白い。卽ち多くは女子に遺傳するもので、例へば無陰毛の母が男子と女子とを生めば、其の男子には遺傳せぬけれど、女子には大抵遺傳す、それで其の男子に遺傳して居らぬかと言へば、其の男子が長じて女子を設けると、其の女子に無陰毛があるとのことだ。果してこれが眞ならば血友病に似たる遺傳を作ると謂はねばならぬ。**療法**は確たるものが無い。けれど放棄つておく譯にも行かぬから、禿頭病の章に示したる榮養神經說の外用藥を應用して試るが可い。余は十八九乃至二十歲にして無陰毛なる女子數人に外用せしめ、半年繼續して効が無つたら再び他方を敎へて上げませうと告げておいたが、何れも其の無効を訴へて來ぬを見れば恐らく効が有つたのであらう。又男子にして鬚無き者にも應用したが、人に依つては多少の効が有つたやうである。されど藥で生えたのは如何にも毛色が惡い。

後天性禿髮症

後天性禿髮症

これは前述の禿頭病で有らうと、以下說く所の禿髮症で有らうとに論無く、凡て

後天的に禿髪する者の總稱で、別に斯る名の病氣あるのでは無い。

糠粃疹性禿髪症

糠粃疹性禿髪症とは如何なるものか――頭髪の禿る病の中で最も多くあるは本症である。其の初めて本症になつた當時は、乾いた白い鱗屑が積つて、櫛で梳づるとか、爪で爬くとかすると其の鱗屑が顆しく落ちる、併しまだ本病で有ることに氣附かず、唯雲脂が此頃多く出來るわい位に思つてると、其の鱗屑が襟頸から肩までにも及び、一面に白い粉を撒きかけたやうになる。事茲に至れば如何なる素人とでも本病たることが了る。女子などで常に多量の油を塗けてる人に在つては、鱗屑は黄色を帯びたる軟らかい層を作り、輕度の痒さを感ずるものである。斯くて二三年間は此儘で、別に禿髪には關係無いが、二三年經つと毛髪が次第に脱け落ちて後には非常に薄くなり、殊に頭の中央が著るしくなる。斯くても尚病勢の進むに從ひ、纖い毫毛樣の者がこれに代り、斯うなると、鱗屑の脱るのは次第に減じ、遂に頭の中央部は完全なる禿となり、禿たる皮膚は滑かに光り、俗に謂ふ所の禿頭になるのだ。右の樣に禿るけれど、頭の側部や後部は幾分か薄くなる位で、尚多少の普通毛髪が繁茂してるものである。

生理的禿髪症

糠粃疹性禿髪症の豫後――一度脱けたる毛が再び生えることは大抵無れども始めより通常の療法を續けて居れば、毛髪の脱落を防ぐことが出來る。

糠粃疹性禿髪症の原因――本病は大抵男子を襲ふもので、女子には甚だ稀である。多くは遺傳で、其の他窒扶斯・梅毒・產蓐熱・萎黄病及び他の傳染病が誘因となることもある。

糠粃疹性禿髪病の療法――第一に頭部の皮脂漏を治してかゝらねばならぬ、皮脂漏の療法は後章に述べる、茲には略す。次に加里石鹼を塗けて屢洗ひ、又其の都度阿列布油を毛根に塗けて潤すが肝要である。又、5%位の食鹽水に布片を浸し、之を以て頭皮を摩擦すれば偉効あるとのことだ。又、一二七頁に示したる鹽酸必魯加兒必涅の處方も應用して試るが宜からう。

生理的禿髪症

生理的禿髪症とは如何――疾病と名づく可き程のもので無き禿髪症である、これに二種あつて、一を老年禿髪症と云ひ、一を壯年禿髪症と云ふ。甲は自然的の

ものゝ其の初めは毛髮が灰白色に變り、それより次第に多くの毛髮が脫け落ち、遂に禿頭となるのだ。而して通例は顱頂に始まり、之より何時の間にか前後に及び兩側に擴がり、終りには全部禿げて了ふのがある。但し鬚や陰毛等は只僅な影響を蒙むるのもあるし或は全く脫けぬのもある。熟々この原因を察するに、主として動脈が狹窄になり、榮養の足らざる爲であらう。乙は殆んど皆遺傳に基くもので、三十歲乃至其の以前に於て甲者の如くなるのだ。

療法は前に述べたる禿頭病の療法中なる刺戟劑を試みるのであるが、藥は唯氣休めになる位なもので、確たる効能あるものゝ無い。甲者は「らんぷ老爺」と誹らば誹れ、わしが居らねば眞の闇」と却つて自慢になるかも知らねど、乙者は如何にも殘念なことであらう。

白髮症

白髮症とは如何——毛髮が灰白色や白色に變ずるは老者に於ける必然の結果で、毛髮の全部或は胡麻鹽的に、或は一小部分に發するものなるが、通常は初め鬚及び顱顖部の毛髮に起り、後次第に他部に及ぶものである。而して其原因は色素が消失するのと、髓質內に空氣を生ずるとに在るので、取りも直さず、毛乳嚢は段々減り、色素を與へることが無く、毛髮細胞も亦其の作用を失ふのである。又單に空氣を生ずるのみでも、毛髮をして白色の觀を呈はさしめるものだ、是れは毛髮の內部に含まるゝ空氣は尋常の望觀では鮮明なれど、顯微鏡的檢査に於て、黯色を呈するものである。次に壯年に於て、毛髮が白くなるのは之を病的と看做さねばならぬ。而して老年者は白くなると同時に、大抵禿げ始めるけれど、壯者のは毛髮の生育には毫も異常無きものだ。察するに其の原因は遺傳性に基くこと多けれども、病理總論にも述べた通り、久しく精神を鬱々せしめてゐると、毛髮を白くするものなることは、爭はれぬ事實である。又或る劇烈なる精神感動の爲め、一夜で毛髮が白く變じた事柄もある。又熱性傳染病例へば室扶斯猩紅熱などで、長く床に就いてゐた揚句にも、毛髮が幾分脫けて且つ白く變じたる實例に乏しく無い。

輪節白毛の原因は丁ら

又白髮症の一種に、輪節白毛といふのがある。之は一根の毛髮中に交る〳〵縞になつて、黑白の部位を現はすもので、之を能く〳〵見ると、白色を呈する部位の

内部に空氣を蓄積してゐる外、他に異狀が無い。又其の他に紡錘狀毛髮一名念珠狀毛髮組織缺損といふのもある。此の症は輪節白毛に比ぶれば、較、多く見るもので黑色部と白色部の交る點は似てゐるけれど、其の異なる點は一根の毛髮に交番に絞窄部と紡錘狀とあつて、其の空氣を含む所は腫脹し、而して其絞窄部は破折し易いから、通例短くて後年に至れば次第に禿頭を來すものだ。これも一家族中に、數代遺傳したる實驗があると、レッセル氏は說いてゐる。余も亦父子共にこれに罹れる者を見たことがある。

石鹼は加里石鹼又は藥用石鹼が宜い

白髮症の療法は如何——根治的の療法は恐か、姑息的の療法も無い。唯、人工染髮法あるのみだ。染髮法は醫療上よりも、寧ろ斬髮屋の技術に屬し、且つ其意に適したる色澤を現さうと思へば、其の技に熟達せねばならぬ。けれど今パシュキス氏の染髮法を擧れば左の通りである。

初め石鹼を以て毛髮に擦り塗け、微溫湯を灌いでよく清潔に洗ひ、これが乾いてから沒食子酸一・〇、蒸餾水五〇・〇の液を刷毛を以て毛髮の根から尖まで丁寧に塗り、之が乾いてから、硝酸銀二・〇を蒸餾水一六〇・〇に溶し、之に安母紐謨液を少し許り注いで、之を毛に塗ると黑くなるものである。

但し使用の際過つて右の藥を皮膚に塗けると、皮膚も亦黑くなるから、其際直ちに沃度加里一・〇を蒸餾水五・〇に溶したる液を以て洗ふことが肝要である。

結節狀裂毛症

結節狀裂毛症とは如何——讀んで字の如く、毛が裂けて結節の出來る病である が、其の分裂は其の末端に於けることは甚だ多い、是れは毛髮の榮養が不足し、其の細胞が十分に相繫がらぬからである。されど、又中には毛幹中に起るもある、抑、本症は初めバイゲル及ウルクスの二氏に由つて唱へ始められ、後カポジー氏に由つて斯の如く命名せられたる疾病である。大抵は鬚に發することは男子よりも婦人れども、亦他部殊に陰毛に發することもある。陰毛に發するは最も多けに多い。而して其の病に罹つた毛髮は灰白色の結節を現はすもので、根に近く接してる毛幹の下部は侵されることは無きも、其の上部に於ては屢、多數の結節を生じ、五乃至六若くは其れ以上を見ることが有る、斯くて病毛が多數となれば一見して本病たることが了り、其の觀恰も塵埃、或は毛虱の卵を附けたやうである。

毛幹は大抵此の結節の部位から屈曲或は破折し、其の已に破折したる者は結節部を以て毛端を形造つてゐる。

顯微鏡的檢査に據ると、毛質は結節部に於て全く鬆解せられ、其の狀宛も二本の毛筆を兩頭相互に向き合せたるやうだ。髓細胞は結節部に於て著しく脂肪が堆くなつてゐる。又其の縱徑に沿ひ長く分裂せる毛を見る事が多い、これは毛の屈曲若くは破折するのは先づ毛質が鬆解け、隨つて其の抵抗が減弱するからである。其の他脂肪の堆積は全く機械的に髓質が膨大し、且つ皮質細胞の分裂を起す所から、本病の原因となるのであらう。ウォルフベルク氏は外來の刺戟例へば摩擦を以て本病を發せしむる特因としてゐる。此の説に依ればうつかりと鬚も捻られぬ譯だ。さりながら此の説は一切の場合に適應することが出來ぬ。又本病も遺傳性あるとのことである。

療法――病毛を剃つて了へば可いと云ふ人もあれど、再び生える毛は少し長くなると矢張本病に罹るから何の効も無い。それよりも毛の攝生法が肝要である。即ち石鹼を以て之を洗ひ次で脂肪を塗擦するが宜い。シムメル氏は次の

如き處方を用ゐて効があると云つてゐる。

▲酸化亞鉛　〇・五　單軟膏　一〇・〇

右毎朝夕塗擦

贅毛症

贅毛症とは如何――贅毛症とは何等の變化なき通例の皮膚に、異常の毛髮が發生するを云ふ。

本症は之を先天性と後天性とに區別す。先天性贅毛症は、全身に亘る事もあるし、或は局部に限ることもある。後天性贅毛症は常に唯皮膚の一區域内に限局するものである。

先天性全身贅毛症に在つては手掌・足蹠・指趾の爪節・口唇・包皮・龜頭及び小陰唇を除くの外は、全身の表面に毛を生ずるのである。而して其毛は柔かで、各人種に應じ種々の色澤を帶び、其の發生の最も繁き部は顏面である。從來經驗せられたる「毛人」の多數に在つては、輕度の者でも贅毛と同時に齒牙系統の缺損或は不整を伴うてゐる。而して本病は明かに遺傳性を具へてるもので、殆んど皆二世

或は三世に渉つて同族者を侵してゐる。

先天性局所贅毛症には異時症と異所症との二種がある、換言すれば一定の年齢に達した後、初めて毛の增加すべき部位なるにも拘らず、其の年齢に達せずして早く其の發生を見るものと、通常は唯毳毛か、或は稀疎い小毛のみを生ず可き部位であるのに、本病者に於ては極めて繁茂せる毛を見る者とである。例を擧げて言へば五六歳の小兒に陰毛を生ずるが如きは其の第一類に屬し、窈窕たる婦人の頤に房々と美髯を生ずるが如きは第二類に屬す。此の他脊椎破裂症に於ては薦骨部に異常の毛を生ずるは大抵の人の知つてる所であらう。

贅毛症の療法——治療を施すことの出來るのは、唯局所性贅毛症のみである、本症は唯姑息的に之を行ふか、或は雷に生毛を除くのみならず、又其の再生を防ぎ止めるかである。姑息法として行ふ法は剃除法、拔除法及び殊に腐蝕法である。其中で最も有効なる者は、硫化砒素、硫水化加爾叟謨である。今其の處方を記せば左の如くである。

▲硫化砒素、澱粉　各二・五　生石灰　一五・〇

右大約十分時間、溫湯を以て攪拌したるものを局所に當て、後ち水を以て能く皮膚を洗ひ、次で亞鉛華軟膏を塗擦するのだ。

▲硫水化加爾叟謨　二〇・〇　個里設林軟膏、澱粉　各一〇・〇

右一乃至二ミリメートルの厚さに塗り、十分乃至三十分の後洗ひ落すのである。

根治法としては機械的の方法を用ゐ尖鋭なる三稜針を穿入して取るとか、或は燒けたる針を刺し入れるとか、或は電氣法を用ふるとかである。卽ち毛囊中に細針を刺し入れ、之に中等强度の電池の消極端を接け、其の積極端を他の皮膚部分に置くのであるが、何れも勞の多い困難なる療法である。

皮膚の炎症に關する疾病

濕疹

濕疹の原因は如何——內因と外因とある、內因にも種類が多くて(第一)は神經病から來る、卽ち神經性濕疹は殊に手や指に發するが多い。(第二)に血液性濕疹は

貧血白血病等から來る。(第三)婦人の妊娠が原因となることもある。(第四)消化器障害からも來る、例へば消化不良や便秘病等の如し。(第五)原病性濕疹として虚弱な幼兒等に多いものである、卽ち鼻孔や上唇・頭部・耳などに發るものである、ウンナ氏は之を結核性濕疹と名づけた位で、仲々侮られぬ病だ。其他僂痀病・委黃病・糖尿病・蛋白尿病及び不明の原因もある。次に外因はこれも其の種類が多くて(第一)寄生性濕疹は寄生物が胸部・肩胛部・腋窩・股間等に寄生するより發するもの。(第二)理化學的濕疹は理化學的の刺戟卽ち摩擦するとか或は搔くとかなどが原因になることもあるし、或は粗惡なる石鹼、殊に綠色石鹼を使用するより起ることもある、其他刺戟性の藥劑例へば石炭酸・昇汞水・沃度仿謨・水銀軟膏・クレオリン等を塗布することからも誘ふ、又、日光・電氣も大なる原因となることがある。右の如く原因に依て色々に區別するが、又人に依つては原發性濕疹・症候的濕疹と別け、或は汞毒性濕疹・温熱性濕疹・職業的濕疹・日光濕疹・濕潤濕疹など〻種類を別けてるもある。併し是等の事は專門家の講究すべき問題である。

濕疹の病狀は如何——急性濕疹の病狀大要を述ぶれば初め皮膚の表面が甚しく紅くなり、續いて水腫のやうな腫を發して(但し水腫の出來ぬこともある)二十四時間から四十八時間内に於て、小さな結節或は水疱を發し、時に發熱することもある、又時としては紅くもならず腫れることも無くて、直ちに水疱が出來、それが暫時に乾き、鱗の如き結屑と變じ、間も無く治ることもある。併し斯る輕症なのは甚だ稀であつて、大抵はヒリ〳〵熱し、而も痒くて堪らぬ、夜間寢床に入つて、少し温まると、一層耐へ難くなり、已を得ず之を痒けば、一時氣持宜くなるやうだが、其れが爲めに病勢益々强くなつて、水疱は濕を帶び、或は血を漏し、それでも矢張痒く、遂にまんじりとも眠られず、一夜を苦悶の中に明して床を出れば、睡眠不足といふ一因を加ふる爲に、全身の健康を害するに至る。乃で、攝生及び治療法が惡いと段々其の部分が廣がつて、遂に全身にも瀰り容易に治らぬこともある。序に頭髮部にのみ出來る濕疹に就いて一寸述べておかう、之は始め痒く熱した揚句に結痂は厚く集り積んで、此處彼處に出來、仲々容易に剝がすことが出來ぬ、若し强ひて之を剝がせば崩れて出血し、爲に膿をもつことがある、此際毛髮は大抵の場合に於て、發育を妨げられぬけれど、餘り久しく治らぬとすれば、一時脫け落ちて

了ふこともあるが併し永久的に禿頭になるのは甚だ稀である。又急性濕疹の中に顔面濕疹とて、顔面にのみ發疹するのがある（稀に他部分に傳播する事あり）形狀は丹毒に能く似たもので、頰額、及び耳部に小き膿疱が出來、遂に乳樣の痂皮になつて治る。慢性は急性程劇しく無いけれど、仲々容易に治ら無いで、皮膚に肥厚を起し、色素沈着して、色が黑くなる。其他病の出來る場所に依て、色々相違がある。鼻粘膜に出來るのは、大抵慢性鼻加太兒に併發す。顔面濕疹は一名鬚瘡樣濕疹と云ひ、主に鬚の在る部より赤く痒くなつて化膿するもの。臍濕疹は肥滿家に多く發す。肛門濕疹、陰部濕疹は大抵糖尿病から起り、頗る痒いものである。此他尙樣樣の濕疹はあれど、何れも大同小異なれば一々爰に記さず。

濕疹の經過は如何——本病は俗に胎毒（くさ）「がんがさ」など色々の名稱を附けて居るもので、皮膚病學中の最も緊要なる病だ、而して其の經過は急性で、治療攝生さへ宜ければ、二週間位で治るが、若し慢性に轉じたり、或は治療の方法が惡いと、二三年も困難し、甚しきは一生涯其の痕跡を遺してるがある。

濕疹の療法は如何——輕症の者は可成一日に二回溫浴をなし、浴後左の處方中の一を塗けるが可い。

(1) ナフトール　五・〇　酒精　一〇〇・〇
(2) レゾルチン　二・〇　黃色華攝林　一〇〇・〇
(3) 撒里矢爾酸　二・〇　黃色華攝林　一〇〇・〇

右の方法を以て、數月に渉れば、單純なる症ならば必ず恢復するに相違無い、併しながら原因に能く注意し、原因若し腺病ならば腺病を退治し、原因若し糖尿病ならば糖尿病を療治するといふやうに、體質を改良してかゝらねばならぬ。兎に角固い塊りあるのは脂油を以て痂皮を軟化せしめ、頭部にあるのは毛髮を剃らねばならぬ、慢性の濕疹にて深く浸み込んで居り、皮膚に肥厚を起してる者には一日二三回乃ち一回十分時間程宛溫室にて雨浴（衛生の章に其仕方を說いてある）を行ひ、又鹽湯或は硫黃浴をも施し、次で良好なる石鹼を塗け、次で洗ひ落し、左の如き塗布劑を試み、

歇貌拉氏軟膏　一〇・〇

右一日二三回布片に塗つて貼る可し

右の外内服藥としては、左の如き處方も必要である、但し毒藥なれば醫者ならぬ人の手前療治には用ゐてはならぬ。

▲亞砒酸　〇・〇五　黑胡椒末　二・〇　亞拉毘亞護謨末　甘草末　適宜

右六十丸となし、一日二回食後一丸宛服用、四日目毎に一回一丸宛を增量し一日十丸を越す可からず、之を醫師社會では亞細亞丸と名づけてゐる。

急性等にて甚しく痒さを感じても、必ず掻いてはならぬ、臥床に入つて温まると、尙一層痒くなるものであるから、大いに注意をして、斯る場合には左の處方なる藥を塗けて、返す〴〵も掻かぬことが肝要である。

▲撒里矢爾酸　一・〇　薄荷　一・五　澱粉　一〇・〇　華攝林　一五・〇

右塗擦

糠粃疹

糠粃疹の原因は如何――ミッチエルソン氏の說に依れば、皮下動脈の變性して狹くなり、榮養が不足するからであると。生理的には老人の頭部に來り、病的には大抵中年男子の關節屈側又は頭部に發す。

糠粃疹の病狀は如何――皮膚が粗糙になつて、白い小さな屑卽ち糠の如き形になつて剝がれ、仲々容易に治らぬ、若し又頭部に發するときは、二三年も持續した る後、毛髮が段々に脫け落ち、疎らに薄くなり、遂に處々禿げ、尙進めば頭髮全部にも及び、滑かになつて光澤を呈するに至る。斯うなれば眞の禿頭である。老人のは自然的であるが、其の初めは毛髮が灰白色に變じ、遂に多くの毛髮脫け落つ、其の落つるは大抵顱頂に始まり、之より漸次前後兩側に波及し、後には前述と同じやうになる、併し老人のは寧ろ尊い徵候で、療治の仕方も無い。

糠粃疹の療法は如何――肝油、阿列布油又は稀薄なる個里設林を塗擦し、屢々温浴を行ひ、卵の蛋黃を塗け、後微温湯を以て洗ふが宜い、又左の處方に依て塗擦することも必要だ。

▲水銀軟膏　一〇・〇　阿列布油　二〇・〇

右一日二三回塗擦

頭部の糠粃疹には、病毛をスッペラボンと剃り落し、石鹼を以て洗ひ、次の軟膏を

試みるが宜い。

▲酸化亞鉛　〇・五　昇華硫黄　一・〇　單軟膏　一〇・〇

右一日二回朝夕に塗擦すべし。

痒疹

痒疹の原因は如何――確然たることは未だ發見せられぬ、兎に角遺傳もあるし又貧窮の男子に多いやうである。

痒疹の病狀は如何――四肢殊に下肢の伸側或は腹部等に、漸く肉眼で見分けらるゝ位の小結節を生じ、病名を讀んで字の如く斷間無く痒くて搔けば、小出血を起し、爲に痂皮を作る、而して寢床に入れば、尙一層痒き爲に不眠症を起し、全身の榮養を害することも往々ある、其の甚しき者に至つては、一刻も搔かずには居られぬ、人の前で緩くり談話することも出來ねば、業務を取ることも叶はぬ、或る醫師は本病を社會絶交病なりと言つた通り、實に社會的の生活を爲し得ぬに至るものだ。輕重に依らず本病に罹ると仲々治り難く、四季に依て或は弛み、或は劇しくなるも、大抵は終身治ることが無いと斷言しても過言ではあるまい。

痒疹の療法は如何――强壯家には食事を減じ、虛弱家には易化滋養の食品を十分に與へ、温浴・硫黄浴を行ひ、次の處方を塗擦すれば幾分の良効を奏するやうだ。

△ナフトール　三・〇　酒精適宜　黄色華攝林　一〇〇・〇

右一日二回朝夕に塗擦

或は又左の處方を轉々交換しても試むる可し。

▲石炭酸　五・〇　酒精　五〇・〇　水　二〇〇・〇

右一日數回塗布

△沃度仿謨　三・〇　百露扱兒撒謨　一〇・〇　華攝林　五〇・〇

右一日二三回塗擦

鱗屑癬一名乾癬とも云ふ

鱗屑癬は如何なる病か――本症は甚だ小なる赤い丘疹の出來るのが始まりで、後直ちに硬い上皮より或る鱗屑を被むるものなるが、其の初め粟粒大の皮疹は遠かに十錢銀貨程の大さと爲り、或は全く鱗屑を被むり、或は唯其の中央部のみが鱗屑を以て被はれ、其の周邊には狹い赤色の輪廓を現はすことが有る。而し

て其の鱗屑は類白色或は類黄色を呈し、光澤を帶ぶ。これが久しく續いて出來てる揚句に自然若くは掻きなどして、鱗屑が剝がれると其の際幾分か毛細管から出血するものである。又皮疹が稍々舊く爲るときは、鱗屑の附着は從前の如く緊密で無くて、何か觸れると容易に剝れる。されど甚だ久しく留つてる皮疹上には、大抵極めて厚く且つ固い鱗屑が堆くなるもので、殊に下腿や膝關節の上に來り、又往々頭髮部に來ることも有る。又極めて罕には皮疹は上文に述べたやうなのと稍々其狀を異にし、鱗屑は光澤無く却つて著しく黄色を呈し、其の下屑に在る皮膚は少しく潤ひ濕疹の狀を呈するのがある。概して鱗屑癬皮疹は方々に散かつて出來ること無く、通常は同時に數多簇り生じ、病の尙ほ進む間は斷えず新らしい疹が出來て、次第に增加するものである。次に本症の病狀を定むる所の發育に二種の區別あるものだ。併し同一の患者に在つても、亦皮膚の各部に同時に此の二種の病形を呈はすことが少く無い。乃で第一種の鱗屑癬に在つては病竈が益々增大して、何れの部位に於ても、更に退が無いで、壹圓の銀貨大若くは之より大なる圓形の皮疹を生じ、尙病の進むに從ひ、隣りの皮疹と觸接して、之と聯り合ひ、以て益々廣大なる皮疹面を作り、而して其の全面悉く鱗屑を被むり、到る處として潤ひ且つ紅くならぬ所は無い。斯くて病竈が漸次增大するに從ひ、從來健全であつた皮膚にも亦新たに疹を生じ、甚しきは全身の皮膚を侵すことが有る、之を瀰蔓性鱗屑癬或は全身鱗屑癬と名づく。

第二種の鱗屑癬は前者と異り、一定の時日が經つて一定の大さに達する病勢衰ふるもので、其の初めは鱗屑が寛かに爲り、遂に自然と剝がれるけれども、該部の皮膚は初めは尙ほ潤ひ、且つ赤みを止むるものである。而して其の病勢の衰ふる際は、固より皮膚の中央に在る最も老舊の部であるから、此の發育期に至ると、皮疹は鱗屑の無い而も潤うたる赤色の中心を有てる圓板狀を呈はし、其の中心は光澤ある白色の鱗屑を被むる輪狀の輪廓を以て圍まれるけれど、時日が經つと中央部は病勢益々衰へ、皮膚の赤い環や潤ひが全く消えて、茲に潤うたる鱗屑を被むる環より成る所の皮疹を生じ、其の環は大小不同で、全く健全の圈狀皮膚を圍む。但し此の皮疹も亦其の周邊に向つて蔓延し、以て益々增大するけれども、其の輪廓内に屬する部分は、之に應じて常態に復するものである。

鱗屑癬には上文に記載した病狀の外は、亦屢々其の續發性の障害たる色素の沈着を合併するもので、殊に下腿に於ては鱗屑癬の消えた後、黯い色の色素斑を留むる事が甚だ多い。又其の他の體部に於ても、往々此の固有の變色を呈し、殊に瀰蔓せる環狀及紆廻狀鱗屑癬に在ては、黯褐色の中央部と之を繞れる光澤ある白色鱗屑癬と、兩者の中間に位する淡色の島、或は較々大きい健常皮膚との間に、著しい色澤の反對を呈はして、一種特異の病狀になることがある。而して此の色素沈着は、通常砒石療法を施した患者に殊に著しいものである。

毛髮は左程の變化は無いが、爪は屢々變化を呈し、爪の質が濁り、且つ鬆けて遂に脫け落つることがある。

鱗屑癬發生の部位は如何——鱗屑癬は何れの皮膚面上にも發生するけれども、或る一定の局部は、殊に此の疹の發し易い部位である。即ち肘關節及び膝關節の展伸側、頭髮部及び之と連なる前額部、及び耳に最も多く發し、四肢及び軀幹の皮膚之に亞ぐ。又顏面に發するは較々稀で、手掌及び足蹠(甚だ稀有の破格は之を除き)は發することが無い。

苦痛を自覺することは大抵少なく、唯急性に發疹する場合に於てのみは、新しい皮疹上に幾分か瘙みを覺ゆる位なものだ。けれども全身鱗屑癬に在つては、皮膚が弱く爲るから、殊に關節上に痛みある皸裂が出來、爲めに著しく屈伸の自由を妨げられることがある。

鱗屑癬の經過は如何——鱗屑癬は大抵幼年者か中年者に發し、其の小兒を侵すは甚だ稀である。而して時々汎發性のものも無いでは無いが、多くは前文に述べたる部位に、一二の病竈を生じ、年餘の久しきに亘るも、敢て其の數を增すことも無く、唯甚だ徐々に增大し、後ち稍々急劇に諸部に發し、以て大いに其の病狀に變化を來すものである。而して其の病竈の全部若くは過半は、一定時を經て消ゆることあるも、他の場合に在つては、又肘膝及頭髮部に屢々病竈を留むるもので、多少の時日が經つと、再び數多の皮疹が新に生じ、而して其の發疹時は全間歇期若くは其の過半の間歇期と相交代するもので、其の間は往々一年の久しきに至り、患者は初發より高齡に至るまで、其の病患を免かれず、或は終身之に侵さるゝことが屢々あるものである。

鱗屑癬の豫後は如何――本病の豫後は甚だ面白からぬけれども、生命に關して
は大抵は佳良である。其の皮疹は一旦全く消えても、決して再發せぬといふこ
との保證し難いものである。嗚呼左程の苦痛は無いにしても、斯の如き病には
罹りたく無いものだ。

鱗屑癬の療法は如何――鱗屑を除去するの効ある藥物中では、水が其の第一位
を占む。即ち其の水を濕罨法・浴法・蒸氣浴法等、種々の方法を以て應用するのだ。
又、此の水と同時に亞爾加里性物質を併用すれば、尙一層其の効力を助く、是れ亞
爾加里は角質より成れる鱗屑を軟化して、其の剝落を容易ならしめる効がある
からである。而して就中其の最も肝要なるは、加里石鹼で、之を或は石鹼のまゝ
或は加里石鹼精と爲し、少量の溫湯を以て之を目の粗い布片に塗擦し、之を以て
癬屑の堆くなつてる部位を劇しく摩擦するが宜い。又之に類して、癬屑を軟化
するの作用ある物は、緩和の軟膏即ち歇貌拉氏軟膏蒼鉛軟膏或は又傍ら其吸收
を促す所の効ある白降汞軟膏も宜い。察するに、是等の軟膏療法は、新鮮の症及
び著しい皸裂を有する經久間歇性の癬屑癬に殊に適するものだ。但し廣大の
部分に白降汞軟膏を應用するに當つては、口内の清潔に注意し、汞毒性口粘膜炎
を發せぬやうにせねばならぬ。されど、尙ほ之より肝要なるは眞に吸收作用を
促す所の藥物である。それには蒼兒及び苦利沙羅並が從來大に賞用せられて
ゐる。蒼兒は鱗屑の形成を減却し、遂に全く消滅に歸せしむるを以て、奏効の標
準とし、其の用ゐたる蒼兒が永く患部に粘着し、新生の鱗屑に由り剝がれぬを以
て其の微と爲す、斯うなれば浸潤や赤色が消えて、皮膚が健全に復するものだ。
此の療法を完うするには、常に數週間の時日が要る。然れど、蒼兒よりも一層卓
効を有し、又多數の症に用ゐて最も神速の効を收める所の藥物は苦利沙羅並で
ある。其使用法は尋常石鹼或は加里石鹼を塗けて能く洗ひ、可成鱗屑を除去し
たる後、患部に一日一回乃至二回硬い毛筆又は齒磨刷子を以て二五%の苦利沙
羅並軟膏を塗擦するのだ。鱗屑は速かに減つて皮疹が蒼白くなるを以ても、其
の奏効の速いことが了る。但し患部を周つてる所の健全なる皮膚は、幾分か赤
くなり、後褐色と爲る。此の症狀は間々增劇して、皮膚炎を起し、毫も苦利沙羅並
の觸れぬ部位までにも汎く蔓延することが有る。殊に顏面は此の炎症に罹り

易いものである。故に顔面部や頭髪部には本藥を使用せぬが宜い。乃ち此部には沒食子酸一・〇酒精適宜黄色華攝林一〇・〇の處方を應用するを可とす。又苦利沙羅並を用ゐて患部が全く滑澤となり且つ白色平坦の斑紋が出來、判然と赤褐色の周邊と區別せられるやうになつたら治療を止めて可い。これ乾癬が治つた證據である。斯うなるには僅々三四回塗擦するのみで其の効を見ることもあるし、或は十回乃至それ以上の塗擦を要することもある。斯くて其後は唯撒布藥のみを應用し、通例輕度の落屑を呈して漸次炎症が減退するを待たねばならぬ。通例は二三週間も經つて、色素の沈着が漸く消散すれば、皮膚は全く常態に復するものである。次に苦利沙羅並療法を施すに當ては、上文にも述べた通り、一二の不快なる副發作用に注意せねばならぬ。即ち其第一は皮膚の炎症で、其の症狀の強いときは、一時其の應用を中止せねばならぬことがある。而して此の炎症は概して皮膚の嫩弱なる人に發し易く、又同一の人に在つても、皮膚の殊に軟かい部分、即ち關節の屈曲面、陰部の如きは他の部位に比して其刺戟を受くることが大である。第二の甚だ不快なる副發作用は、強劇の結膜炎で、其

の最も甚だしきものに至つては、角膜に潰瘍の出來ることがある。故に本病患者には藥物を眼に觸れしめぬ樣注意することが肝要だ。夜間の如きは手袋を嵌めてゐて、睡眠中知らず識らず失策することを避けねばならぬ。又鱗屑癬は砒石の内服を併用する方が宜い。それには法列兒氏水又は亞細亞丸を用ふ可しだ。法列兒水は最初は一日六滴を與へ、次で漸々增量して一日十滴より二十滴に至る。亞細亞丸の處方は左の如し。

亞砒酸　〇・五　黑椒子末　五・〇　亞剌比亞護謨　一・〇　水　少許

右爲二百丸一日一丸。八丸に至るまで四日毎に一丸を增し、乾癬退行し始めるまで八丸を續け、漸次減量して初服量に復す可し。

酒齄鼻（俗に赤鼻と云ふ）

酒齄鼻とは如何――本病は單純なる皮膚の炎症では無くて、血液循環の障害即ち末期には皮膚の榮養障碍を來す病である。常に血管擴張を以て始まり、それより直ちに顔面の好發部位、殊に鼻を侵し、或は指で壓すと褪色する所の赤色斑を呈はし、或は各箇の血管擴張して、種々に分岐せる赤色、或は青みを帶びたやう

な赤色の線を呈するものだ。又或る場合に於ては、病症益々其の度を高め、血管擴張愈々其の度を進め、肉眼を以て睹らるゝやうになる。又或る症に於ては結締織增息に基く所の變化を來し、細小扁平の丘疹が出來、其の疹も亦指で壓すと褪色する所の鮮紅色を呈し、而して其の各丘疹が相融合して大きくなると、櫻實大乃至は胡桃大、或は之より大なる結節を作り、初めは常に軟かなれども、後には硬く爲る、又、稀には患部に瀰蔓性の肥大を來し、各箇の結節を作らぬこともある、又、屢々莖を有する多發性の腫瘍が出來、鼻尖に垂れて甚だ醜態を呈することもある、之を鼻瘤と名づく。

酒齄鼻の經過は如何——酒齄鼻の經過は非常に慢性で、間々症狀の增劇することあるの外は、殆んど變化なきものである。

酒齄鼻の豫後は如何——全身の健康に關しては、何等の異常あること無けれども、其の治癒に關しては甚だ疑しいものだ。否、治癒せざるに非るも、其の原因を除くことが甚だ困難で、一旦治癒しても再發を防ぐことが難いし、又、患者は治癒に至るまで、永く其の療治及び攝生を續けぬものである。若し其の原因にして能く除かれ、患者にして堪忍力があるならば、多くは治癒するで有らうと思ふ。

酒齄鼻の原因は如何——本病の原因は大凡五つ有るけれど、最も能く俗人にまで知られてゐるのは酒類の飲過である。成程亞爾箇保兒の濫用は實際に酒齄鼻の原因となることは多いけれど、麥酒は左程に影響を及ぼさぬ。されど葡萄酒、殊に酸類に富む所の白葡萄酒及び燒酒は其の影響甚だ大きく、而して燒酒過飲者中には屢々藍色を帶びたるのがあるし、葡萄酒を嗜む者に在つては腫瘍性の酒齄鼻が多い。日本酒殊に下等の酒に至つては、燒酒過飲者と殆んど同じい結果を呈す。次に慢性の胃腸加答兒も重要なる原因をなす。併し胃腸病は多く酒の飲過より來るから、何れが其初因なるか了らぬこと、もあれど、更に亞爾箇保兒分を飲まぬ胃腸病者にも本病を發することが頗る多い。次に面部を屢々且つ長久しく寒冷に暴露してる者も酒齄鼻に罹り易い。されば職業の爲に寒風に吹かるゝ所から、酒力を以て身を暖め、其結果として慢性胃腸加答兒を發しつゝある御者・車夫及び露店商人等の輩に、酒齄鼻を起すことの多きは怪むに足らぬことだ。次に女子生殖器の障害卽ち月經過多或は欠乏或は子宮內膜炎者

に酒齄鼻を來すことが有る。最後に述ぶ可きことは甚だ稀では有るが、遺傳も亦酒齄鼻の一原因となることがある。

職業を變へた爲に治つた人がある。されば職業も變へるも亦一療法であらう

酒齄鼻の療法は如何——先づ第一に原因を除かねばならぬ。去りながら酒類の飲過が原因とならぬ胃腸加答兒や、女子生殖器の障害に在つては、其の原因を除くことが出來るけれど、慢性の亞爾箇保兒中毒や、職業の爲に寒風に吹かれねばならぬ者に在つては、其の原因を除くことが甚だ困難である。斯の如き場合には可成局處療法を施すより仕方は無い。局處療法を施せば十分の治癒を得ざるも幾分かは輕快するであらう。故に又原因療法を施すことの出來る者にも、同時に局處療法を行ふ方が可い。局處療法としては先づ十%の硫黄軟膏を塗擦するか、或は硫黄を含有せるイヒチオールも良効がある。或は又レゾルチン、亞鉛葉巴斯答(二と二〇の比例)を用ゐるも良効あるとのことだ。又白降汞軟膏を用ゐる人もある。併し此等の藥物では固より十分に血管擴張を治すことが出來ぬ。故に眞に奏効を欲するならば、外科的療法即ち縱徑の亂刺法を行はねばならぬ。又腫瘍を形造つてゐるものは之を截り除くが肝要だ。

火傷(俗にやけどと云ふ)

火傷を如何に區別するか——身體に作用したる溫熱、即ち熱湯、火炎或は化學的に依るも、其の强弱と此の作用の持續したる時間の長短とに從ひ、皮膚に種々の變化を起すものだ、通常之を左の如く三種に區別す。然れど此の區別は固より其の症候の主なる定型であつて、熱作用の强弱に從ひ、この度に從はぬのもある。

(1) **第一度の火傷は如何**——之を紅斑樣火傷と云ふ。皮膚が紅くなつて少しく腫れ、ヒリ〳〵と劇しい灼けるやうな痛みあるも、暫時にして其の赤い色が消え、微かに上皮が剝がれることも有れど、兎に角皮膚は全く常態に復す。此の度の火傷は、短時間に於て熱度の左程高からぬ液體或は蒸氣に觸れるか、左も無くば瞬時間火焰に觸るゝか、或は放射熱(例之ハ直火等)に由つて起るものである。

(2) **第二度の火傷は如何**——之を大水疱性火傷と云ふ。これは火傷の直後或は二三時間も經つてから、紅くなつた皮膚上に、小水疱若くは巨大の面積を有する大水疱が出來、其の內容は透明なる水樣の物で、上皮の薄い處では淡い黃色になつて映れども、上皮の厚い處例へば指の屈曲面、手掌・足蹠の如きは殆んど白い色

で、多くは稍々扁平の水疱を生ずるものだ。而して其の水疱の液は往々凝固することも有つて、好成蹟に行けば内容物を除いた後次第に全癒を來し、何の跡も無く目出度くなることもあるし、或は稍々強劇なる膿潰を起したる後、處々に瘢痕を留めて全癒することも有る。

(3) 第三度の火傷は如何――之を腐痂性火傷と云ふ。熱の作用が強いと、身體の表面及び深部に向つて、其の大部或は小部に腐痂を生じ、其の最も重症に在つては、皮膚ばかりで無く、皮下組織や筋肉乃至は骨までも侵し、時としては全體部を腐痂に陥らしめることも有る。而して其の痂皮は火傷の種類に從ひ、他の皮膚壞疽と同じく帶黄白色或は褐色或は黑色を呈はすこともあつて、其の痂皮は全く知覺機が無いけれども、其の火傷部に觸るゝか、或は之を動すときは、極めて劇痛を感するものだ。それより二三日の後には腐痂の周圍に限界性炎を起し、腐痂の大小に應じて、幾分の時日が經つた後化膿して腐痂を脱落せしめ、而して其の治癒は周邊より瘢痕を形造るものだが、甚だ廣大の火傷に在つては數月より長きは年餘に亘つて治るのがある。全身症狀は輕度の火傷でも、體表の大部分を侵さぬ限りは、著しいことも無けれど、重症に在つては縱ひ其の部面が狹小で在つても、大抵は四十八時間内或は往々之より以後に發して來る。乃ち體温は初め常温以下に降り、後大に昇り、煩悶及び譫語と昏睡狀態と相交代し、尿は全く止り、或は僅かに洩すもあつて、其尿中に往々蛋白又は血液を混じ、或は又各部の粘膜よりも血液を出すことが有る。尚之より重症の者に在つては、第一日以内に死亡を來すものだ。死亡の原因は多量の赤血球が崩壞し、及び血液中に其の崩壞物を充すからである。然れど或る人は血管緊張力の反射的減弱或は神經振盪が主要なる死の原因であると說いてゐる。又斯の如き重症で無くて、幾日も經つてから、往々死亡の轉歸を取ることもある、是れ或は衰弱が原因となつたり、或は血塞、血栓、其の他破傷風の如き偶發病が原因となるのだ。廣大なる部面を侵した火傷に於ては醜形を留める外に、往々彈力の缺乏及び瘢痕の強い收縮の爲め、著しい障礙を貽すことがある。例へば四肢の各關節が其の運動を障害せられたり、或は上膊が胸部に癒着し、或は頸が胸部に癒着し、或は手指及び足趾の間に蹼膜狀の瘢痕を造つて、之を連着せしめるやうなものだ。幼兒を有

つ親は大いに注意せねばならぬ。

火傷の豫後は如何――其の傷部が狹小で、而も輕度の火傷に在つては、何等の跡も無く治るけれど、傷部が稍々廣大なる者であるときは其の豫後は疑しい。其の第三度の火傷及び第一度でも全身の三分一以上を占むるときは始めより豫後の不良を斷言しても可い位だ。

火傷の療法は如何――最も輕症の者に在つては、唯單に冷水或は鉛糖水の冷罨法を施し、後ち十%の硼酸軟膏を塗擦しておけば其れで可いが、水疱を作つてる火傷に在つては、亞鉛華粉を撒布して、其の滲出液と共に乾燥し、以て保護性の覆蓋を形造らしめるか、或は綿花を以て被うておかねばならぬ、又大なる水疱は其の最も低い部に於て之を刺し、水を洩さねばならぬけれど、其の疱膜は可成保存するが肝要だ。而して其の部に亞麻仁油に等分の石灰水を和したる罨法を施すことも亦適當の法である。重症の火傷に於ては、部位に由り撒里矢兒酸溶液を用ゐて、制腐性繃帶を施すべし。患部較々廣大なるときは、持續的の水浴を施すは最も便宜で、患者は灼けるが如き痛みを減じ、甚だ爽快を覺ゆるものである。

此の水浴療法は、化膿期に於ても、他法に比して創面を清潔ならしめるの良効がある、水浴の温度は列氏の二十五度乃至三十二度位で、水は一日に是非二回は取り代へねばならぬ。又腐痂の既に脱落したる後は、硼酸軟膏或は沃度仿謨軟膏硝酸銀軟膏或は其溶液を用ゐて繃帶を施し、或は固形の硝酸銀を以て腐蝕するが可い。但し火傷の廣大なる者に在つては、創面より銀質を吸收して皮膚銀色を起すことが有るから、注意せねばならぬ。而して其の局部には綿球を置いて兩部が癒着するを豫防することも必要である。又廣大なる火傷には植皮術を施して、能く其の治癒を促す可き必要もある。內用藥としては亞爾箇保爾製劑或は他の亢奮藥を與へ、煩悶甚しき者には少量の莫兒比涅を投ずることもある。

尙、第二度第三度に塗布す可き處方を左に掲げておかう。

白礬土　阿列布油　各三〇・〇　右塗布

硝蒼　九・〇　硼酸　四・五　刺納林　七〇・〇　阿列布油　一〇〇・〇　次醋酸鉛液　二〇・〇　沃度仿謨　八・〇　右塗布

凍傷（俗に言ふ、ヒビ、アカギレ、シモヤケも此の中に含まる）

凍傷とは如何――非常なる低温度が、皮膚に作用を及ぼす病で、其の症狀は皮膚に高温度が作用すると、全く類似の變化を呈はすもので、亦之を分けて三度と爲す。即ち紅斑性凍傷、水疱性凍傷及び膿痂性凍傷と名づく。第一度の凍傷は最も屢々寒冷に曝露せらるゝ部分、即ち耳、鼻尖、手足に於て、周邊の境界明かならぬ藍赤色の充血部が出來、其の部は劇しく灼るやうな痛みと痒みを起し、殊に凍傷部を温むれば、其の感覺が一層甚しくなる、而して該部の皮膚は腫れ脹れ、遂に慢性に陷るときは浸潤を起し、限局せざる扁平の結節を呈するに至る、之を凍瘡と云ふ。此の結節の中央に於て頑固の潰瘍を起すことが多い。若し此の結節が關節上或は二指の間に出來ると劇痛ある所の皸裂に變ずるものである。凍傷を生せしむる寒冷の度は、人に依つて異るもので、其の素因ある者に至つては零度以上の寒冷に逢ふても、其の害を被むるのがある。殊に年少者及び貧血家を冒すものだ。又循環障害及び榮養障害を起せる者の本症に罹り易きことは半身麻痺症に於て、健側よりも麻痺側に凍瘡を生ずるに由つても知らるゝ。其の

他職業も亦固より著大の關係がある。殊に寒冷或は刺戟性の液類を取扱ふ者は最も凍瘡に罹り易い。彼の下女や漁夫等の手に凍瘡を生ずるの多きは、人の能く知る事實であらう。而して一たび凍瘡に罹れば數年間再發し易いものだ。重症の凍傷に於ては、赤くなつた皮面に漿液性若くは血液性の水疱を發し、或は其の部の皮膚が全く壞疽狀を爲し、皮下の諸組織を侵し、甚しきは骨にまで及ぶことがある、又腐痂には往々水疱と合併することもある。斯の如き凍瘡に於て、耳は其の皮下組織の緊張性を有するに由り、劇しき榮養障碍に罹り易く、且つ耳翼の大部或は一部は壞疽狀を爲して脱落すること少く無いが、四肢の凍瘡に在つては、其の壞疽狀部の脱落が極めて緩慢で、腐敗性物質を血中に取り、以て膿毒症に陷いるの虞れがある大いに注意せねばならぬ。兎も角、斯る重症の凍瘡は非常の低温度なるにも拘はらず、久しく戸外に在る場合、或は雪中に身體を沒したる時、或は酩酊して人事不省になれる時などに發するもので、甚しきは一命を失ふこともある。

凍傷の療法は如何――最も輕症の凍瘡には醋を以て酸性と爲せる温湯或は格

魯兒石灰を加へたる温湯を以て手浴なり足浴なりを行ふが可い。其他石油の塗擦古魯胄謨或は沃度丁幾の塗布も良効がある。潰瘍及皺裂の出來たるものには硝酸銀の腐蝕法を行ふか、或は硝酸銀及び百靄扳爾撒謨の軟膏を貼けるが肝要だ。又リーブライヒ氏はカンフル油一・〇ラノリン一〇・〇の軟膏を賞用した。次に斯の如く外用藥を用ゐると同時に、全身狀態に注意し、又豫防法を施すことが極めて緊要である。卽ち先づ貧血狀態を呈する者には、之に適當の療法を施さねばならぬ。豫防法としては温暖の時季より、豫て冷水浴及び冷水摩擦を行ひ、皮膚の抗抵力を作つておくことが何よりの必要である。斯くて寒冷なる時季になつたら、身體を温包して、未發を防ぐが可い。全體これに罹り易い下婢の輩は第一に不性では不可ぬ。濡れた手を風に當てたり、冷いからとて直ちに火に當てたりしてはならぬ。されば水仕事をする者は常に乾いた手拭を腰に着けおき、手を濡したる度に能く拭ひ、劇しく兩手を摩擦して、少し温みのついた所で、外出するとか、火に當るとかすれば、大いに豫防となるものだ。尙それでも危ふしと思ふ人は摩擦したる後豚脂を少し許塗つておくが宜い。次に重症

の凍傷卽ち雪中に倒れてゐる樣な人を助けるには、始め寒冷なる室に移し、それより徐々に温暖なる場處に患者を運び、雪を以て身體を摩擦すること肝要だ、又四肢に於ける劇甚の凍傷には懸垂法を施し、血液循環の回復を促さねばならぬこともある。又手指或は足趾の壞疽に陷りたる者には、適當の部分に於て截斷法を施すが最も可い。

皮脂漏

皮脂漏とは如何——皮脂漏とは幾分か大なる容積に於て、皮脂腺より上皮に過多の皮脂を分泌するを云ふ。この症は皮脂腺の存する所には現はれるけれど頭髮及び顏面部には殊に多く出來るもので、手掌や足蹠には決して發することが無い。而して其の分泌液の性狀には、軟腫樣で寧ろ液狀に近きものも有れば、又稍、硬くて主に乾燥せる上皮細胞を含有する者もある。故に之を區別して二種となし、前者を油性皮脂漏と云ひ、後者を乾性皮脂漏と云ふ。

(1) **油性皮脂漏**——これは鼻及び額部を侵すこと最も多く、又頭髮部に之を發することも有る。而して其の皮膚は宛も油を塗布したるが如き光澤を呈し、小刀

の背を以て、其の部の皮膚を摩すれば、油狀の物質を掻き取ることが出來る。

(2) 乾性皮脂漏――これは乾燥したる脂肪性の脆い實質が積るの謂で、頭髮部に於て最も多く、顏面・鼻・眉毛部・上唇之に亞ぎ、卽ち此の部に脂肪及び乾燥せる上皮細胞より成れる類白色の鱗屑が出來、而して其の鱗屑片の多少及び乾燥の度に隨ひ、或は皮膚に固着するのも有るし、或は自然に又は櫛梳る等の爲に頭部より落ち、白色の塵埃狀を爲して、衣服を覆ふことも有る。又、較、劇症の頭部乾性皮脂漏に在つては、頭皮に瘙痒を覺ゆるものだ。此の病は大抵春機發動時に發し、それより幾久しく治らぬものだ。男子の此の症に罹る者は女子に比ぶると、其數は遙に多い。去りながら一二歲の小兒に於ても亦屢、頭髮部に乾性皮脂漏を起すこともある。

皮脂漏の療法――「ふけぐし」鑛線製の刷子等を以て頭皮を掻くなどの器械的刺戟は總て之を避けねばならぬ。最も迅速に白屑を除くには、最初は每日、後には數日を隔てゝ夜間頭皮に亞爾加里性液を塗擦するが宜い。それには重炭酸那篤個謨三・〇、水一七〇・〇、倔里設林・刺賢垤爾精各一五・〇の液、或は安母尼亞水・倔里設林各一〇・〇、薔薇水一八〇・〇の液を賞用し、兼て又每週二三回微溫石鹼水を以て頭部を洗ふことが肝要だ。但し其の際頭髮が極めて乾燥し、且つ硬く爲るときは、尋常の髮油を用ゐるも可い。又硫黃軟膏を用ゐるも良効がある。而して如何なる場合に於ても、本病の療法は數週間之を續け、且つ後日に至るも其の再發を防ぐために、時々反覆して之を施さねばならぬ。これにて普通の皮脂漏を說いたが、尙序に特別の皮脂漏も述べておかう。

陰部に於ける局部の皮脂漏は極めて特異の症狀を現はすもので、之が爲に誘はれたる病態、卽ち龜頭炎及び外陰炎は特別に之を述ぶ可き必要がある。卽ち龜頭及び包皮內葉の分泌が增して、液狀の分泌物を出し、遂に澁つて滯り、其の洗滌を怠るときは、體溫の力を藉つて益、其の分解を來し、分解せる分泌液は龜頭の表面及び包皮內葉に刺戟作用を逞うして而して此の部の皮膚は普通の體皮よりも遙に軟かで且つ薄い爲に、容易に炎症に陷り、糜爛れて稀薄なる膿狀の液を分泌するやうになる。乃で此の膿狀の液は、皮脂腺分泌物と混り、且つ同時に包皮が腫れ脹るゝ所から、其の炎症も亦益、增し、劇症に於ては龜頭面及び包皮內葉の一

大部分或は全部に於て、上皮層が剝がれて赤色を呈はし絶えず悪臭ある多量の膿液を分泌す。其の始めは通例唯痒く、且つ幾分灼ける如き感を起すに過ぎぬども、病勢の増進するに從ひ、劇痛を發するに至る。又知覺鋭敏の患者に在つては、啻に龜頭のみならず鼠蹊腺にも疼痛を帶びたる腫脹を起すこともある。婦人に在つては較、稀に小陰唇及び挺孔に於て同樣の病狀を發することもある、種種の疾病即ち淋疾・軟性下疳・第一期梅毒及び梅毒性糜爛に因する分泌物が刺戟作用を逞うする所から、全く上記の症と同一の病態を誘ふことも有る。其他糖尿病に於ても往々龜頭炎及び外陰炎を發することが有る。此の場合に於ては多くは炎症部に類白色の物質が出來る。其の物質を顯微鏡下で檢すると其の黴菌より成るを認むるであらう。故に若し苟往治らぬ症に逢はゞ、其の糖尿病で無きかを調べて見ねばならぬ、其他糖尿病ならざる黴菌性龜頭炎或は外陰炎を起すことも有る。此の場合に於ては炎症部は白色の小點を以て被はれ、此の者は迅速に擴大し、且つ融合し、周邊には新鮮の病竈を作る。之を顯微鏡下で檢すると、此の白色質は多くはライジウム・アルビカンスから成るを見る、婦人に在つては、此の堆積物が廣く蔓延して遂に全外陰及び腟は一面に此の白色質を被ひるに至ることが有る。而して本病は甚しい瘙痒及び灼けるが如き感覺を起すもので、殊に婦人は甚しい、然れど病機は常に淺表性のもので、消毒性の藥液で洗ふか、或は灌注すれば深部の炎症を起すこと無くて治るものである。

龜頭炎の診斷——龜頭炎の診斷は實に困難なるものである。何となれば包皮匐行疹・軟性下疳・第一期原發性梅毒及び第二期梅毒の糜爛と誤診し易く、又痳病とも誤認することが有るからである。殊に此等の諸病は龜頭炎若くは外陰炎と合併することが有るから益、困難である。併し其の鑑別法に至つては、梅毒痳病等の研究が濟んだ後で無ければ眞の說明は出來ぬ。

龜頭炎の療法——清潔法・乾燥法及び健全皮膚と患部との觸接を防ぐことが肝要である。乃ち之を行ふにも、最も簡易で最も速効あるは日々陰莖を微溫湯に浴せしめ、婦人に於ては坐浴を命じ、兼て毎日二三回硼酸を撒布するのだ。此の方法を施すと、大抵は數日で龜頭炎或は外陰炎を療治することが出來る。但し其の腫脹の甚しきものに於ては鉛糖水の罨法を爲すが宜い。本病の再發を防

ぐには常に患者をして陰部を清潔ならしめ、且、殊に乾燥の狀態に保持せしめねばならぬ。即ち之を乾燥するには毎日怠り無く硼酸の撒布をなすのである。

面皰（俗に之をニキビと云ふ）

面皰とは如何なる病か――面皰とは皮脂腺からの分泌物が積み重つて遂に濃厚になる所から本病になるのである。即ち擴大せる皮脂腺口に、黑色或は青みを帶びたる黑色の小點を呈はし、其の邊緣は大抵少し隆くなつてるけれど、時には此の黑點が此の邊緣を超えて出で、恰も其の尖端であるかの如き狀態を呈はすことも有るし、或は又其黑點が細小なる凹んだ窩の底に存することも有る、而して側方より之を壓すと容易に面皰栓を出すことが出來る。此の栓は白色或は汚い黃色を呈する細い圓筒狀の小體で、其の長さは一乃至數密迷で、黑い色の頭が有り、其の形は小さな蠕蟲に似てゐる。之を顯微鏡で檢査すれば、此の物質は角質化せる細胞と脂肪化せる細胞と、及び遊離せる脂肪滴とから成つてゐて、黑色の頭部には、炭分子や外部から入り込んだ他の不潔物を含んでゐる。又其の他、毳毛や寄生蟲即ち毛囊蟲を發見することがある。此の寄生蟲は頗る多數に存在することが有れど、元來毛囊蟲は全く健常なる腺中にも發見することが有るから、之を以て面皰の發生に就き、原因的の關係ある者と看做すことは出來ぬ。又、往々皮脂腺の排泄管は開通してゐるけれど、分泌物が益、蓄積して大いに擴張を來し、其の大さ櫻實大に至ることが有る。乃で此の腫瘍を壓迫すると、初めは腺口を塞いでる黑色の面皰栓が迸り出で、次には稠い長い腺狀を爲せる脂肪が腺口より排出する者である、之を特に巨大面皰と名づく。又或る場合に於ては面皰栓が著しく硬くなり、暗褐色の尖つた隆起が出來、それが通常集まり簇つて生ずるのもある、之を佛蘭西の醫家は角樣粉刺と名づけてゐる。面皰の出來る部位は鼻上、鼻唇溝、頰の側部、額部、耳翼の內面が最も多いけれど、亦他の部分即ち背部や胸廓中央部に生ずることも亦甚だ多い。而して面皰は何人も知る如く通例春機發動期の年齡に發するものだ。此の點から考へて見れば、此の時期は皮脂腺の機能が盛んで、爲に面皰を造る第一因となるのであらう。

皮膚色の淺黑い人に發し易いのは如何なる理由であるかが了らぬ

面皰は春機發動期が濟むとか、或は又自然に排出して自然に治ることも有れど、其の鬱積する分泌物より、腺及び其の近邊に作用する刺戟の爲に、皮脂腺の炎症

を來し、膿疱を作ることがある。縱し又膿疱を造らぬにしても、多數に面皰が出來て、それが長久しく治らずに在ると、皮膚が暗褐色になつたり、或は色素斑が出來て、著しく醜容を來すものであるから、可成早く左の療法を施さねばならぬ。

面皰の療法――一旦發生したる面皰を取り除くには、器械的の方法を以てするが最も良い。即ち兩手の拇指の爪、或は面皰挾壓子といふ器械を以て壓迫するのだ。該器は上下に開いてる短い金屬製の小管で、其の側部に一つの小さな柄が着いてゐる。面皰の再發を豫防するには、加里石鹼精を以て洗ひ淨め、或は硫黄を軟膏若くは乳劑と爲し、或はレゾルチンを應用するも可い。此等の藥物は最上部の角質層を剝脱せしめて腺口を擴げ、以て皮脂の排泄を促す所の効を奏するものである。尙二三の處方を左に揭げておく。

▲沈降硫黄　一二・〇　カンフル　一・〇　アラビアゴム　六・〇
薔薇水　一〇〇・〇　石灰水　一〇〇・〇

右の處方藥を瓶に入れておくと、上は水液になり、底に沈澱が出來る。乃で其の水液を晝間塗けて、沈澱物を夜間塗り、翌朝洗ひ落すが可い。

▲レゾルチン二・〇　白色酸化亞鉛　小麥澱粉各五・〇　黄色華攝林一〇・〇
右混和夜間塗布

多汗症（腋臭も含む）

多汗症とは如何――全身過度の發汗、即ち過度の勞働、外氣の高温に對する調節的の發汗、諸般の熱性病殊に其の減退期に於ける發汗、或る血液循環の障碍、神經系統の亢奮及び疾患に於ける發汗等の如く、生理的或は病理的狀態に於て發生する汗は、皮膚科に屬せぬから、茲には之を述べる必要が無い。されど局所多汗症殊に手足・腋窩・肛門の周圍・陰部・顏面即ち鼻及前額に多く發する者、及び頭髮部に來る者等は茲に之を詳論せねばならぬ。

手掌足蹠多汗症――手や足に汗が多く出たからとて、何の苦痛も無いでは無いかと思はるゝやうなものなれど、之に罹つてる患者の身に取つては、極めて不快を感ずるものである。それは兎もあれ、手の掌及び足蹠は汗腺に富んでる場所であるから、此の病に最も侵され易くて、輕微の症でもベタ〳〵と濕ふ感覺が有り、外氣の冷いときは、殊に甚しく覺ゆるものだ。其の重症に至つては汗液が恰

も露の如くに滴るのがある。歐米人は握手の禮を爲す所から、本人も之を憚るし、他人も斯の如き人と交際を避け、爲に從來親しかつた人も、遂に相愛の熱情を減ずるやうに至る。我國は斯く如き惡風は無いけれど、之に罹れる人は、物體を持つと、汗液中に含まるゝ脂肪成分の爲に汚點を留め、大切な物を取り扱ふことが出來ず、人に依つては遂に其の職業をも拋たねばならぬやうになることがある。而して此の局所發汗は、身體の勞働時並に精神の興奮時に益、多く分泌するもので、足に於ては足袋、靴下などに由つて、蒸發を妨げられてるから、尙ほ其の病狀を重からしめるものだ。即ち其の皮膚は永く濕うてる所から、上皮が膨脹したり軟化を起したりして、足趾の屈曲面、及び足趾と足趾との間に白色を呈し、遂に表皮が爛れたり、皺裂を生じたりして、其の揚句に疹痛を起し、其の運動を妨げらるゝやうになる。而して清潔法を懈らぬ者に在つても、局部に滯つてる汗液や、足袋及び靴下などに吸收せられたる汗液の分解するために、極めて厭ふべき臭氣を放ち、本人自身はこれに慣れてるから、左程に思はぬも、其の周圍の者には堪へざらしむる程の甚しき症がある。

左に腋臭の處方二三を掲げて本文の不足を補ふ

○右塗布
▲撒布
里矢爾
小麥滑石
酸化亞鉛
四五・〇
三・〇
五・〇

○右塗布
▲單寧酸
酒精
二・〇
一・〇

▲二五倍ラノリン
○・〇ラノリン
撒布
十五倍フルヴァ
○・〇ワセリン
水
○・〇

○右塗布
ヴァセリン
一・〇
○・〇

腋窩肛圍及陰部に於ける過度の發汗――これも亦分解に陷り易いもので、其の惡臭を發する譯は、此の部位に於ける汗腋に、多量の脂肪成分を含んでるからである。又、此の部位に於ても、皮膚の皺襞間に汗液が溜つて、相對向する皮膚面の觸れる局部或は衣服の皮膚と相接する部位に於て、糜爛を起し、遂に所謂濕潤性濕疹を續發することがある。

多汗症の原因――眞の原因は未だ研究せられて居らぬが、兎に角健康者や少壯者の之に罹ること多きは、何人も目擊する所であらう。又精神的作用は重要なる原因を爲すことは疑ひ無い。敬ふ可き人の前とか、或は式場とかに出るやうな場合には、汗が多く分泌して、紛々臭氣を放つを以ても知らるゝでは無いか。

多汗症の療法――歐洲では、足汗を治すと、內部の臟器に害を及ぼすものだとの俗說があるけれど、斯道の學者が注意して之が正否を觀察したるに、全く無根據の說たることが確定せられたのである。乃で療法の第一着は清潔法である、清潔法は湯水殊に冷水を以て屢、其の部を洗ひ淨めるは云ふまでも無く、衣服類も度々洗濯せねばならぬ。第二には過度に分泌する汗液を迅速に除くやうにす